

ファミ通エンタテイメント大賞 **二次通過**

『スプリント&ドリフト』

原稿用紙換算276枚

新高太郎 著

プロローグ

腕が千切れて、投げた球と一緒に飛んでいきそうな錯覚さえ覚える。肘も肩も限界だった。いや、限界をとっくに越えていた。

菱谷圭一は呼吸も荒く、マウンド上に立ちつくしていた。膝を押さえて背を丸めないのは、まだ余力を残しているからではない。一度その姿勢をとってしまえば、二度と顔をあげることも出来なくなる。それだけだ。

もはや額に浮かぶ汗は、湿気を含んだ蒸し暑い空気ではなく、体の中から沸き上がってくる苦痛によってもたらされていた。目を強く閉じ、肩の痛みをこらえる。遠のきかけそうになる意識を集中し、息を吐きながらゆっくりと目を開ける。全てが白っぽく見える夏のグラウンドが、次第に視界の中ではつきりとした輪郭を伴ってくる。スタンドの歓声が、土埃の匂いが、そして頬を伝う汗と乾いた口の感触が、一度に自分の手元に戻ってくる。

キャッチャー・成田猛が圭一の疲労を察したらしい。腰をあげ、主審にタイムを要求する。外したマスクを右手に持ち、装具を鳴らしながらガニ股でマウンドまで駆け寄ってくる。それを見て、内野陣も圭一の元が集まってくる。

「大丈夫か？」成田の無意味な問いに、圭一が皮肉げに口の端をつり上げる。

「大丈夫やなくても、他にマウンドを任せられる奴がおらんやからな」

事実だった。彼らの野球部に、まともな控え投手は存在していない。

九回裏。スコアは二対一。わずか一点のリードを守っている。ツーアウト、ランナー一塁。あとワンアウトで勝てる。だが、全く安心出来なかった。

「それもそうや。……要は、奴をどう抑えるか。策はある

か？」

成田が大きな顔を歪めてうなずき、打席でだらりとバットを下げて試合再開をまつ相手チームの四番打者のほうに顎をしゃくった。身長百九十センチ体重九十キロという巨漢の長距離砲。まだ二年だというのに、高校通算本塁打は四十二本を数えている。

「策ねえ……」圭一が呟く。

敬遠も可能だ、と成田が匂わせているのは判った。普段であれば真つ向勝負を好む圭一は即座に拒否しただろう。

だが今は、甲子園出場を賭けた地区大会決勝戦の大詰めなのだ。強気ばかりで押す訳にもいかなかった。

「低めに集めて、ボールの上つ面を叩かせろ」

主将である遊撃手・羽島康行が、静かではあるが決然とした声で圭一と成田に指示を下した。歩かせろとは言わなかった。言葉を返しかねている圭一に、さらに一言。

「ボールが転がれば、死んでも止めてみせる」

成田とは違い、細面で伶俐な印象の強い羽島が言い切ると、つられるように、苦楽を共にしてきた内野陣も口々に俺のところに打たせろ、と圭一を励ます。

「よし。こいつを討ち取って甲子園に行こう」

圭一が気力を取り戻したように強い調子で断言する。彼を取り囲んでいた選手たちが凄みのある笑みをみせ、それぞれの守備位置へと戻っていく。

やるぞ、なんとしても。圭一は萎え掛かっていた闘志を奮い立たせた。この試合、勝つ。勝てる。俺たちは勝つのだ。左手にはめたグラブで己の頬を打つ。痛みとグラブの皮の匂いが一度に頭の中に染み込んで来て、ほんの一瞬ではあるが、酷使の末にすっかりガタの来た右肘の痛みを忘れた。

試合が再開される。成田のサインは、外角低めへの速球。

これが綺麗に決まれば、打たれはしない。問題は、自分にそれを投げられるだけの余力が残っているかどうか。圭一は洪い表情でサインにうなずく。

一度右肩をぐるりと回してから、モーションを起こす。

ふと自軍ベンチに視線が流れた。

監督が難しい顔をして睨んでいる。圭一に全ての試合のマウンドを任せ、彼の肩を爆発寸前の状態に追い込んだ張本人ではあるが、少なくともこの瞬間は恨みを感じない。

監督がいてくれたから、戦力で比べれば並み居る強豪校に対してあきらかに一段劣る自分たちがこうやって地区大

会決勝戦まで駒を進めることが出来たのだから、と。

そして、もう一人の地区大会決勝戦出場の立て役者が、観客席の最前列に出て、フェンスから身を乗り出すようにして怒鳴っているのに気づく。

「ここで逃げたら一生後悔するんだからね！ 思い切って勝負しなさい！」

マネージャー・出浦純の声は、大応援団の太鼓と野太いかけ声にかき消されてほとんど耳には届かなかった。だが、圭一達の心には、はっきりと聞こえた。

圭一は、頬に歪んだ笑みを刻んだ。そっだ。俺たちは誓ったのだ。自分たちの為だけじゃない。彼女を甲子園に連れていくため、勝ち続けると。

これが高校生活最後のマウンドとなるかもしれないのだ。どんな強打者だろうが、逃げはしない。ここで勝って、甲子園に行けるのなら、この右腕の一本くらいくれてやる。

セットポジションから、圭一の左足がまっすぐホームベース方向に向かって踏み込まれる。小さくテイクバックされた右腕の肘が旋回し、ボールに体重を乗せて振り抜かれる。

手首のスナップによってバックスピンの与えられた白球は唸りを立て、ストライクゾーンに突き刺さる。その筈だった。

次の瞬間、金属バットの閃撃がボールを真芯に捉えていた。打球音が響きわたり、打球はライトスタンド中段に叩き込まれていた。観客のざわめきが四方から押し寄せてくる。圭一達にとって、最後の夏が終わった瞬間であった。

第一章

春・三月。

コートを手放せない時期がいつの間にか去っても、必ずしも心が浮き立つとは限らないな、菱谷圭一は一瞬、そんな事を考えていた。

場所は、JR新大阪駅から西へ歩いて十分ほどの場所に位置する、雑居ビルの四階『瀬川接骨院』の院長室。その執務机の前に据えられた応接席である。

整体・マッサージ等、運動生理に関わる事を広く手がける接骨院の主、瀬川重和は、かつてはプロ野球チーム・難波ハーキュリーズのストラッガーとしてならした男だった。

すでに老人と呼んで差し支えない年齢を重ね、頭髪は白く

なっている。が、小柄ながらもたくましい体躯と時折覗かせる鋭い眼光には、かつての面影が感じられた。

今では、競技種目によっては全日本チームの選手クラスの治療を何度も手がけていて、スポーツ障害治療の名手とされる事が多い。

圭一は彼の元で、一人前のトレーナーとなるべく、日々教えを受けている。もつとも、弟子といえば聞こえは良いが、扱いかからすれば、雑用係と呼ぶべきであろう。

圭一が瀬川と初めて会ったのは彼が高校三年の夏のこと。野球で身体を痛めた選手の治療に実績があるという噂を聞いて足を運んだのがきっかけで、さして劇的な要素はない。

肩と肘、その両方に故障を抱えた圭一の治療は長引き、何度も足を運ぶ間に、助手が見習いのような立場になっていたのだ。あるいは、瀬川のほうで、結果として治療しきれなかった事に対する負い目を感じて手元に置いているのかもしれない。

一方、圭一は体育大学を卒業して四年になる。大学時代は選手として参加できないために野球部のマネージャーをこなす傍ら、瀬川にも教えを請うていた。

卒業後、トレーニング指導士や公認アスレティックトレーナーといった日本体育協会などが定めた公認資格こそいくつか取得していたが、まだまだ半人前扱いである。当然ながら給料も安い。駐車場付きであること、接骨院から歩いて通える距離にある事以外に取り柄のない、六畳一間の安アパート暮らしであり、学生時代とほとんど生活水準は変わらない有様だった。

それでも、圭一はこの仕事に巡り会ったのは天職と考えている。まともなコーチがいなかったために肩を痛め、高校で野球を辞める羽目になった。その無念を後身に味あわせたくないとの一念があるから、こうしてトレーナーとしての知識を身につけるべく修行に励んでいるのである。

折しも、接骨院には客が訪れていた。それも瀬川に対してではなく、圭一に対して。高校時代の野球部の同輩、成田猛である。当時のポジションはキャッチャー。圭一とバッテリーを組んでいた。

今は、スポーツ関係を専門にしたフリーのカメラマンをやっている。圭一同様、まだまだ駆け出しではあるが、こちらは持ち前のタフさで体力勝負の仕事を多くこなし、それなりの評価を得ているという。ややエラの張った、それこそホームベースのような形状をした顔の骨格だけで、元

野球部だと判ってしまいそんな雰囲気がある。

「何か言ったか？」

つかの間、成田を前にしてほろ苦い過去を思い返していた圭一に、隣の席に座る瀬川が、どこか粘つくような声で訊ねた。

「いえ、別に。こいつが来ると、ろくな事にならないような気がして」

「随分な言われようやな」机を挟み、圭一の対面の席で成田が顔をしかめていた。

「で、依頼って？」

成田の文句を聞き流した圭一は、接骨院におけるただ一人の従業員でもある瀬川の妻・芳江が入れたお茶を一口すすって、尋ねた。

渋い顔をしているのはお茶のせいではない。かつて、圭一は成田に仕事柄と高校時代の同志という二重のつきあいから、割の合わない仕事を何度かさせられているのだ。

「そう言うなや。ま、これを見てくれや」

普段はどこか締めりのない顔をしている成田が、珍しく真面目な顔で手帳に挟んであった写真を取り出し、机の上に置いた。圭一と瀬川が写真を覗き込む。

陸上競技用のユニフォームに身を包んだ、髪の毛の短い女の子の姿が写っている。

雰囲気からして、何かのトラック競技で走り終わった直後に撮影したものらしい。カメラを意識していない分だけ、自然な顔つきをしている。ただ、女性にしては割と眉が太い方なので、一見すると少年のようにも見える。

「水沢穂。讚輪大学附属高校の二年生。春から三年生ってことやね。陸上部所属。実は、俺の遠い親戚でもあるんやが」

「みずさわみのる……。名前まで、男みたいだ。で、彼女がどうかしたのか？」

「去年十月の記録会で、百メートル走で十一秒八の記録を出した」

「おい、ちょっと待て。いきなりな話だな。日本の女子記録は確か……」

圭一が再び口元に運びかけていた湯飲みを止めて、成田の言葉を聞きとがめる。

「十一秒四八。高校女子やったら十一秒六一」

あらかじめ調べていたらしく、成田は細かい数字を口にした。圭一の隣席で、やりとりを見守っていた瀬川がほう

と声を出した。圭一もまた、興味を惹かれたのは事実だった。見せられた写真を手に取り、ひらひらとさせながら問う。

「凄いいじゃないか。まだ高校二年なんだろうっ。」「これから、まだまだ伸びそうだ」

「と、誰もがそう思う。そうは問屋が卸さへんから、こうやって話をしにきとる」

「何か問題が？　まさか、実は男だった、なんて言うんじゃないだろうな」

圭一の軽口を成田は真に受け、目をむいた。

「冗談やない。確かに彼女は胸は小さいけど、可愛い嬢ちゃんや。会ってみれば判る」

どさくさにまぎれて失礼なことを口にする成田に、圭一は軽く頭を下げる。

「すまん、言ってみたただけだ。で、実際、何に困っているっ」

「モチベーション、ちゆうこっちゃんね」

「つまり、やる気がないって事か？」

「せや。誰もがうらやむ才能と素質の持ち主やのに、真面目に練習しようとせえへん。試合も面倒臭がつて出ようとせんのや、これが。現に、この成績を収めたにも関わらず、翌週の大会はキャンセルや。大会の日に、友達と映画を観に行く約束があった、ちゆうてな」

成田の言葉は、圭一にとっては奇異に感じられた。自分なら、それほど才能に溢れているのなら、なんとしてもよりレベルの高い大会に出場して、その実力を世間に知らしめたいと考えるだろう、と思う。しかし同時に、近頃の女子高生が考えることは良く判らんからな、と安直に結論を導き出している。

「個人の自由だからな。やる気がないので、無理にやらせるわけにもいくまい」

「冗談やないで」成田は同じ台詞を繰り返した。「俺は、今までぎょうさんのアスリートを見てきた。せやけど、彼女ほど素晴らしい身体能力を持つとる女子選手は見たことがあれへん。今の女子陸上いうたらマラソン以外、まるで国際レベルに達せへんお寒い状況や。この娘はその現状を打破出来る力を持つとるんや。こういう選手が核になって、陸上競技全体を引っ張っていかなあかん。これは、個人の問題を超えとる」

身を乗り出し、唾を吐き散らして力説する成田。圭一は迷惑げな表情でそれをなだめる。

「随分な入れ込みようだな。ま、落ち着けよ。で、どうしたいんだ」

「彼女にやる気を起こさせて欲しい。それだけや。それをお前に頼みたいんや」

成田は言い、それまで口を付けていなかった緑茶を一気に飲み干した。その態度には、伝えるべき事を伝えた以上、自分の役割は終わってあとは全て圭一の仕事だ、と言わんばかりである。

「俺が？ 俺はただのトレーナー見習いだ。陸上なんか判らない。カウンセラーでもない」

「なにもコーチをしてくれとは言っていない。やる気さえ出せば、勝手になんぼでも伸びる素材やさかいに」

「だけどな……」

「先生はどない思います？」

良い返事を寄越さない圭一を前に、成田は瀬川の線から攻める算段に出た。圭一の治療の付き添いとして何度も足を運んだ事があるため、互いに顔見知りだという気安い口調で訊ねる。もっとも、相手が誰であるうと成田は遠慮したりしないが。

「……そうじゃな」瀬川はうつすらを髭の浮いた顎を撫でた。その目は、ある一定の域に達した武道家のように茫洋としている。「それほど逸材であればトレーナーも必要だと、僕は思うがな。ただし、悪い話じゃない。圭一が自分の領域をわきまえていれば、の話ではあるが」

それを聞いて、賛同が得られたと判断したのか、成田が喜色をあらわにする。対照的に圭一は返答しかねて眉間にしわを寄せる。

「まったく……。予想通りだな。面倒な話を持ち込みやがって。そんな逸材を俺に預けて、もし駄目になったらどうするんだ」

「心配あらへん。俺はお前を信じとる。何度も言うけれども、必要なのは専門技術やない。熱意や。情熱や。お前やつたら出来る」

成田が自信ありげに断言する。圭一はその根拠を計りかね、やれやれと首を振る。

「ところで成田君。指導を行う以上は、相応の契約をする必要がある。カネは心配ないんだろっかね？」

瀬川が穏やかな声音で言った。見習いだろっが助手だろっが、何か指導を行う以上ははれつきとした仕事である。相応の報酬を貰わねば食べていけない。

「まあ、その、一応は」成田が顔をしかめる。それをみて、圭一のほうが再び眉を寄せる。

「またタダ働きさせる気か？」

「また、って言うな。じゃあない。これは俺からの依頼です。なんぼ払うたらええです？」

苦々しい声音で言った成田の顔を、圭一はまじまじとみつめた。自腹を切っても、と入れ込んでいるとまでは思っていないかったのだ。

瀬川と成田が細かい契約の話を進めるのを、圭一は半ば他人事のように眺めていた。なんの実績もない自分がコーチをする、それも女子陸上の選手を相手に。実感が湧かない。いったい何をさせようというのだろう。それ以前に、いったい何が出来るといえるのだろうか。

「会えばきつと判ると思うけどな。努力を超えた才能ってやつが存在を思い知らされるでえ。見て損はあらへん」

成田の自信に満ちた断言ぶりに、圭一はふうと息をついた。

「まだ俺は指導する事に決めた訳じゃないからな。とりあえず会ってみるだけだ」

私立星ヶ丘学園高校の野球グラウンドでは、春休みを前に、空気の温みを待ちかねたかのように、紅白戦が実施されていた。冬の間、走り込みやウエイトトレーニングが重点的になっていた為か、選手の動きには開放感を感じさせる伸び伸びとしたものがある。

とはいえ、勘が鈍っていないとも限らない。怪我が出やすい時期でもある。圭一がこの紅白戦を観戦しているのは、単に野球部監督・羽島康行が成田同様に、高校時代の野球部のチームメイトだから、というだけではない。何かあった時に、すぐ応急治療が出来るように、と羽島が招いたのだった。そして圭一には、もう一つの思惑があった。

「新入部員がどうか判らんが、今年の連中は、今までの中で最強の布陣が組めるはずだ」

羽島はトレーナーとして待機する圭一をバックネット裏に誘って、少しばかり誇らしげな口調で言った。彼も圭一同様、泥臭い大阪弁でがなりたてることをあまり好まない。

かつて圭一などが夢見た甲子園出場を、指導者の立場で実現するべく、日々努力を傾けている羽島に、羨望に近いものを圭一は感じる。

「結構なことだ。監督冥利に尽きるんだろうな。打の軸に

なるのは、やはりあいつか？」

圭一が、紅組の四番を務める東義隆の後ろ姿に、顎をしゃくってみせた。

東は、今春で三年生になるスラッガー。圭一の見たところ、星ヶ丘学園高の主砲として最も期待が出来る存在である。

「そついう事だ」羽島が頷く。彼はグラウンドに出る際には、普段掛けている眼鏡の代わりにサングラスを着用している。元々細面で伶俐な印象のある男だけに、サングラスを付けるとなかなか凄みのある風貌になる。強面で押す事もまた、選手の操縦法の一つであるはずだった。数多くの部員を率いていくことは、並大抵の苦勞ではない。

東が、白組のマウンドに立つ背番号十を付けた投手から、痛烈なライナーを放った。打球は三塁線ぎりぎり一杯に入る。レフトが懸命に打球を追いかける間に、東は二塁ベースに悠々とたどり着いていた。

「どうなんだ？ あの背番号十は？」

「まだ本調子ではない。が、今のところは気にならない。少なくとも紅白戦が組めるだけの部員がいるんだ」

羽島の物言いに、圭一は高校時代の彼の無念さを見た。あの時、自分たちの野球部には、十五人しか部員が居なかった。投手は圭一ただ一人。紅白戦すら思うに任せなかった。

粒の揃った投手を複数揃えることは、いわば高校野球界全体の流れではあったが、羽島は特に熱心にその実現を計っているように圭一には思われた。

あの時、圭一以外にもマウンドを託せる投手がいれば、甲子園に行けたかも知れない。少なくとも圭一が肩を壊すことは無かったに違いない。羽島はそつ言いたげであった。

あの一戦。圭一達にとつて忘れられない記憶となり、その後の人生に影を落としていた。

「ところで、ちょっと訊きたい事があるんだ」

やや暗い考えに陥りそうになつた自分に気づいた圭一が、咳払いをして切り出した。

トレーナー見習いであつて、実際に選手の指導などしたことのない自分にとつては、羽島に教わることも多いはず、圭一はそう考えていた。

「なんだ？ 監督を替われというなら断るぞ」

真面目な顔つきそのまま冗談を飛ばすのが、羽島の癖だった。圭一は苦笑して首を振る。

「それも面白そうだけどな。……実は、女子陸上の選手の

指導を受け持つ事になったんだ。成田が面倒を持ち込んできやがってな」圭一がかいつまんで経緯を説明する。

「陸上か。対戦ではなく、記録を競う競技だからな。身体能力がダイレクトに記録に反映される。成田の言葉通りの素材であれば、それほど難しくはあるまい」

「そうは思いたいがな。なにしろやる気を出させてくれないて言われてもな。応急処置法を教えるのとは、どうしても勝手が違う気がしてな。監督やってる羽鳥なら、何かアドバースの一つも貰えそうだと思ってるな」

「俺より、瀬川先生のとてで、いくらでも有名監督やコーチに話を聞けるだろう？」

羽鳥が怪訝そうに問いかける。いわば当然の反応といえた。

「ここは、先生の手を借りたくないんだ。成田の依頼だからな」

「ふん。見栄か。まあ、気持ちは判る。……女子選手というのが、もしかしたら要注意点かも知れない。俺も聞いただけの話だが」鼻を鳴らした羽鳥が、前置きして話し始める。「気をつける。女子選手にとっては、コーチや監督というものは、常に恋愛の対象足り得るか否かという視点で見ると、面白いからな」

「らしくもない。くだらん話だぜ、そりゃ」圭一が一笑に付すと、羽鳥がむっとなる。

「話はそう簡単じゃない。つまりだ、女子選手は自分と同じように汗を流し、喜びを分かち合ってくれる、対等な立場のコーチや監督を理想とする、っていう意味あいだ」

その口調からも、決して冗談や与太話として語っていないことはあきらかだった。圭一の顔から次第に笑みが消えていく。

「体当たりで行かなければ駄目ってことか。そいつは確かに厄介だ」

圭一は腕を組んで空を見上げた。いかにも春めいた、穏やかな晴天。にもかかわらず心に霞がかかっている気がしていた。杉花粉のせいでもあるまいに、と圭一は他愛もない事を考えていた。

金属質の打球音が、二人の会話を遮った。

バックネット裏で話す二人の目に、東に続いて打席に入った五番打者・川染が打球をライト前に運ぶ光景が飛び込む。東はそのない走りで三塁ベースを蹴り、一気にホームイン。五番打者は一塁ベースを蹴り、二塁を伺う。が、

ライトからの返球がセカンドにカットされたのをみて急ブレーキを掛けてストップする。

その時、川染がその場で弾かれたように背を反らせ、それからゆっくりと一塁ベース上にうずくまった。試合が中断する。

「どうした！」羽島が立ち上がり、小走りにファールゾーン上を一塁へ向かって駆け出す。圭一もあとに続いた。捻挫か、それともアキレス腱断裂か。緊張と共に圭一の右肩が疼く。

「監督、圭一トレーナー！ 川染の奴、脚つたつて言ってます……！」

一塁コーチャーズボックスに入る控えの三年生が、走り寄ってくる二人を視野に入れて、声を張り上げた。圭一の右肩から圧迫感が消える。心配げな顔をしていた部員たちが川染を失笑する。

「まったく、人騒がせな」毒づきながら圭一が歩調をやや緩めて、のたうち回って苦しんでいる川染の元へ近づいていく。

「慌てるな、膝を伸ばして足首を反らせるんだ。お前、もしかして腰を痛めてないか。それともサポーターがきつすぎるか」

あぐらをかくようにして座り込んでいる川染の脚を伸ばさせ、圭一はマッサージを始めた。彼自身も、この程度の応急治療であれば自信を持って行える。だが、女子陸上の選手に対する指導となると、どうしても不安を払拭しきれなかった。

成田の依頼から三日後。瀬川の許可を得て予定に空きを作った圭一は、穂の通う讃輪大学附属高校に顔を出すことにした。讃輪大学附属高は幸いにも、接骨院からほど近い淀ところにある。圭一は、購入したばかりの愛車で学校を訪れると、真っ先にグラウンドのほうへと足を向けた。

社会人にとっては縁遠い話ではあるが、学生にとっては最も気楽な春休みが間近である。行き交う生徒の表情が明るいと感ずるのは、圭一の思い過ごしだろうか。

彼がやや意外に感じたのは、隣接する大学の敷地にはオールウェザーと呼ばれる、競技場と同種の豪華なトラックがあるのに、高校には土のグラウンドしかない事であった。

陸上の用語で言えば、アンツーカーと言うところか。圭

一は氣勢を削がれる思いで、グラウンドと体育館の間を通る歩道から、練習風景を眺めた。

同じグラウンド上に様々なクラブが入り乱れている様は、とても日本記録を目指そうかという選手がトレーニングする環境には見えなかった。

彼は、穂に直接会う前に、飾らない普段の様子を見たかった。写真を頼りに、彼女の姿を探す。不安がある。今まで経験の無い内容の依頼であることもさることながら、実際問題として「やる気がない」と成田に聞かされているだけに、練習に顔を出していない可能性があるからだ。

が、すぐに見つかった。Tシャツに、陸上競技用の短パン姿。肩の上から陸上部支給のジャージを羽織っている。特に練習をしている訳でもなく、部の器具庫の前でぶらぶらしているだけなのだが、グラウンドの外縁でダッシュを繰り返す他の陸上部員とは違う輝きを放っている。写真と見比べ、確認する。

「あの娘か」

ふいに、胸の締め付けられる感覚を味わい、圭一は慌てて視線をそらせた。無意識のうちに、左手で押さえながら右肩を回している。

こういう経験は初めてでは無かった。右肩を回すのは、緊張するたびに出る癖だが、時に違う意味あいを持つ時があった。前途有望な選手、才気溢れたアスリートを前にすると、時折息苦しくなることがある。その度に、使いものにならなくなった自分の右腕の事を思わずにはいられないのだ。

もう自分は、プレイヤーとして競技に参加することは出来ない。年齢的にはまだいくらでも動けるが、肩の故障は治らない。それは嫌になるほど判ってはいる。だが、胸の中は高校三年で終わりを告げざるを得なかった、野球への憧憬に満ちてしまう。

自分と同じ目に遭う有為の選手を一人でも少なくする為に尽力している、そう自負してはいるが、その実、どこかで彼らに嫉妬しているのだ。圭一は一瞬だけ自嘲した。それから大きく息を吸って気分を切り替え、本来の目的に立ち返る。

彼の横を通りかかった陸上部員に、監督の居場所を聞く。いかにも陸上部員らしく健康的な日焼けをした部員は、いきなり現れた体育教師のような姿格好の圭一をみて、やや不思議そうな顔で校舎前の藤棚を指さした。

讃和大学附属高の校舎はグラウンドより一段高くなった場所に立っている。その手前に作られた藤棚の下からは、グラウンドの状況がより良く見えるらしかった。監督はそこから、部員の練習ぶりを眺めていた。穂の態度は見て見ぬ振りのようだった。
(さて、どうやって穂への個人指導の許可を取り付けるかな)

何しろ彼にとっては前例のない話である。圭一はこれから先の交渉を思い、やや緊張気味に監督に声をかけた。ところが圭一の気負いに反して、成田が事前にかなり細かい点まで話を付けてくれていたらしく、監督との交渉はスムーズだった。

「正直なところ、手にあまっていたんです」

長尾という名の気弱そうな監督は、救われたような顔つきで安堵の息を漏らした。圭一よりよほど指導者としての経歴は長そうだが、物腰にはへりくだるような丁寧さがあつた。

彼の話によれば、陸上をやっていたのは中学時代だけで、教師になる際に、体育会系クラブの監督などを考慮していなかったという。

「あのレベルに達してしまうと、とても私の指導では役に立ちません。彼女は、部の中では浮いた存在になっています。どうかよろしくお願いします」

監督に頭を下げられ、圭一は安堵する反面、困惑していた。全国でトップレベルの選手を抱える監督となれば、そのステータスはたいしたものになる。その点に相手がこだわられば、説得が難しいと考えていたからだ。

(誰もが、野望を抱いてる訳じゃないんだ) 自分の若さにケチを付けられれば返答に困っていただろう、と思いつつ、圭一は当たり前前の認識を新たにした。

「では、これから当人と話をしたいと思いますが、よろしいでしょうか」

「はい。お願いします。私としても、彼女が全国大会で活躍することを願っているのですが、なかなか……」

監督が自らの指導がいたらないことを弁解気味に説明する。圭一は適当にそれに相づちをうつて会話を終え、いまだ器具庫の前でぼんやりしている穂の元に向かう。第一関門は突破した。しかし、今からより難敵と対面するのだ。圭一の中で再び緊張が走る。

「どうも。水沢穂さん、だね」

「はい、そうですね……？」それまで他人事の表情で練習風景を見ていた穂もまた、先ほどの陸上部員同様の不思議そうな顔で、圭一のほうに振り返った。

間近でみると、体つきが他の部員と違う事が良く判った。上背相応の長い脚がまず目についた。時期柄か、それとも色白なのか、屋外で活動している陸上部員にしては日焼けしていない。張りのある肌の下に息づく腕や脚の筋肉の盛り上がりぶりは、激しいトレーニングの賜物のように見える。女性の筋力強化が困難である点を考えても、とても練習嫌いの選手の身体ではなかった。

訛りのない綺麗な発音。ただし声音はやや低く、男性的な要素を感じさせる。ただ、あどけない表情が全体の印象を一変させている。精神年齢が、己の才能がいかに素晴らしいものであるかを理解できるまでに成長していないのだろう。

(健全な精神は、健全な肉体にこそ宿るべし、とはよく言ったものだ。でも)

だからこそ、自分の持てる全てをそそぎ込んで、彼女を全国的な大会で活躍させてやりたい。穂を見ながら、今まで乗り気では無かった圭一の胸に、初めて意欲が芽生えた。

「あの、何か？」圭一が穂を値踏みするように見ていると、穂が小首を傾げて、不審そうに尋ねてくる。確かに身体をじろじろと見回されては、いい気はしない。

「いや、もし君が練習に顔を出していなかったら、どうしようかと思ってるね」

圭一が安堵の表情を隠さなかったので、穂はくすりと笑った。

「今日はたまたまですけど。あの、どついでですか？」

「監督さんにも伝えてあるんだが、君の指導、……というよりは、練習に協力させてもらう事になった。菱谷圭一だ。

よろしく。こっちとしては光栄だよ。何しろ、君は日本の女子陸上界を変えるかも知れない存在だからね」

手渡された名刺と圭一の顔を見比べ、穂は眉を寄せた。

「一生懸命、練習しなきゃ駄目ってことですか？」

「そうなってくれると嬉しいけどね。まあ、せめてちゃんと大会に出てくれるようになってくれるとありがたい、ってことかな」

「この間の大会、すっぱかしたことですか。あれは、友達と映画の約束があったし、なんとなく気が乗らなかったし

……」

そう言った穂がばつの悪そうにうつむいた。体育会系にはにつかわしくない可愛らしい仕草だったが、彼女には似合っていた。

「まあ、特にそのことを叱りに来た訳じゃないから」

「ところで、教えるって、なにをです?」

穂が、圭一にとっては不意をつかれる問いを発した。

「ああ、つまり」圭一は言葉につまった。どうすればやる気を出させることが出来るのか、具体策など何も考えていなかったからだ。それを直接言葉にして説明するのも妙な気がする。「能力を発揮できるように頑張ろうって事で。全国大会も夢じゃないって話だから、俺は期待してるんだけど」

我ながらひどい答えだ。自己嫌悪に陥った圭一だが、対する穂も目に見えて嫌気のさした表情を見せる。

「そんなの、なんかやだな」

「普通の女子高生でいたい、って事かい?」

「……はい。それに、真面目に練習するのって、疲れるじゃないですか」

圭一は年齢差を感じた。考え方が同じ訳がないと判っていても、一方的にこちらの主張を押しつける事もできない。今後の苦戦が予感された。だが、ここで焦っては負けだ。相手を理解して、その上でこちらの意見を理解してもらわねばならない。

「疲れるのは嫌かい?」

「え? 当たり前じゃないですか」穂はまた不思議そうな顔をした。

「だって、遊んでたって、疲れるときは疲れるだろう?」

「それは疲れ方が違いますよ。楽しいことなら、疲れても平気です」

「つまりは、そういう事だ。要は、君が陸上を好きになっ てくれたら、こっちも助かるという訳だ」

「ふうん……」気のない穂の返事。

「さてと。今日は挨拶だけだから、と」圭一は腕時計に視線を落とした。正直なところ、善後策を練り直す為、仕切り直す必要を感じていたのだった。

「もう帰るんですか?」

その声音は、意外そうでもあり、喜んでるようにも聞こえた。

「ああ。ちょっと寄るところがあってね。また来るよ。話が出来て良かった。これからよろしくな」

「はあい……。あの、菱谷さんの事、これからなんて呼んだらいいですか？」

「そうだなあ……」圭一は意外な質問に、はたと困ってしまった。ここでコーチと呼ばせるのは感心しない。圭一は具体的な陸上の指導を行うためにここにいる訳ではないのだ。

「先生、でいいですか？」

考えあぐねていると、穂のほうで実にあっさりと案を出してくれた。

「あ、うん、構わないよ」

自分が先生と呼ばれてしまうことにはくすぐったさがあったが、特に代案もない。圭一は、とりあえず「コミュニケーションが取れた事に満足してグラウンドをあとにした。

圭一が瀬川接骨院に戻ってきたときには夕暮れが迫っていた。診察時間はすでに終わり、湿布の匂いを漂わせ、あるいは苦痛に顔を歪める患者の姿は無い。

「俺が先生と呼ばれる事になってしまいました」

圭一はやや恐縮気味に肩をすくめて、院長室の執務机に着く瀬川に報告する。

「指導を引き受ける気になったのか」

「はい。風格といたらいいのか、雰囲気があるといったらいいのか。確かに成田の言うとおりの逸材かも知れませんが。走るところを直接見た訳じゃないですから、断言は出来ませんが。自分の手で彼女を本物の一流選手に出来るのなら、是非やってみたいと思います」

圭一は答えながら、穂の第一印象を思い浮かべる。自分の直感を、圭一は信じていた。

「そうか。急に乗り気になったものだな。だけでもな、圭一よ。自分が陸上の専門家ではないことを忘れるなよ。ほどこほどに、分をわきまえて、選手の怪我を予防するためにそばについているだけだという気持ちでいかないと、痛い目に遭うぞ」

瀬川は言葉とは裏腹の、どこか咎めるような口調で言い、腕を組んだ。

トレーナーの視点からは試合に出せないような選手がいっても、監督はその選手を使いたいし、選手もまた無理を押ししても出場したがる時もある。むしろ、そのような無理を可能にするためにトレーナーがいると思われる場合すらあ

る。

その時、トレーナーとしての意見を押し通すのか、チーム事情を推し量って無理をさせるのか。瀬川はそう言っていた。

「はい」圭一は躊躇なくうなずく。ここに来て引き下がるつもりなど無い。

「そうか。これはきつとお前さんにとって貴重な経験になるはずだ。」こっちは一つ、自分も一緒に学んでいくつもりで、練習につき合っただけなんだな

「はい。ありがとうございます」

圭一は深々と頭を下げた。心が沸き立つ。こんな気分になるのは久しぶりのことだった。

数日後。再び圭一が穂の学校に訪れた時、彼はストップウォッチを持参していた。本当はビデオカメラも使いたかったのだが、さすがに一人では同時に扱えない。映像ではなく、数字による形を先に残すことを選んでいた。

実際に足を運ぶ前に、電話で長尾監督に基本的な練習メニューを確かめてあった。

それによれば、ウォーミングアップに続いて、二十メートルほど助走をつけての百メートルダッシュが十本。百、二百、四百メートルのどれかを適度な本数。その後、フォームを矯正するための腿あげと呼ばれる練習があり、ウエイトトレーニング、各自の専門種目の練習を練習時間が終わるまで行う。

圭一がまず考えたのは、定期的にタイムの計測を行う事だった。自分の記録が伸びていると判ればやる気でもっとし、逆に記録が落ちていたとしても課題を自主的に考えるようになるとの判断だった。

陸上競技は記録を争う競技である。である以上、自分の記録がいかなるものか、出来るだけ細かく把握しておくに越したことはない。目標の明確化は絶対に必要な要素だった。きつと穂が陸上に情熱を抱いていないのは、漠然とした練習に気分が乗らないからだろう、と圭一は推察している。

また、圭一が懸念していたのは、練習環境だった。高校のグラウンドは、先日見たとおり土のグラウンドであり、やはり良い環境とはいえない。そこで圭一は練習を始めるに先立って大学の陸上部の監督を訪れ、オールウェザーグラウンドの使用の許可を求めた。

相手はあまりいい顔をしなかった。高校の長尾監督とは違い、自分の職域を侵されたくないとの考えがはつきり読みとれた。結局、「いずれは、貴方の元で活躍することになる選手ですから」という殺し文句で納得させた。

準備を整え、穂の待つ陸上部の部室前まで赴く。すでに練習用のスポーツウエアに着替えた穂が、練習を始めている他の部員の冷たい視線を気にも留めず、軽く柔軟体操などを行っていた。

「あ、先生。どんな練習をやるんですか？」圭一の姿を目にした穂が尋ねてくる。

内心、長尾監督から連絡はついていないにしろ、穂に練習をすっぱかされるかも知れないと懸念していた圭一は、思いがけず積極的な言葉を聞いて相好を崩した。今日はそれなりに気分がのっているらしい。

「練習と言うよりは、記録測定だな。大学のグラウンドのほうで計るから、オールウェザー用のスパイクを用意しておけ」

「……スパイクは一つしか持ってません。爪、ここで替えちゃっていいですか？」

「ああ」ここで、慌てずしつかりとネジを締めなおけ、と言つべきか、練習時間は限られているから急げ、と言つべきか、圭一は迷った。あまりにも経験が不足していた。

穂は部室棟のコンクリート打ち放しの壁にもたれかかって座り込み、スパイク袋から専用のドライバート、オールウェザー用のスパイクピンを収めた小袋を取り出して、ピンを替え始めた。アンツーカー用のスパイクピンは円錐状に尖っているが、オールウェザー用は円柱を何段かに積み重ねた形をしている。それぞれの特性にあわせて、地面を効率よく捉えて蹴る為に改良を重ねられた結果である。また、陸上のスパイクは野球のそれと違って、つま先にしかピンが無い。かかと側は細かな凹凸が付けられているだけだ。

スパイクピンを手際よく外していく穂を見ながら、圭一は一つの不満を抱く。穂の持つているスパイクは、他の陸上部員が使っているものと同じ形で、恐らくは陸上部が業者の斡旋を受けて注文を集めたものだろう。それなりに値段は張るだろうが、決して高級品ではない。弘法は筆を選ばず、とは言うものの、これでは実力を十分に発揮できないのではないか、圭一はそんな危惧を抱いた。

「足のサイズ、聞いても良いかな？」

「二十五センチです。大きいんで、ちょっと気にしてるんですけど……」

視線を手元から外さず、穂があまり圭一に対して関心の無さそうな調子で答えた。圭一はその数字を頭の片隅に記憶する。

準備を済ませた穂を伴い、圭一は大学グラウンドまで戻った。大学陸上部の監督があまり気乗りしない顔をしているが、圭一はそれを気にせずさっさと測定の用意を始める。

「ここに来るのは初めてですけど、邪魔されずに走れるのはいいですね。高校のグラウンドだと、テニス部の球拾いが横から飛び出してきたりするんですよ。ハードルの要領で飛び越えたりしたこともあります」

と、穂は微笑んだ。

大学陸上部の練習をなるべく妨げないよう注意しつつ、百メートル、二百メートル、四百メートルのタイムを計測することにした。続いて、幅跳び、走り高跳びの記録も計測する段取りである。

それらの記録が今後の練習メニューを組み立てていく上でのデータになる。数値の誤差が出ないように、計測は慎重に行わなければならない。圭一は、まるで自分の方が試されているような緊張を感じ始めていた。右肩をぐるりとまわし、鈍い関節音を鳴らす。

穂のフォームはやや前傾姿勢で、腰の位置が低く保たれたままトップスピードに入るといふ特徴があった。理論的には問題がないわけでも無かったが、いかにも速そうに見えるフォームだ。腕の振り、足の運び一つを取っても、他の女子選手にないキレがある。

見た目だけではなかった。実際、計測の結果はどれも鍛えれば日本記録を目指せそうなほどの凄さだった。百メートルは十二秒ジャスト。二百メートル二十四秒四。四百メートル五十五秒二。走り幅跳び五メートル八七。ただ、走り高跳びだけはフォームが身に付いていないので、一メートル四十と物足りない。とはいえその分を差し引き、一通りの指導は受けている事も考慮しても、成田が言った通りケタ違いの才能だった。

「何か専門種目を決めておこう。何がいい」

圭一は、計測を始める前から考えていた事を口にしてい

た。実のところ、長尾には許可を取っていない。それでも圭一は、何か一つの種目に専門的に打ち込ませることで、その有り余る才能をより良い方向に導いていけるのでは、と考えていた。

「百米メートル走るだけじゃ駄目なんですか？」

「せっかくの能力を使わないのは勿体ない。人は自らの能力を発揮している時に、一番輝くんだからな」

それは圭一の信念でもあった。ある分野において才能を持つ者は、望んでもその才能を持つことの出来ない者たちの分まで、全力を尽くし、能力を発揮しなければならぬ。自分はその為の助力をしている、そう圭一は考えている。

「うーん。じゃあ、ハードル、かな……」

今まで専門種目など考えたこともなかったのだろう。ためらいながら応える穂の表情に、媚びたような笑顔が浮かんだ。

（ハードルか。悪くないな）圭一は穂の身体つきを改めて眺め、そう思った。

ハードル走は身長の高さが記録に密接な影響を及ぼす競技である。前もって長尾監督に手回しして聞いていた身体測定資料によれば、穂は身長百六六センチ、体重五十一キログラム。これは、陸上選手としては普通の体格である。取り立てて不利であるとは言えない。

圭一は即座に準備を始めた。大学の部員の手も借りて、すぐさまハードルが並べられる。この頃になると、穂の走りに誰もが度肝を抜かれ、練習を止めて彼女の走りを見物しているという有様だった。準備はすぐに整った。

クラウチングスタートの構えは無造作とのイメージが強い。簡単に構えてしまう。

部員が気を利かせ、わざわざスターターとして合図用のピストルを持ち出してきた。

乾いた音が響くと同時に、弾かれたように穂が飛び出す。

スタートからの加速が素晴らしい。ハードル走では、第一ハードルをうまくクリア出来るかが、記録の善し悪しに大きく関わってくる。それに加え、柔軟性とリズム感が重要である。その全てを、彼女は備えていた。

穂は、力強く膝から脚を蹴りあげ、奇麗に第一ハードルを飛び越えた。ほとんど練習していないはずなのに、足の運びは完璧に近い。リズムに乗って、次々にクリアしていく。障害の無いコースを走っているのでは、と錯覚するほどだ。

「いいぞ……！」圭一は記録を計りながら声を出していた。最後に胸を張り、ゴールに飛び込む。圭一のストップウォッチは十四秒一を記録した。

「日本記録と約一秒差か。凄いな」
百メートルハードルの日本記録は十三秒〇八。高校記録は十三秒四四である。

「あの……、もういちどお願いできますか。ちょっと納得出来ないんで。もっと速く走れます」珍しく、穂が闘志を見せていた。圭一に異論のあるはずがない。

再測定。先ほどの走りが霞むほどのスピードに乗り、穂はゴールを駆け抜けた。

「十三秒四！ 凄い、高校記録だ」

一気にタイムが跳ね上がった。手動とはいえ、高校記録を上回っていた。念のために持参していた陸上専門月刊誌の付録である記録一覧表を確認して、圭一が呻き声をあげる。

どこまで伸びるのだろう、圭一は空恐ろしくなった。こんな逸材を、自分ごときが指導していいのだろうかとさえ思う。粗削りの段階でこれだけの力を見せるのであれば、完成を見た暁には、いったいどんな高みに登り詰めるのだろうか。想像がつかなかった。

比較的あっさりと実力の片鱗を知った圭一だったが、その後の指導は一苦勞だった。

気まぐれそのものの穂が、いつもやる気になってくれるとは限らないからだ。練習をすっぱかされて途方に暮れることも一度や二度では無かった。どうすればこちらの熱意を感じ取ってくれるのか、圭一はそればかりを考えながら日々を過ごす事になった。

当然の事ながら、瀬川のもとで働く圭一は、穂の指導だけを行っているわけではない。せいぜい週に二日か三日、高校に顔を出して、もし穂が練習に出て来たらその走りを観察し、気になった点を指摘するだけだ。大学のグラウンドを練習場所に確保した以外、たいしたことはしていない。ただ、折を見て、身体能力の測定を念入りに継続し続けていた。単なる脚力だけではなく、握力、背筋といった数値も計測の対象だった。全般的な数値はわずかながらも確実に上昇していた。

練習嫌いとの成田の話だったが、実際、圭一が学校に訪れた日でも穂は簡単に練習を休んでしまう。それだけまだ

信用されていないという事であり、圭一は頭を痛めていた。「ですが、菱谷さんのいらっしやらない時はもっとひどいですよ。あれだけの逸材なんですから、もう少し自覚を持つてくれると良いんですが……」

圭一が顔を出す度、長尾監督がこぼす。それは期待を暗示する言葉でもあって、圭一の心に重くのしかかる。

「判つてますよ。……指導を引き受けた以上は、成果をあげないと」

そう応じる圭一はいつの間にか、長尾に下駄を預けられる格好になっていた。

穂の体調管理にとどまらず、練習全体に指導を行う立場になっていた。監督も穂本人も、ごく自然にそれを受け入れている様子なのが、彼には辛かった。圭一は陸上の専門書を読みあさって、練習メニューを考えなくてはならなくなった。素材は超一級の選手が相手だから、やりがいはあるものの、難しい仕事だった。

手探りのまま、圭一が穂の指導を始めて三週間が過ぎようとしていた。

これまで練習自体は、とりたてて新奇なものは取り入れて来なかった。ストレッチングを入念に行い、筋力トレーニングも実施する程度である。特に上半身の強化には力を注いだ。最初の頃は走ることで上半身の筋力強化との関連性を訝り、体つきがごつくなるのを嫌がった穂だが、腕の振りが脚を蹴り出す際に大きな影響を与える事をどうにか納得させ、トレーニングさせていた。

一方、実際に走る際には、具体的な指導には至っていない。それは特別、強固な信念に基づいたものでもなんでもなく、陸上競技の指導は素人である圭一に、それ以上の事が出来なかったからに過ぎない。しかし、だからと言って圭一もおおざなりに済ませたままにしておきたくはなかった。だから瀬川接骨院の資料室にこもってデータを調べたり、フォームをビデオ撮影し、それを陸上競技の指導書や専門雑誌と比較して、問題点が無いかチェックしたり、と研究を続けて来たのだ。

その結果、やはり前傾気味のフォームに、力をロスさせている可能性があるという結論に達した。今日、圭一はその矯正に取り組むことにしていた。芳江に話したとおり、今の穂に指導出来るのは自分しかない。そう自らに言い聞かせていた。

「腰の使い方に、まだ改良の余地がある。前のめり気味に

なっているから、腰がうまく使えていないんだ」

大学の陸上グラウンドを借りてのいつもの練習に先立ち、半ば受け売りの台詞ではあるが、圭一は断定口調で穂に説明を始める。空威張りだろうがなんだろうが、教える人間が曖昧な態度では、教えられる側は絶対にその内容を信頼して取り組むことなど出来ない。

瀬川の元で働き、故障を抱えた選手を伴って接骨院に顔を出した指導者をみてきた圭一は、その優劣を決める要素をいくつか知っていた。勿論、みると聞くでは大違いである事は判っているが、最善を尽くすつもりであることに変わりはない。

意気込みを示すかのように、グラウンドでの指導を行う際には、圭一は必ずジャージに着替えていた。根拠のない思い込みだとは判っているが、それは圭一にとってはグラウンドに対する一種の礼儀であり、また同時に「共に汗を流して喜びを分かち合う対等な間柄」という羽島のアドバイスを受け入れた結果である。

「腰、ですか？」

怪訝そうに、穂が訊ね返してくる。圭一の熱意も、穂の前では空回りしがちだった。が、ここで嫌気をさしているようでは論外だ。なにがあるうとも、圭一はねばり強く教え込むことに決めていた。

「そうだ。身体を起こし、前に蹴り上げた脚を踏み込む時に、膝を前に出すというより、腰をひねって太股の付け根から大きく前に押し出す感覚だ」

圭一は自ら、脚を踏み出す際に腰のひねりを大げさにしながら数歩、歩いてみせる。

「三段跳びで、ホップステップ、って飛ぶときみたいですね」

自らも圭一の真似をして腰をひねる穂が、いまひとつ要領を得ない様子ながら、そんな感想を漏らした。

「まさしくそういうことだ。三段跳びの選手は、それこそわずか三步で十数メートル前進する。ピッチを落とすことなくストライドを大きくできれば、当然タイムは向上する」
「でもなんだか、お尻を振って走るみたいで、格好悪くないですか？」

「いいから。尻を振って走ってみろ」圭一は穂をトラックのほうへと押し出す。

軽く数本、流すように走ってから、穂は百メートルを全力疾走した。嫌がってはいたが、圭一に言われた通り腰の

ひねりを意識した走りをみせる。

「なんだか変な感じです」

走り終えた穂が、走り慣れないフォームに、気持ち悪そうに腰のあたりを撫でている。

「だがタイムはいつもと比べてもさほど悪くない。始めてにしては上出来だ。練習してフォームに慣れればタイム向上が期待できる」

「フォーム崩して、タイムが落ちたらどうするんです？」

「そんな事は心配するな。全ての責任は俺にあるんだ」

「……はい」

穂の目には、どこか納得していない色が浮かんでいた。それでも圭一の指導の元、フォーム矯正に取り組む。数度走るうちに、次第に様になってくる。タイムもそれにつれて良いものになっていく。この飲み込みの早さが、ある意味では記録以上に穂の魅力と言えた。指導がすぐさま形となつて現れる事ほど、教える側にとってやりがいのある話はない。

しかし穂当人にとっては、記録が伸びることにまさほどの喜びを感じている様子は無い。圭一の目論見は半ば外れていた。つまり、まだ成田からの依頼である、モチベーションを与える事は出来ていないと考えるべきだった。

四月に入り、春休みもまもなく終わろうとしていた。ここ数日、階段を上るように気温を増していた陽気が嘘のように、その日は寒さがぶり返していた。風がやや強く、見頃になったばかりの桜の花びらが大学のキャンパスに舞っていた。

圭一が大学のグラウンドに顔を出した時、穂の姿はそこにはなかった。

「また、さぼったのか……」

落胆しながら高校のグラウンドに戻り、長尾監督に穂の行く先を訊ねると、長尾は冷や汗を浮かべて頭を下げた。

「申し訳ありません。今日は、……実は肩を痛めてしまったもので」

長尾が口ごもりながら応える。

「肩？ 何かにぶつけたとか？」圭一が不審げに眉をあげて聞いた。

「いえそうではなく……。昨日、槍投げの真似事をして遊んでいたらしいんです。それで調子にのつて。まともなフォームも理解していないのに無茶をしたから、それで。」

今日になって痛み出したらしくて」

「それは……。困りますね、そういうことでは」圭一は露骨に顔をしかめる。

「申し訳ありません」

平身低頭の長尾監督を見ると、圭一もそれ以上は怒る気になれなかった。そもそも圭一が横から口出しをすることが、穂が長尾の存在を軽視する理由だと考えると、申し訳ない気さえしてくる。体調管理も圭一の責任と言えなくもないのである。

「で、穂はどこに？」

「保健室のほうです。湿布を貼ってもらってるはずです」

長尾の答えに、圭一は軽く唸った。ここで適切な対処をしないと、後々に響くかも知れなかった。圭一は即断した。

「ちよつと見てきましよう。応急処置に関しては、それなりの知識を持っていますから」

「よろしくお願いします」長尾がまた頭を下げた。

圭一が校舎に入り、不案内ながらも保健室の前に来たところで、ちよつど扉を開けて出てきた穂と鉢合わせした。

「どうだ肩の調子は」少し皮肉っぽく、圭一は声を掛ける。

「監督に聞いたんですか？」

なんとも冴えない顔の穂が聞き返す。圭一はうなずき、穂の鼻先まで顔を近づけた。

「……なんですか？」

「どつちの肩だ？」圭一の厳しい声音に、水谷がか細い声で応じる。

「……右です」

「ちよつと見せてみる」

「え、やですよ……」

穂はたじろいだだが、圭一が強い調子で肩の具合を見せるよう要求するので、渋々体操服の袖をまくり上げて肩を見せた。市販の湿布薬が貼り付けられている肩をしばらく睨んでいた圭一が、いきなりそれを引き剥がした。赤く腫れた肩があらわになる。同時に穂が悲鳴をあげる。

「なにするんですか！ せっかく貼ってもらったのに！」

「こんなんじゃ駄目だ。……来い！」

「ど、どこへ……？」

本気で腹を立てている圭一は、怯えた目で問い返す穂の様子など無視した。

「俺の仕事場だ。俺はお前が好記録を出せるよう雇われた。」

それが故障したとなれば、その治療にも責任を持つ」

そういつて、圭一は穂の左腕をとってぐいぐいと引く張っていく。

「痛いですが、ちゃんと歩けますから、離して下さい！」

裏門近くの来客用駐車場。圭一のRV車の前まで来たところで、穂が怒りだした。

「いいか、走るだけだからって腕が要らないなんてことにはならないんだ。身体のバランスはもつとも大事なんだ。肩を痛めては、全身の筋肉を活かして走れるわけがない」

圭一は穂を自分のRVの助手席に座らせた。エンジンを噴かせ、勢いよく走らせ始める。

「で？　なんでまた槍投げなんだ？　ハードルよりそっちに興味があるのか？」

「いえ、そついつ訳じゃ……。大学の先輩たちを見てたら、なんだか楽しそうで」

「投擲運動は必ずしも身体に好影響をもたらさない。きちんとしたフォームを身につけずに行えば、簡単に肩や肘を壊す」

圭一は自身の高校時代を思い出していた。まともなコーチもつけられず、ただひたすら投げ続けた結果、三年の夏には肘も肩もぼろぼろになって、使い物にならなくなっていた。そんな思いを穂に味あわせたくはない。

「……ごめんなさい」身体を小さくして穂が頭を下げる。今まで見たことのない圭一の厳しい表情に困惑している様子だったが、当の圭一はそこまで気が回らない。

「心配するな。肩の故障とその治療に関しては実地で詳しく勉強したんだ。このくらいの炎症、必ず治してやる」

その言葉を受け、こわばっていた穂の表情が緩んだ。つい軽口が口をつく。

「……先生、どうしてそこまで熱心に私のことを？　もしかして、私に気があるとか？」

「馬鹿いえ。お前ほどの逸材が、こんなくだらない故障で潰れちゃたまらないからな。それだけだ」

惘然として言い返した圭一だが、ふと槍投げの結果に興味を抱いて問う。

「ところで、槍はどのくらい飛んだんだ？」
穂はそれが記憶をたどるときの癖なのか、しばし顎に指をあてて考える。

「ええと、追い風でしたけど、六十メートルに少し届かなかったくらいです。私、記録のことはよく判らないんです

が、それでも先輩が誉めてくれました」

屈託ない穂の言葉に圭一は絶句する。槍投げの日本女子記録は六十メートル五十二センチ。国体ですら、四十メートル飛ばせば上出来であるう。

「……とんでもない馬鹿肩だな」

圭一が思わず、小さく呟いた。

やがて、圭一の事務所が入る雑居ビルに到着した。RVを裏手の駐車場に停めて、穂を連れて通用口から接骨院に入る。戻ってきてから、今日が瀬川は往診に回って留守であることを思い出した。事務員である瀬川の妻・芳江が留守番をしているだけだった。

「奥さん、診療台、お借りします」

ほとんど穂を抱きかかえるようにして入ってきた圭一に、芳江はあたふたとした様子で頷いた。

「そこに左肩を下にして横になるんだ」

圭一が診療台を指さす。恐る恐るといった調子で、穂が指示に従う。

「力を抜いているよ」

そういう圭一のほうが緊張していた。自分の右肩をぐるりと回して関節を鳴らしてから、マッサージに取りかかる。まず右手で穂の右手首を取り、左手を肩にあてる。数度、穂の肩関節がスムーズに回るか確認したあと、指先から肩に向かって、小指を除く四本指で丁寧にマッサージをしていく。

肩の近くになると、それまでじっとしていた穂が、くすぐったさに身をよじり始めた。

「こら、じっとしてろ。しっかりマッサージしていれば、じきに肩が軽くなる」

「……はい」

が、三角筋を特に念入りに揉みほぐしたあとで、胸部にまわる際にはさすがに圭一自身が緊張を覚えた。

「やあん」穂がまた身体をくねらせて、圭一の手を払いのけようとす。

「馬鹿野郎。恥ずかしかつてる場合じゃないぞ。くだらない真似して肩を痛めた穂が悪いんだからな」

「……うう」

右手で穂の右脇腹を掴み、右親指を使ってマッサージする。照れたり恥ずかしかつたりしたほうが負けなんだと自らに言い聞かせる。幸いにも、穂は観念したのかおとなし

く圭一の治療に身を任せている。が、横になった穂の想像以上に薄い胸のふくらみが、やけに圭一の意識に引っかかって彼を困らせた。

（つたく、これだから女子選手相手ってのは厄介なんだよなあ）

穂の肩に初期の腫れに効果が高いベノスタジン軟膏を塗り込んだガーゼを貼り、その上から伸縮テープで丁寧なテーピングを施しつつ、圭一は内心でばやく。彼とて朴念仁ではいられない時もあった。

あまり歓迎できない形ではあったが、この一件が穂にとっては、圭一が信頼するに足る存在と認識するきっかけになったらしかった。その後、彼女が練習をさぼったり、圭一の指示を受けずに勝手な種目に手を出したりすることはなくなった。

第二章

春休みが終わり、始業式を迎える。穂は三年生になった。彼女にとっては、今年度が高校生活最後の一年間である。

圭一が長尾監督に聞く限り、讃和大附属高からは他大学への受験生も多い。が、大学の附属高という環境のせいも、穂もその周囲の学生も、それほど緊張感はみられない。

圭一の大げさも思える治療が奏功し、穂の肩は完全に治っていた。アクシデントにも影響されることなく綿密に組まれた練習スケジュールは、インターハイに目標が絞られていた。百メートル走、二百メートル走、百メートルハドル走の三種目に関し、一層のレベルアップを計る。付け焼き刃の指導ではあったが、調整は概ね順調で、百メートルはコンスタントに十一秒八を出せるところまで調子をあげていた。

ゴールデンウィークに行われる市の記録会が、仕上がりぶりを試す格好の舞台となっていた。穂は、あくまでも讃輪大学附属高校陸上部部員である。競技会は部の単位で参加する事になる為、圭一がずっとそばに張り付いている訳にも行かない。

もともと、実際に走るのには穂なのだから、特に気にする必要はない。圭一は関係者がほとんどを占める競技場のスタンドの中段で、彼女の走りを見守ることにした。

幸いなことに、肌寒さともうだるような暑さとも無縁の

穏やかな晴天に恵まれている。「絶好の陸上日和」といった素人臭いフレーズが、圭一の頭の片隅にしばし浮かんで消えていった。

「ええんか？ 彼女に付き添っててやらんで」

野球帽を前後逆にかぶった成田が圭一の横にやってきて聞いた。首と肩に、カメラ及び機材をあれこれとぶら下げている。そうする事で、自分がカメラマンであると主張しているかのようだった。

「俺がやるべき事はやった。何もしなくても十一秒台を出せる選手だ。市大会レベルでどうこう言つまでもない」

圭一はグラウンドに視線を向けたまま、全く不安のないところを強調した。

「そうは言つてもな？ 何だか不安そうな顔しとるで」

成田がファイナダー越しに、ウォーミングアップを行う選手の中に混じる穂を伺う。

「他の部員とはあまりそりが合わないんだ。だから、つまらなさそうにしているんだろ。競技場入りする前に話した時は、特に問題は感じなかったが」

大体、俺に任せておけば心配ないと大言していたのはお前のほうじゃないか、圭一はそう怒鳴りたい気持ちを押さえていた。ここであれこれと言い合つたところで始まらない。

「うーん……。試合前にはちゃんと声掛けてやれよ。俺が何かアドバイスする訳にもいかんからな」

それだけ言つて、成田は好ポジションを探しに行つてしまった。

余計なお世話だ、と圭一は思ったが、確かにいつもの元気がないようにも見えた。調子を確かめておく必要があるかと思ひ直す。

「くそ。本職のコーチなら、こんなことで悩みやしないんだろが……」

やがてバックスタンドに設置された大時計の針が九時半を指すと、選手がフィールド上に整列して、開会式が始まつた。女子の百メートル予選はその後すぐである。圭一は陸上連盟関係者の挨拶を聞き流し、腰をあげた。讃輪大学附属高の陸上部は、バックストレートの芝生のスタンドに青いシートを引き、場所を確保していた。市の記録会ともなると参加人数が多く、とうてい更衣室などを利用できる状態では無い為、事前に学校単位で確保した場所が、控え室

と更衣室の役割を兼用するのである。

圭一がスタンド外縁の讚和大附属高が陣取る場所近くに移動して待っている、開会式を終えた選手がぞろぞろと戻ってくる。圭一より先に穂が相手の存在に気づいた。

「せんせいっ！」

浮かぬ顔つきだった穂が、途端に笑顔になって手を振りながら駆け寄ってくる。周りの眼を気にしている様子はまるでない。

「調子はどうだい」

「それ、朝も聞いたんじゃないですか？」

圭一の問いかけに応じる穂の口調は、いつもと変わらなかった。元気がないようには見えない。やはり、成田の思い過ぎしだな。圭一は安堵と共にそう結論づけた。

「どうかしましたか？」

「いや。場慣れしてないと、実力が出せないかと思ってな」

肩の力が抜けた圭一が、冗談めいた言葉を口にする。今では、こうした軽口を自然と出るほどに、互いの存在に慣れてきていた。

「私、一年の時から試合に出てるんですよ」

圭一の言葉に対して、初心者扱いするなとばかり、穂が口をとがらせる。

「ああ、こっちが心配する事じゃなかったな。じゃあ、スタンドで観てるから」

「ちゃんと応援して下さいよお」

「判ってる。さあ、すぐに始まるぞ。早くスパイクに履き替えて来い」

穂のスパイクは、圭一が注文した物だった。それまで穂は、部が一年生用にまとめて注文したスパイクを使い続けていたのだ。

穂に対する初指導の時から、圭一はそのことが気になっていた。圭一は職業柄、用具の入手にもつてがある。特注とはいかないが、穂の足のサイズとフォームを勘案した上で、それなりの品を見つけられた。当然、相応に値が張って圭一の懐具合は寒くなったが。

圭一にしても、決して高級な用具に頼る事を良しとはしないが、やはり全国レベルで戦う選手ともなれば、相応の用具を揃えておかねばならない。

言葉は悪いが、穂には他の部員とは違う「選民意識」を

持つて貰いたいと圭一は考えている。すでに待遇で格差がついているのだ。用具で便宜を計ったとしても後ろめたいことではあるまい、と一人決めをしていた。スパイクの性能で、まだ記録の上積みが期待できる。圭一はそれまで一瞬抱いていた不安を完全に打ち消し、大記録達成の可能性に胸を躍らせていた。

圭一がメイנסタンドに戻ってしばらくして、女子百メートルの予選が始まった。穂は最後から二つ目の組である。それまでの間が、圭一には何とも退屈に思われた。穂の走りを見慣れてしまったせいだろうか。各組の予選を走る女子選手の全力疾走が、まるでスローモーションに見えた。

「真面目で地道なトレーニングの有用性を訴えておきながら、いざ天才を目の当たりにするとこの様か」

圭一は自嘲気味に鼻を鳴らした。ここにいる陸上部の選手たちは、それぞれが記録向上を目指して毎日練習を積み重ねて、最高の記録をマークしようと懸命に頑張っているはずである。市大会突破、都道府県大会出場、さらには全国へ。いや、全世界のトップアスリートと競い合うという夢があってもおかしくはない。

対して、穂がサボっていたとは言わないが、まだまだ必ずしも死にもぐるいの努力をしているとは言い難い。逆に言えば、それだけ開拓の余力を残しているのだ。真面目に、地道な努力を重ねているであろう部員たちの心境を思うと、心苦しいものがあった。

厳然たる才能の差。それは時に嫌と言うほど見せつけられる事がある。圭一もまた、肘の故障に最後は泣いたとはいえ、「怪我さえ無ければ」プロに行けるだけの投手だった、などと自惚れてはいない。自身が才能を持たざる者に属すると感じるだけに、才能のある人間に対しては、一層の全力発揮を期待してしまうのだ。

「結局は、どこに向かって走っているか、だな。穂はどこに向かっているんだろうな」

スタートライン後方で身体を動かしていた穂が、自分の番が回ってきたことを知ってブロックの前に出てくる。しきりにスタンドのほうを気にしている。どうやら、圭一の姿を探しているらしい。

「仕方がないな……」かぶっていた野球帽を圭一が振って合図すると、穂が気づいた。ようやくスタートブロックに足を乗せる。

クラウチングの構えも以前に比べてかなり形が出来てきていた。号砲が鳴る。最初の二十メートルで勝負が付いていた。八人の集団からすると抜け出した穂は、驚異的なスピードを維持したままゴールラインを駆け抜けた。

圭一が手元のストップウォッチで計測した記録は十一秒六。大会記録だったが、練習での自己記録よりは遅い。それでも、競技場のあちこちで信じがたいという声があがった。

再び圭一が席を立って陸上部のシートのほうに顔を出すと、穂はVサインで彼を出迎えていた。不安を感じる要素は全くなかった。

二百メートル予選でも、穂は二十三秒八という好記録を叩き出した。午前中最後のトラック競技となる百メートルハードルで、穂がスタートラインに現れた時には、競技場全体が静まり返った。この頃なると、居合わせた誰もが穂の驚異的な記録を知り、さらなる大記録を目の当たりにしようとして固唾を呑んでいた。普通ならばプレッシャーで耐えられなくなるような場面と言えた。そんな中、穂はスタンドに向かって手を振って見せた。観客の緊張感をつかの間忘れさせるような無邪気さだった。それが果たして、圭一への合図だったのか、観衆へのアピールだったのかは判らない。期待が高まる中、穂は十三秒二という、ジュニア日本記録を更新する好記録で、ハードルが立ちふさがる百メートル間を疾風のごとく走り抜けた。

昼の休憩を挟んで、決勝が行われる。穂の疾走の余韻を残したまま、トラック上から人影が消える。

「あ、いた。先生！」

ふいに、圭一の後ろから声が掛けられた。通路の階段に、讃和大附属高陸上部のチームカラーである、紺色のジャージを羽織った穂がにこにこしながら立っている。

「調子は良さそうだな。決勝でも期待出来そうだ」

「あの……。お弁当、作ってきたんですけど、一緒に食べませんか？」

このあたりは、やはり女の子なんだな、と圭一は大発見をしたような顔で穂の笑顔を見た。自分の仕事はスポーツ用サイボーグを作ることではない。穂の記録にとらわれ、危うく彼女の人間性を見失いそうになっていたと気づく。

「こりゃ、謝らないといけないな」

「駄目、ですか……？」

穂の顔が曇る。自分の言葉が要らぬ誤解を招いたことに気づいた圭一が、急いでそれを訂正する。

「ああ、いや。違う違う。君が料理をする姿を今まで一度も考えた事も無かったんで驚いたんだ。それで」

「なあんだ」笑顔を取り戻した穂がいざ弁当のふたを開けようとした時、成田が通路をもの凄い勢いで走ってきた。

「おい！ のんきに飯食ってる場合やないで。一大事や」

「どうした、何かあったか？」圭一が成田の剣幕につられて腰を浮かす。自分にとって一大事と言われるような事態とは何か、頭の中で様々な要素が駆けめぐる。

「ああーっ、成田さんの分はありませんよ！」

圭一の緊張した面もちとは対照的に、状況を把握していない穂が、怒ったような声を出す。彼女は、遠い親戚という事もあって圭一と会う以前から成田の人となりを知っている。ただ、どういう訳かあまり快くは思っていないらしい。

「何のこっちゃ？ そんなことよりな」成田は穂の抗議に取り合わず、早口でまくしたてた。「羽島のところの東が怪我したらしいで」

「まさか！ なんてことだ」圭一は今度こそ完全に立ち上がった。

圭一は数年前から、羽島が指揮する野球部でトレーナーとして何度も足を運んでいる。チーム事情も良く知っており、東の戦線離脱は羽島にとっても大打撃である事は圭一にも判った。確かに、野球部の一大事であり、圭一にとっても他人事ではなかった。

「にしても、どうして、そっちに連絡が来るんだ？」

圭一のもっともな問いに対し、成田が顔をしかめた。

「ご挨拶やな。お前、携帯の電源を切つとるやる？ 連絡がつかんから言うて、羽島から電話受けた瀬川先生が俺に三角パスまわしはったんや。先生もお前に任す、言うてはるわ」

「そうだったか。すまない。とにかく、すぐに行かないとな。済まない。聞いての通りだ。弁当を食べてる暇が無くなった」圭一が穂に軽く頭を下げる。

「ええ……！ わざわざ先生が行くことないじゃないですかあ」

穂が頬を膨らませて抗議する。圭一達の慌てぶりにもお構いなしである。

「本当に悪い。だけど、怪我の具合も気になるし、羽島と

善後策を練る必要があるんだ。弁当は、成田と食べてくれ」
「……早く戻ってきて下さいよ」引き留めることが出来ず、
穂が寂しそうな声を出す。

「判った。それじゃ。午後の決勝、期待しているから」

圭一は取るものもとりあえず、慌ただしくスタンドから
飛び出していった。

「せっかく作ったのにな……」

残された穂が肩を落として溜め息をつく。

「まあ、あいつも忙しい身やからな。おっ、穂ちゃん、う
まく出来とるやないか」

成田が穂が抱える弁当箱に手を伸ばした。途端にふたが
パタンと閉じられる。

「成田さんの分はありません！」

東の怪我は右足首捻挫だった。骨折していなかったのは
不幸中の幸いだったが、お陰で圭一は競技場に戻れなく
なった。捻挫の直り具合は、初期治療に大きく左右される。
夏の予選に近いこの時期、いい加減な治療で怪我を長引か
せるわけには行かなかった。結果、ほとんどつきっきりの
看病となった。

捻挫の場合、血液の循環を良くするため、時間を見計らっ
て患部を暖め、あるいは冷やすという治療を続けなければ
ならない。半端な知識で下手に冷やし続けたりすれば、最
悪の場合、凍傷などを引き起こしかねない。捻挫の患者が
相手となれば、圭一にとっては本業である。ここにきて、
他の誰かに任せるつもりはなかった。圭一は東の自宅に押
し掛け、一人で一晩中看病を続けた。ほとんど徹夜だった。

翌朝、東の家に成田が見舞いと圭一の様子伺いを兼ねて
やってきた。東の捻挫の具合は、圭一の治療が功を奏し、
長引かずに済みそうだった。圭一は東に治療法を伝え、家
を出た。

成田の「家まで送る」との言葉に甘え、圭一は自分のR
Vを成田に運転してもらおう事にする。成田も一応免許も車
も持っているが、いかなる理由によるものか、移動手段と
して活用している様子は無く、今日も電車での訪問だった。
圭一は助手席に乗り込んだ途端、天井を仰いで目を閉じ
た。

「まあ、大事に至らなくて幸いだった。羽島も喜ぶだろう」
「ああ。地区大会前の大事な時期だからなあ」成田がそう

応じながらシートベルトを締める。圭一もそれに倣う。

日頃運転しない成田がエンジンをスタートさせ、慎重にRVを走らせ始めた。圭一はどこか重い車内の雰囲気を変えようと、明るい声で話題を振った。

「ところで、穂のほうはどうなった？ あれだけ上々に仕上がっていたんだ。どこまで記録が伸びたか、気になっていたんだ」

「それがやな……。一言で言えば、散々、やったな」

顔に似合わず意外と慎重な手つきでハンドルを握る成田が、沈んだ声で穂の成績をそう評する。

「なんだって？」 思いも寄らない成田の言葉に、圭一は思わず問い返していた。

成田が、浮かぬ顔で説明を始める。

午後の決勝では、予選時の記録を上回った種目は一つも無かった。特に二百メートル走では、よもやの二位になっていた。予選の結果を見て監督に急遽参加させられた百米トルリレーでは、バトンを取り落とす失態を演じていた。

「俺が観てないと、昔どおりのさぼり癖が出てくるのか……？ 困ったもんだ」

東を看病し続けて目の下に隈を作った圭一は、まぶたを押さえて疲れ切った声を出した。自分の指導にいつたい何の意味があったのか。圭一はむなしさを感じていた。

「そういう言い方は無いやろう？ 穂ちゃんはお前があらんで不安がとつたで。さぼったんやない。走れなかったんや」

成田の言葉も、徒労感を全身に味わっている圭一の心には響かない。

「だから、それが困るんだ。日本の女子陸上界を背負う存在と言ったのは誰だ。トップレベルの選手が、そんな情けない事でどうする」

「確かにそうかも知れんがな。穂ちゃんにしたら、お前はただのトレーナーやない。かけがえのないパートナーなんや。それを判つとるんやろうな？」

成田の苛立ったような言葉に、圭一はしばし声を失った。ややあって、押し潰したような低い声で呟く。

「……確かに俺は、そこまでの覚悟をもっていなかった。ちゃんとした専属コーチが必要なのかもしれん」

「アホ抜かせ。そんなことで彼女が納得するかい。穂ちゃんは、お前を必要としとるんや。お前やなかったらあかん

のや」

「……」圭一は今度こそ、返す言葉を持たず、黙り込んだ。

これ以上、自分が穂に何を出来るのか、答えを思いつけなかったのである。自分は陸上競技の専門家ではない。心理学者でもない。

穂のように全国レベルの選手に付け焼き刃の指導は、却って逆効果になりかねない。

だが、それでは彼女は納得しない、と成田は断言している。圭一はその意見に完全に同調する訳ではない。が、当初の目的だったモチベーションの付与という側面から観ても、メンタル面での不安定さを露呈する穂に対して、まだ指導を終了する訳にはいかないのも事実だった。

(どうしろと言うんだ……) 後悔はしていないものの、頭の痛い事態に立ち入ったことを圭一は思い知らされていた。その後、圭一は成田の運転で自宅前に到着するまで無言のまま、穂の今後の事を考え続けていた。

数日後。あらかじめ伝えてある練習の予定日通り、穂の元に圭一が顔を出した。今後どんな指導を進めていけばいいのか、頭を痛めてはいたが、結論を出すのは穂次第だと考えていた。彼女が圭一の指導を拒否するならば、あるいはこれ以上自分が関わっても、結果は残せないかも知れない、と思う。

「やはり俺には、選手の個人指導、それも全国レベルの選手相手なんて、荷が勝ちすぎていたのかもな」

穂は案の定と言うべきか、すっかりむくれていた。大学グラウンドのホームストレートに面した場所にあるコンクリート製のスタンドに腰掛けたまま、動こうとさえしない。気まぐれな彼女は、かつてはこんな態度もよくしていたものだ。そう昔のことでもないのに、圭一には彼女の態度がひどく懐かしく感じられた。

「私のことなんか、どうでもいいと思ってるんでしょ！」

そっぽを向いてしまう穂に、圭一は怒るといふよりは呆れていた。

「確かに、試合を見てやれなかったのは悪かった。しかしな、俺が見ていることがそんなに大事なのか？」

選手のメンタル面の把握が、これからの自分の課題だな、圭一は自省しながら聞く。

穂の考えていることを、全くといっていいほど掴めない。ただのトレーナー見習いと本業のコーチとの差と言っ

まえばそれまでだが、穂に関してはそのだけでは済まされない。彼が全面的な指導を任されているからだ。

「だって、見てもらいたかったんだもん……」

穂が哀しげに目を伏せ、すねるように口をとがらせる。

試合を誰かに見せたいという感情を、圭一はいまいち理解出来ないでいる。彼の経験によれば、野球の試合に出ることは、あくまでも自分の為だった。もし見せたい相手がいるとすれば、プロのスカウトか大学の野球関係者だけだっただろう。

いや、そうでもないか？ 圭一の脳裏に、高校野球のマウンドが蘇る。あの時、自分は仲間達やマネージャーの為に投げようと思っただけじゃなかったか。しかしそれは、仲間に対する友情のようなものだった。少なくとも、俺は監督に観て貰いたいと思って投げたことはない。圭一は頭を振ってから、大きく溜め息をついた。

「やっぱり、俺じゃ力不足なのかも知れないな。なあ穂、高体連か日本陸連にでも、指導を頼もうか？ 今の成績だったら、二つ返事でOKしてくれるぞ。優秀な専属コーチを派遣してくれる」

特に同意を求めている言葉ではなかった。だが、何気ない圭一の一言に、穂は予想外の反応を見せた。

「えっ、あの、先生……。そんなの、嫌です。私は、先生の指導を受ける価値のない選手じゃないですよね？」

一瞬硬直した穂が、取り乱した様子で言葉を詰まらせる。

どこか怯えた様子で圭一の顔を伺っている。

「言ってることが良く判らないな」圭一は首を傾げた。穂の類いまれな実力を、圭一はいやというほどみせつけられている。だからこそ、専任コーチの話などを持ち出したのだ。

そのことを判っていないのか。彼には意外としか表現できなかつた。

「俺が教えるには勿体ないほどのアスリートだ。それは断言できる」

「……じゃあ、練習します。メニューを教えてください、先生」

穂はそそくさと立ち上がった。

「ん？ ああ」

何故急に穂が練習する気になったのか、圭一にはまるで判っていなかった。

夏休みを目前に控えた時期に行われた、インターハイに向けての市の予選大会では、穂は全力を發揮できなかった。圭一が見ていたにも関わらず、だ。

今まで、最高の記録を出そうと気負った経験など無い為、力の入れどころが良く判らなかつたのが原因だ、と圭一は考えていた。専門的な分析にはほど遠いかも知れないが、あたらじといえど遠からずである。

とはいえ、記録がいまいち伸びなかつたと感じているのは、穂と圭一の二人だけといっても過言では無かつた。百、二百、ハードルのどれもが府大会に進むのには十分すぎるほどの成績だつたからだ。

「もう、判りました」

大会終了直後には気の毒なほどしょげていた穂だが、翌日には、練習前に穂は圭一に対し、悔しさの中にも余裕を見せた。

ここで穂が言う「判つた」とは、大会の感覚を掴んだという意味だ。飲み込みの非常に速い穂がそう言うのなら大丈夫だろう、と圭一も気に病む事なく、いつものように大学の陸上用トラックを借りて練習を始める。

百メートルハードルを走り終え、穂が惰性で流しながら圭一のほうを伺う。

フォーム矯正は常に、地道に鍛えてきた筋力が脚力に転化される度合いを横視みしながら行われていた。無論、基本形は完全に穂の身体に染みついている。もつぱら、身体能力にあわせての微調整だつた。ただ、グラウンドを蹴つて跳躍する力が強くなるだけで記録が上昇するほど、ハードルは単純な競技ではない。その跳躍力をいかに必要最小限に押さえて、あたかも何も無いトラック上を走り抜けるかの如く、無駄のない動きでハードルをクリアするかが問題となつてくる。

「十三秒ジャスト！ 自己記録更新だな！」圭一が声をあげた。

「やったあ！」

久々の記録更新に、穂が喜色を浮かべる。百メートルハードル十三秒ジャストとは、堂々の日本記録であるが、今や彼女にとって敵は日本記録ではなく、自己記録であつた。

あまりにも驚異的に記録を向上させていた為、ここしばらくは自己ベストを上回ることが出来ずにいた。並の選手であればむしろ当然と言つて良い状況でも、穂の場合は違

う。青天井の如く、どこまでも記録が伸びていくような印象があった。練習ではしばしば日本記録を上回る数字を弾き出す。

百メートル、二百メートルでもそれは同様である。練習時における百メートルの自己ベストは十一秒二、同じく二百メートルでは二十二秒二。ここまで来ると、男子選手を相手にしても全く遜色ない記録である。

「よし、ラスト一本で休憩だ」

「はい！」穂が元気良く返事をして、軽い駆け足でスタートラインに戻る。と、足早に流れていた灰色の分厚い雲から、雨が落ちてきた。小雨か、と思っっているうちに、たちまちひどい夕立になった。

到底、練習など出来ないほどの雨脚である。

グラウンドで練習していた大学の陸上部員たちが、右往左往しながら雨宿りする場所を求めて散っていく。

「こりゃ、駄目だな」

圭一も最後の一本を打ち切りにして、穂を伴って陸上グラウンドに隣接するクラブハウスに駆け込んだ。穂が履くスパイクのピンが、コンクリートむき出しになっている薄暗いクラブハウスの廊下に、心地よいとは言いがたい音を響かせる。

「夕立ですね……。ああ、びしょ濡れです」

ぼやく穂に、圭一が日焼け止めに首に掛けていたタオルを投げ渡す。

「こんな大事な時期に風邪でもひかれちゃかなわないからな」

「府大会、もうすぐですね」タオルでせわしなく頭を拭く穂の言葉に圭一もうなずく。

しかし、軽く流して走ったところで、穂のスピードに他の選手は追隨出来ないだろう。それほど穂の実力は桁違いである。目指すべき目標をどこに置くのか。

圭一がそれを指定するのは簡単だった。しかし、ここは穂自身の意思を期待したかった。

「油断は禁物だが、はっきり言って府大会ではまず一位になるだろう。穂にはそれだけの素質がある」

「はい、ありがとうございます」

「で、だ。どこまで行きたい？ 高校生の一番か、それとも日本一か？」

いきなり何を言い出すのか、と言いたげな顔つきで圭一の言葉を聞いていた穂が、ややあって破顔する。

「先生が行けというなら、どこまでも。なんなら、オリンピックに行きましようか？」

穂の口調には、なんの迷いも気負いも感じられない。近所へ買い物に行くような調子で、オリンピックに行くという口にしていた。圭一はそれをむしろ好ましく思った。彼女にはそう言っただけの才能があった。

「よく言った。しかしな、オリンピックを狙うとなると、もう後戻りは出来ない。普通の女子高生のような生活にはもう戻れない。それどころか、一生を左右する一大問題だ」「判っています。でも、ここまできたら、行き着くところまで見てみたいんです。私の記録がどこまで伸びるものなのか、確かめてみたいんです。先生は、私の実力を百パーセント引き出してくれますよね？」

「出来る限りのことはしよう。約束する」

「だったら、大丈夫です」穂は屈託無く笑う。その笑顔を見ながら圭一は思考を巡らせる。

この時点で、モチベーションを与える事には成功したと言えるだろう。しかし同時に、オリンピックという新たな目標が果たされるまで、指導を続けねばならなくなつたのである。それがモチベーションと表裏一体であるために、指導を打ち切る事も出来ないし、穂に報酬を請求する訳にもいかない。

「ま、そっちは成田に払ってもらおうや」

特に契約違反にはなるまい、圭一はやや意地の悪い一人決めをして口元を緩めた。

「なにか言いました？」

「いや。……よし、当分やみそうには無いな。クールダウンして、次はストレッチングだ。大学の学生棟に行くか」

「はい、先生」

その時、閃光がクラブハウス入り口のガラス窓から差し込んだかと思うと、腹に響く雷音が轟いた。女子学生が悲鳴をあげる。雷よりもその金切り声に、圭一は驚かされた。

一方、穂は平然としたものだった。

「穂は雷が怖くないのか？」

「雷は怖くないです。怖いのは……、怖いのは、誰からも相手にされなくなることです」

一瞬だけ逡巡してから、にこりと笑って穂が答えた。

脈絡のない返事ではあったが、圭一には彼女の心境、その一端をかいま見た気がした。

今まで、穂が孤独だった訳ではない。映画と一緒に観に

行く友達もちゃんという。

しかしその反面、陸上部では浮いた存在となっていた。速く走れば走るほど、好記録を出せば出すほど、他の部員からは冷たい扱いを受ける。それが、彼女が真剣に陸上に取り組まなかった理由なのだ。

（走ることで友達がいなくなるくらいなら、走りたくない。そういう事なんだろうな）

だからこそ、穂は自分を信じてくれているのだ。圭一はそう理解する。

穂は、ほぼ万全と言って良い調整を終え、府大会に挑んだ。

ところが、府大会の会場となる陸上競技場で彼女を待っていたのは、予想外に多いマスコミ陣だった。その中には成田の姿もあった。勿論、全国的に知られた選手に対するそれとは比べ物にならない程度の規模だったが、穂の調子が崩れるのではと圭一は緊張した。

「いつたい、どうなってるんだ？」

穂のウォーミングアップにつきまとう記者を尻目に、圭一は成田を捕まえて聞いた。

「市大会であれだけの記録出した選手や。マスコミが放っておかへん」

「そんなもんか……？ 大丈夫かな」

穂の実力は文句の付けようがないほどである。しかし、記録会では決勝では不本意な結果に終わり、市大会でも本調子を出せなかった。圭一は、いかに本番に強くなれるかが穂の課題だと考えていた。ここまでマスコミに包囲され、注目を浴びてしまうとやりづら。

「なあに、これくらい、どうって事無いで。穂ちゃんは、俺たちとは訳の違う天才やで」

むしろ実情を知らない成田のほづが、泰然とした様子で言い切る。

「だといいがな」

圭一の表情は厳しかった。ここまで、必ずしも期待通りの記録を出していない。本来の圭一の仕事内容を考えるならば、記録面にまで責任を持つ必要はないのだが、今更そんな事も言っていられない。タイムとして残らなければ成果があがった事にならないのだ。

「せや。ジュンちゃんが来とるで」

今までの話の流れから何を連想したのか、成田が唐突に

圭一に告げた。その呼び名を聞いて、圭一は眉を跳ね上げて反応を示した。

ジュンちゃん 圭一達の高校時代、野球部のマネージャーだった、出浦純の事だった。

高校時代の彼女は、敢えて気恥ずかしい表現を用いるなら、野球部のマドンナだった。気丈な性格ではあったが面倒見が良く、部員の全員が憧れていたと言っても過言ではない。圭一も成田も例外ではなかった。結局彼女は誰のものにもならなかったが。

出浦は短大進学後、新聞社に就職して、運動部の記者として早くから注目されていた。今春からフリーになったと聞く。それだけ自分の力量に自信があるのだろう。高校時代のマネージャー経験が生きているのか、特に野球に関する話題には特に冴えを見せている。仕事柄、成田とは顔を合わせる機会も多いらしいが、圭一は高校を卒業してから一度も会っていない。

女流記者として活躍していることは、圭一も一度ならず見聞きしている。彼の問いは聞かずもがなのものだった。

第一、取材以外の用事があるとも思えない。

「出浦さんとは、良く会うのか？」

仲間内では大抵の場合ジュンちゃんを通るのだが、性格によるものか、高校当時から圭一はいつも出浦さんという呼び方を崩さなかった。それは十年以上経った今も全く変わっていない。

「まあな。持ちつ持たれつやな」

圭一の口調に羨望の色を感じ取ったのか、成田はにやりとしてみせた。

「へっ、それじゃ、お前が彼女を焼き付けたんだな？」

「まあな。あとで会ってこいや。いいネタを一つ二つ教えたら、きつと喜ぶで」

「出浦さんのご機嫌伺いをする余裕はない。俺は、穂がちゃんと走れるか、そっちのほうが心配だよ」

「相変わらずやな」成田が鼻を鳴らし、つまらなさそうな顔をした。自分が穂の指導を圭一に頼んだ事実すら忘れたかのような、気楽な態度だった。

圭一の心配は、結果的には全くの杞憂だった。府大会の記録は、圭一でさえ興奮を抑えかねるほどの好成績となったからだ。百メートル、二百メートル、そして百メートルハールドル。専門とする三種目全てで、高校記録を更新した

のだ。百メートルハードルは日本記録をも凌駕した。もはやインターハイ出場を云々するレベルではなくなっていた。記録が電光掲示板によって表示された瞬間は、常人よりも周りの人間が熱くなっていた。

「いよいよ、試合でも本調子が出せるようになってきたな」スタンド裏の通路。ハードルを走り終えたばかりで、まだ息を弾ませている穂に圭一が手を差し出した。穂は嬉しそうに握手する。その様子を成田が待つてましたとばかり写真に収めた。

「先生のお陰です」

長尾監督や他の部員もいる前で、穂は頬を上気させ、臆面もなく言い放った。その稚気に、周囲を取り巻いていた記者が、思わずペンを走らせる手を止めて頬を緩める。

本当なら、目の前でこんな事を言われれば、長尾監督としてはプライドを傷つけられたと感じてもおかしくはない。だが、長尾自身は自分の力量を客観的に見ているようだった。たいして気分を害した様子もない。

それどころか、「私も、お陰で面目が立ちます」と、逆に圭一を持ち上げる有様だ。

追い風参考ながら日本記録に匹敵する成績をマークした穂に対し、なにか威勢の良い言葉を期待して集まっていた記者が、今度は矛先を変えて圭一のほうに注目してコメントを求めてくる。

「私も特別なことは何もしていません、全ては穂自身の努力の結果ですよ」

圭一は正直に、そう応じざるを得なかった。こうやって記者連に取り囲まれるのは初めての経験だった。まさか地味な裏方に、こうやってスポットライトがあてられる日が来るとは思わなかった。まんざらでもない、というよりは、困惑していた。

「相変わらずの台詞よね。本当は自分の功績だと思ってるんじゃない？」

記者がある程度散ったあと、辛辣な言葉が圭一の背後から浴びせられる。

振り返った圭一は最初、その発言者が出浦であることに気づかなかった。成田に前もって教えて貰っていなければ、相手が名乗るまで判らなかつたかも知れない。それほど、彼女の印象は高校時代とは変わっていた。

麻のツーピースに白いブラウス姿の出浦からは、マネー

ジャー時代の土埃の匂いは微塵も感じさせなかった。くつきりとした二重瞼も、知性によってとぎすまされた瞳も、ひどく知的な印象を圭一に与えている。

「……やあ。成田から聞いてはいたんだが。見違えたよ」「なんとか冷静さを取り繕おうとした圭一だが、先制した出浦のほう为数段余裕があった。

「答えになっていないわね。でも別に、それはそれで構わないと思うんだけど。選手に遠慮してても始まらないわよ。胸を張っていいんじゃない?」

「先生に何か文句があるんですかあ?」

二人のやりとりを不満げに見ていた穂が口をとがらせ、出浦を睨みつける。出浦と圭一がかつての同級生だったことを知らない穂にしてみれば、どうして会ったばかりの出浦がこうまで馴れ馴れしく圭一に話しかけるのか、理解できないのだろう。

一方の出浦は、穂と圭一の顔を交互に見比べ、やがて楽しげな顔で頷いた。手慣れた仕草で二人に名刺を手渡す。

「穂の事を、取材するの?」

「今日は挨拶だけで退散……してもいいんだけど」出浦が思わせぶりに言葉を切って、圭一に視線を合わせた。「私は圭一君にも興味があるんだけど。取材、させてもらえない?」

「俺を、取材?」穂の視線を気にしながら、圭一が聞き返した。声の上擦っていた。

圭一の狼狽ぶりがおかしいのか、出浦が首を傾げてなおも口元を緩める。後ろで無造作に束ねた明るい色の髪がさりりと揺れた。

「そう。駄目かな?」

「ああ、いや。つまり……」

「先生……?」怒ったような目をした穂が、まっすぐに圭一を見据えている。

「ねえ圭一君、もしこのあと空いてるんだったら、喫茶店でお茶でも飲みながら話を聞かせてよ。……穂さん、これからもどんどん、凄い記録を出して頂戴ね。私、すっごく期待してるんだから。貴女が走ってるのを見てて、ときどきしちゃった。こんなの初めてなの」

出浦は二人に喋らせる間も与えずに、歯切れ良く言い切った。

圭一は、傍らで唇を噛んでいる穂の表情を伺う。彼女は怒りの色をあらわにしていた。

その時、スタンドの出入り口に通じる通路の向こう側から、他の部員を引率する長尾監督が穂の名を呼んだ。これから制服なりジャージナりに着替え、帰途につかねばならないのだ。陸上部員として団体行動を強いられる穂は従わざるを得ない。

「ほら、監督に怒られるぞ。また明日な」どこか救われたような気分になった圭一が早口で言った。穂はしばしためらうような仕草をみせていたが、不意にくるりと背を向けて走り去っていった。別れの挨拶も無しだった。

圭一は出浦に誘われるまま、競技場近くの国道沿いにある喫茶店に入っていた。店内はログハウス調にデザインされている。客の数はさほど多くない。

圭一はホットコーヒー、出浦はオレンジジュースを注文していた。十分に落ち着ける環境であるにも関わらず、取材などという慣れないものを受けて、圭一は半ば舞い上がっていた。のどの渇きがこらえきれず、水ばかり飲んでいる。

「……その癖、変わってないわね。さっきから右肩を回してばかり。焦ったり、緊張したりすると出る癖でしょっ」「参ったなあ……。まあ、俺は昔から進歩してないってことかな。出浦さんはずいぶんと雰囲気変わったけど、どうして物書き業に？」

苦笑いを浮かべた圭一がごまかすように訊ねる。

「……あの夏の経験が忘れられないから、かな。甲子園出場に向けて、一丸となって燃え上がっていた、あの興奮が忘れられないの」

私は運動音痴だから、プレイヤーとして熱狂を作り出すことは出来ない。だから出来るだけその側にいたいと思っ

て、と出浦が笑う。

「本当に甲子園に行けていたら、随分とすつきりしたんだろうな。俺もそうだけど、いまだ残念がってるものな」

「二度と来ない大チャンスだった。あと一步のところ取り逃した。無念に思ってるのはみんな一緒」顔きながら言った出浦の声が曇る。「でも、私は一緒に戦えなかった」

「マネージャーとして、これ以上はないってくらいに頑張ってくれたじゃないか？」

圭一にしてみれば、意外な言葉だった。あの時、圭一達は「出浦を甲子園に連れて行く」為に死力を尽くしたつもりだった。それが、日頃彼らを支えてくれた出浦に感謝の

意を表す、唯一の方法だと信じて。

「私もそのつもりだったけどね。でもなんか違うの。試合が終わったあと、みんな泣いていたよね。スタンドにいた女の子も泣いていたけど、私は泣けなかった。泣いちゃいけないと思ったの。だって、一生懸命戦ったのは圭一君たちであって、私じゃない」

「結局、俺が最後に打たれたからだな。応援してくれたみんなにはすまないと思ってる」

「そう言えるだけましよ」出浦が視線を手元に落としながら低い声で呟いた。

「え？」

その時、ウエイトレスが二人の注文したホットコーヒーとオレンジジュースをテーブルの上に置いた。会話が中断する。

「まだ結婚、してないんだ？ それとも、仕事柄かな？」

出浦がふいに、圭一の節の太い指を見ながら、そう訊ねてくる。指輪の類が一切はまっていない点を指摘しているのだ。

「親父にはさんざんせつつかれてるんだけど、まだ見習い状態だし、相手も居ないしな。……って、出浦さんの方こそ」

出浦さんなら、いくらでも相手がいるだろうに、という言葉で圭一は飲み込んだ。あまりにも世辞めいている気がしたからだ。出浦はその切り返しにも、ストローでグラスの氷をつつきながら口の両端を一瞬つり上げてみせただけだった。

「じゃあまだ結婚してないのって、私達くらい？」

かつての仲間の顔ぶれを思い返すように天井を仰ぎ、出浦は指折り既婚者を数えていく。

「成田はバツイチだから、そういう場合はどっちだ？」

圭一が口元を緩めてそう訊ねる。成田は四年前に一度結婚を経験している。しかし、オリンピックにしろワールドカップにしろ、なにか注目の集まる大会が開かれる度に、鉄砲玉のように飛び出して何日も戻らずに写真をとり続ける成田に愛想を尽かしたのか、彼が家を空けている間に妻に逃げられる憂き目にあっていた。もっとも、本人がそれを気にしている様子はまるでない。

「そういえば、そうね」出浦が軽く頷く。

と、頓狂な電子音が店内に響いた。出浦の携帯電話が着信を告げるメロディだった。

「もうこんな時間、締め切りか」出浦がそこぼし、通話ボタンを押す。

「あ、はい。すぐ戻ります、……はい、はい。……大丈夫です、はい。……判りました！」

言葉切れ良く応対する様に、充実した毎日を送っているという自信が伺えた。

「じゃあ、行くね。あ、圭一君の携帯の番号、教えて貰えないかな？」

言いながら、出浦は自分の携帯電話の番号をシステム手帳のメモページを一枚破って書き付ける。圭一も同様にして番号を交換した。

「いまので取材になったのか？」

「うーん、また話を聞くから、なんとかなると思うわ。じゃ」

自動ドアを開けて出ていく出浦の後ろ姿を見送りながら、圭一は溜め息をついた。

（しかし、彼女は本当に変わったな……。大人になったって事なんだろうか。俺はまだ半人前だからなあ）

噂とは、予想外に簡単に広がるものらしい。

きっかけは、府大会から十日ほど経て、出浦がスポーツの専門誌に載せた記事だった。穂の記録向上と、圭一の指導に関して、かなり突っ込んだ周辺取材が為されていた。

圭一は高校時代の野球部におけるエピソードを絡めて書いてあるのには参ったが、それが出浦の持ち味なのだと思うと、取り立てて文句を言う気にはならなかった。

しかし、圭一にとってはくすぐったいような内容に過ぎなかったが、他の陸上関係者にとっては衝撃を与えるには充分すぎる記事だった。当然といえば当然だった。圭一は陸上指導の専門家ではない。それどころか、インストラクターとしても半人前なのだ。

反面、穂の驚異的な記録が現実に存在している。となれば圭一というコーチが、ただの半人前であるはずがない。陸上関係者は一様にそう考えた。圭一の恩師・瀬川が、トレーナーとして現場で高い評価を受けていることが、その考えを後押ししていた。

結果、「期待の新星・水沢穂を鍛え上げた菱谷圭一とは、スポーツ障害治療の第一人者・瀬川の薫陶を受け、独自の科学トレーニング理論を構築した若き俊英である」という風評がたちまち陸上界で定着してしまった。

それを受けて、あちこちから講演依頼や指導の要請が舞

い込むようになった。あたかも、圭一が選手を預かりさえすれば、たちまち超一流の選手に仕立ててしまおう、といわんばかりの持ち上げぶり。圭一は困惑しきりだった。

無論、騒がれる度合いから言えば、穂の方が圭一のずつと上に行く。最初は陸上競技を専門に扱う雑誌に限られていたが、次第にその話題性に気づいた新聞やテレビのスポーツコーナーで穂の名前や写真が見受けられるようになっていた。その度に「女子短距離で世界レベルを狙う」、「日本陸上界に一大変革をもたらす選手」と、仰々しい枕詞がつく。

穂が発する気負いのカケラも感じさせないコメントが、却って彼女の底知れぬ潜在能力の高さを垣間見せているような雰囲気を作られていた。彼女の健康的で爽やかな容姿には華があり、マスコミ受けした。

穂が望もうと望むまいと、すでに彼女は日本女子陸上界のホープとして位置づけられているのだった。それでも彼女は、その全ては先生の指導のお陰です、と何のてらいもなく断言してしまうのだが。

（それはともかくとして、俺は実際、何をしたのだろうか）
自分に対してはもちろん、穂への評価すらも一人歩きする中、圭一は繰り返し自問するようになっていく。

穂の驚異的な記録の伸びは、彼女が本来持っている能力が現れてきたに過ぎない。圭一がやったことは、せいぜいが穂の能力を数値に置き換え、その増減を計測し続けていただけだ。勿論、トレーナーとして傷害には細心の注意を払い、常に全力が出せるように心を砕いてきた。だが、モチベーションを彼女に与えたという自信は持てないでいる。

大学のグラウンドで行う練習にも、しばしばマスコミが取材に訪れるようになった。

今も、穂がトラックの脇でインタビューを受けている。圭一はグラウンドの外周を取り囲むコンクリート製のフェンスの上に腰を下ろして、その様子を望見していた。

特に隠し立てするような練習はなにもやっていないのだが、彼らとしてはよほど秘密の特訓めいたものを期待するらしい。秘訣のようなものをしつこく訊ねてくる。

「おい、そばに行っちゃったほうがええんとちゃうか？」
取材という名目で圭一と穂の様子伺いに来ていた成田が圭一の背中をつついた。

「穂に取材してるのは専門誌の名物記者だけ。あんまり専

門的なこと聞かれても判らないんだ。妙な答えを返して恥はかきたくない」

「このところ、立て続けに取材を受けた圭一は、ややマスコミにアレルギー気味だった。」

「ま、記録が伸びているうちは適当抜かしでええやないか？ 各コーチちゅう評価をありがたく頂いておきやええねん」

第三者の成田は気楽だ。そう言っつて圭一をからかつのは、これが最初ではなかった。

やがて取材を終えた記者は、圭一に礼を言い、帰っていった。穂も圭一の元に来る。

「悪いな。化けの皮がはがれるのが怖くて、逃げちまった」苦笑いをみせた圭一が腰を浮かせ、グラウンド上に降りる。成田もそれに倣った。

「もう。私だつて専門用語で聞かれても判らないんです」穂が頬を膨らませるが、目は悪戯っぽく輝いている。

「どうなんや、穂ちゃん？ 取材がいっぱい来ると、練習とかも変わるやろか？」

成田が訊ねる。

「変わったことといえば、指導、最近減ってますよね。週二日程度になってますよ。前は週に三回はコーチに来てくれてたのに？」

穂の答えは、同時に圭一に対する問いでもあった。

「そうなんか？」成田が驚いたように、圭一の顔を伺った。

圭一は軽く息をついた。どう応じてやるのが一番良いのか、と考えつつ、つい右肩を回している。最近、穂は圭一の事を強く頼るようになっていた。日常の何気ない会話や、本来であれば女性相手にするであろう質問なども、とにかく圭一に向けるようになってる。

「初潮が来ないんです」なんて相談されたときは驚いたよな）

思い出し笑いをしそうになった圭一だが、咳払いをして真剣な顔つきになる。

「コーチは結局コーチでしかない。走るのは選手である穂だ。俺の存在意義なんて、穂の潜在能力に比べればちっぽけなものだ」

穂が自分を信頼してくれることには、圭一は指導者冥利に尽きると思えた。しかしそれで良いのか、彼の内心には葛藤がある。だからこそ、こうやって敢えて突き放し気味の言葉を口にするのが多くなっていた。

「そんなことはありません！」圭一の思いを知ってか知らずか、穂はむきになって反論する。「私、先生のお陰でやつと陸上が面白くなってきたんです。もっと色々な事を教えて欲しいのに……」

「穂が頑張ってくれたから、こっちの評価もあがってるんだ。だから、取材とかが多くなって指導の時間が取れない。商売繁盛、結構なことだよ」

圭一は冗談めかして言うが、圭一は真実の全てを口にしていた訳ではなかった。指導の時間を減らしたのは、一人前のトレーナーになるべく、以前にまして熱心に技術習得に励むようになった結果だった。

周囲の「名コーチ」という評価に見合うまでとはいかなくとも、せめていっぱしのトレーナーにならなくては、穂に申し訳ない。その気持ちだが、これまでどこかのんきに構えていた彼の気持ちを引き締めていた。だが同時に、穂の能力がどこまで伸びるか、指導を通じて見届けたいとの気持ちもある。矛盾していた。判っているが、圭一はその気持ちを偽れなかった。

「先生の為に、私は走ってるんですか？」

独り言を呟くような穂の口調。そう言われると圭一は何も言い返せない。

「穂が走るの、穂自身の為だよ」ただ、そう答えるしかない。

「いえ、いいんです。先生の為で。私、そのほうが頑張れます。先生に誉めてもらったら嬉しいし……」

たいして意味のない、何気ない呟きだったかも知れない。だが、穂のこの言葉の重みを、後々圭一は感じることになる。

「ところでだ」穂と圭一の会話から取り残されていた成田が、殊更に大きな声を出して割り込んできた。「ジュンちゃん、あれからこっちにも取材に来たか？」

「ああ、二度ほど来た。『自分の記事で陸上界が動いた』って喜んでた」

圭一が笑顔で頷く。彼も出浦が喜ぶ姿をみるのは嬉しかったが、それを聞いた成田は圭一以上に相手を崩していた。

「出浦さんのことですよね。……先生たちとは、どういう関係なんですか？」

穂が問う。彼女だけ、表情が険しい。

「高校時代の同級生。野球部のマネージャーだった」圭一

より先に、成田が即答していた。

「先生は野球部だったんですか？」

「ああ。こつみえてもピッチャーだった。で、こいつはキャッチャー」

「ふうん。私、あの人あんまり好きじゃありません。なんだか、私自身も知らないような事まで見透かされそうで」

訊ねるだけ訊ねた上でそう言い残すと、穂は圭一の指示もまたずにさつさと軽いランニングを始めてしまう。

「あらら。穂ちゃんはジュンちゃんが嫌いかいな。なんでやるな？」成田がわざとらしくずつこける仕草を試みせる。

(やっぱり、ここのところずつと取材されてばかりじゃ、ナーバスにもなるよな)

圭一は穂の態度をそう解釈する。こついう場合はどうすれば良いのだろうか。取材拒否という選択肢はナンセンスだ。これから全国大会、いや世界での檜舞台で戦わねばならない以上、マスコミへの対応くらい軽くこなせなくてはこまる。

「とは言っても、こればっかりは場数踏むしか無いよな」

トラックのバックストリート側まで走っていった穂の姿を目で追いながら、圭一が独り言を呟いた。心配事といえばその程度であった。その時まででは。

第三章

インターハイまで一ヶ月を切ったある日。瀬川接骨院に、思いがけない客人が訪れた。日本体育連盟の役員と、長尾監督だった。

「水沢が、何か？」

応接席に並んで座る全国レベルのアスリートを相手にする体連役員と、冴えない一介の高校の陸上部監督を見比べつつ、圭一が聞く。同席する瀬川も怪訝そうであった。

「なんと言いますか、非常に難しい問題が発生したのです」役員は苦渋に満ちた顔つきで切り出した。瀬川は、相手が大つぴらに出来ない問題を抱えている事に出迎えてすぐ気付いたらしかった。適当な理由を付けて、芳江を買い物に行かせたくらいだ。

「実は、水沢選手の記録があまりにも素晴らしいので……。その、万全を期すという形で、あくまでも念のためにですね、薬物検査及び性別検査を実施させて頂いたのです」

「まさか！ なにか薬物が検出されたとか言っくんじゃないでしょうね」

圭一の全身に悪寒が走る。しかし、彼はドーピングなど示唆したこともないし、思考の片隅に登らせた事すらなかった。その点には絶対の自信があった。

穂の身体には、薬物を用いる必要など皆無なのだ。妙な細工などしなくても、彼女は他の選手よりもずっと速く走ることが出来る。

「もし、万が一薬物反応があったとしたらそれは、彼女の驚異的な記録を妬んだ何者かによる嫌がらせ以外に考えられない」

圭一はそう主張した。が、圭一の気負いを受け流すように役員はゆっくりと首を振った。

「判っております。薬物検査には一切引つかかっておりません」

「じゃあ一体、なんだというんですか？」

「菱谷さんも、女子選手の性別検査についてはご存じでしょう。水沢選手の学校で、献血を呼びかける日がありまして、その際、水沢選手の血液を採取し、染色体を検査致しました。今回は血液検査だけで、その、人道上に関わる外診は行っておりません」

「……それで？」 いったい何が言いたいのかわからず、圭一は不審そうな表情を隠さずに訊く。次の瞬間、役員が口にした言葉が全てを暗転させた。

「水沢選手の染色体はXXY型であることが、複数の医師によって確認されました。なお、この検査は、匿名で行われておりますので、体連の一部の関係者しか、まだこの事実を知りません」

「なっ、馬鹿な！」 圭一は目の前が真っ暗になるといったとえが、現実に沿った表現であると思いついた。「染色体異常、だなんて……！」

有性生殖をする生物の性別の大部分は、性染色体によって決定される。人間も当然例外ではない。人間の場合、男性はX染色体とY染色体を一つずつ、女性はX染色体を二つ持つ。ところがごくまれに、染色体を三つ持つ人間がいる。それがXXYという組み合わせであった場合、外見はほとんど女性と変わらないとされている。だが、医学的に女性とは言えない。体連役員が大ざっぱにその事を説明する。

「それを、どうして私に」 しばし頭を抱え込むように黙り

込んでいた圭一が、懸命に声を絞り出した。彼の問いに、長尾監督が応じた。

「私のほうから、お願いしました。菱谷さんは水沢の体調管理に尽力されておりますし、瀬川先生にも当然知る権利があると判断したのです」

「それは……どうも。で、穂には？」

圭一にとって最も気がかりだったのが、穂自身への対応だった。だが、役員と長尾監督が同時に首を振る。

「水沢選手の染色体異常が確認され、医学上女性でない判断された以上、競技会への出場は不可能です。ですから、今後どうするか、慎重に協議する必要があります」

「それを、菱谷さんにお任せしたいと思い、こうして伺った訳です」

体連役員の言葉を長尾が補足する。それを聞き、圭一は顔をひきつらせた。穂への選手生命の死刑宣告を、圭一に押しつけようとの魂胆に気づいたからだ。彼女がどんな反応を見せるか、考えただけでも胸が痛む。

「水沢は、菱谷さんを大変信頼しております。ですから、菱谷さんのほうから話して頂けるのなら、水沢も比較的シヨックを受けず、現実を受け入れると思うんです」

声もない圭一に対し、長尾が念を押すように付け加えた。日頃から気よわげな雰囲気を漂わせているのは伊達ではなかった。自己防衛と責任転嫁に掛けるには本能的に対処出来る男なのだ。圭一は苦々しく思った。

だが、長尾への嫌悪感を募らせたところで、穂の抱えた一大事が解消できるわけではない。つかの間ではあったが、圭一は心底迷った。しかし結局は、聞いてしまった以上否は無い、という結論に達せざるを得なかった。

苦虫を噛み潰す表情で圭一が了承すると、役員と長尾は憎らしいほど安堵の表情を見せて帰っていった。

「どうすりゃいいんだ……」圭一は頭を抱え込んだ。かつて、穂の指導法に悩む度、口にしていた台詞だった。だが、今度ばかりは本当に対処の使用がなかった。

「……終わっただな」それまで沈黙を保っていた瀬川が、呻くように言葉を漏らす。

「先生。しかしそれではあまりにも穂が」

「だが、どうにもならん！ あきらめろ。トレーナーに治療できる問題じゃないんだ」

怒気を孕んだ声で、瀬川が言い切り、席を立った。瀬川の背中を見て、圭一もそれ以上言葉を繋げなかった。瀬川

もまた、やるせない怒りに肩を震わせていたのだ。

失意のまま、圭一は帰宅した。

生活に必要な最低限の荷物しかない、殺風景なアパートの畳の上を落ち着かなく歩き回ったかと思えば、腕を組んで座り込む。どう対応して良いものか、答えのない自問を繰り返しているうちに、気がつく、成田に電話を掛けていた。

電話をしたものの、成田に率直に真実を話していいものか、一瞬悩んだ。どう考えても、軽はずみに吹聴して良い話ではない。体連役員や長尾ですら、真実を知る人間を最小限にとどめる努力を払っていたのだから。

それでも圭一はありのままを伝えることにした。相手は報道人でも、自分の昔からの知り合いでもない。穂の将来を案じる一人の親戚なのだと自らに言い聞かせて。

圭一の言葉を聞いて、受話器の向こうで成田が沈黙した。言うところだが、ようわからん。選手生命が断たれたってことなんか……？』

戸惑いを隠せない声が聞こえてくる。彼の問いは真実を突いてはいたが、あまり事の重大さを認識している様子は無かった。

「そうだ。彼女は医学的にみた場合、女性とは言えないんだ」

圭一の言葉に、成田が怒りを爆発させた。

『阿保なこと抜かすな！ 何が医学的や！ どう見たって、穂ちゃんは女の子やろが！』

「……以前、メンス、いや、正確には初潮が来ない、と相談された事がある。運動をやっている女性にはしばしばある事だから気にするなと教えたし、実際こつちも気に留めていなかったんだが……」

圭一に対して全幅の信頼を置く穂が、質問された方が赤面するような事を訊ねた事があった。圭一は、その質問の意味をもっと重視しておけば、と一瞬考えてから、即座にそれを否定する。穂が医学的に女性でないことを自分の手で突き止めていたとして、それがいったいなにならうのか。

『どういう事や。もういっぺん説明してくれ』

一人、思考をあてもなく巡らせている圭一の説明に、成田は困惑して訊ねる。

「染色体X Y型の人間は、社会生活のほとんどを健常者

と変わらずに過ごせる」「ここまで他人事のような口調で言ってるから、圭一は言葉を切った。そして、罪を自白するような口調で続けた。「ただ一つの相違点は、子供を産めない事だ」

『なんやと……！』成田が悲鳴のような声を出す。ようやく、圭一の言わんとした事を理解した証だった。圭一は大きく息を吐いてから、成田に率直に疑問をぶつけた。

「なあ、成田。俺にはどうしていいか判らん。穂は社会的にはあきらかに女性だ。だが、いくらその事を強調しても、彼女がなんの衝撃も受けないとは考えられない。事は、陸上選手でいられないだけでは済まないんだ」

しばし絶句していた成田が、怒ったような口調で訊ねてくる。

『せやかて、黙っとる訳には行かんやろ？』

「そうだ。だから困っている」

その後、しばらくやりとりがあったが、最後まで結論が出ないまま、電話を切った。

穂の指導は、明日にも予定があった。本当なら今すぐ伝えるべきなのだろうが、どうしても踏ん切りがつかない。

圭一は接骨院での仕事を言い訳にして、問題を先送りにした。その間に、穏便に話を進める方法を考え続けた。しかしながら、名案がそう簡単に浮かぶはずもない。翌日、圭一は覚悟を決めて穂の元に向かった。

いつも練習を始める場所である、大学のグラウンドのスタンドの脇。その日、穂は制服姿のまま、そこに立っていた。その姿はいつもと違って、ひどく存在感が無かった。

「実はな……」圭一が重い口を開きかける。

「……成田さんから聞きました。私、女じゃ無かったんですね」

「！」圭一が言葉を失う。

見ると、穂の眼元には、泣きはらした痕があった。だが、無理をして笑顔を保っている。圭一を逆に氣遣ったことらしい。圭一はより一層胸苦しさを覚えた。成田が、苦悩する圭一の代わりに汚れ役をかって出してくれたのだ、と理解する。圭一は成田に感謝すると同時に、己の責任を放棄し、全う出来なかった自分に、猛烈な自己嫌悪を感じた。

「済まないっ………！俺は………」

「そんなぁ……。先生のせいなんかじゃないですよ。たとえ、私が先生の指導を受けずに、好記録も出さなくて、普

通に生活していても、私は私。最初から女じゃなかったんですよ」

穂の言葉は、客観的に観れば正論なのかも知れない。だが、それだけに圭一は胸が押し潰されそうな苦しみを味わっていた。たとえ不条理であろうと、取り乱した穂に罵倒された方が良く、とさえ思う。それで彼女の気が少しでも晴れるのであれば。

「しかし、能力は発揮するべきだと教え、記録の世界に引っぱり出した責任は……。世間から注目されるほどの記録を出したばかりに、こんな事になるなんて」

「もう、いいですってば。謝られても困ります。男の部分が混じってるんなら、少しくらい足が速くても、当たり前だったんですね。それなのに調子に乗っちゃって、馬鹿みたい」

圭一は、掛けるべき言葉を思いつけなかった。どんな言葉も、気休めにすらならない。

「でも、私、これでも割と結婚願望があっただんですよ。一度は結婚してみたかったなあ」

「君は社会的には立派な女性だよ。結婚だって出来る」

「でも、子供は作れないんですよ……」

「それは……。だが、子宝に恵まれない身体の女性でも、たくさんの方がちゃんと結婚している。心配はいらない」

再び自己嫌悪に陥る。彼女が「自分が医学的に女性でない事」を知ってしまった事が問題なのだと、他ならぬ圭一自身が気づいているからだ。

彼女が自分の染色体異常を知ってしまった以上、交際相手のその事実を告げるか、隠しとおさなくてはならない。

どちらにしても、苦渋の選択になる。

穂が、懸命に作っていた笑顔を消した。目元には涙が浮かぶ。

「じゃあ、私と結婚してくれますか？」

「穂、なにをいったい……。」思い詰めた表情をした穂の唐突な言葉に、圭一は困惑した。

「あ……。！ ごめんなさい。今のは、忘れて下さい」

穂は自分の言った言葉の意味に気づいてか、頬を赤くしていた。場違いとしかいいようのない反応だったが、そこに圭一は言いようのない悲しみを感じていた。

練習をする事もなく、早々に圭一はグラウンドをあとにしていた。とても長話をする心境にならなかった。という

より、穂の顔を見ているのが辛かった。一言で言えば、逃げ出したと評しても良いかも知れなかった。

自己嫌悪にさいなまれながら、圭一はその足で私立図書館に向かった。染色体異常に関する曖昧な知識を整理するためだ。遺伝に関する生物学の本を手にとって、索引で「染色体異常」を探す。

その結果、染色体がXXY型は、クラインフェルター氏症候群と呼ばれ、医学的には雄であり、生殖能力を持たない事、乳房の肥大や精神薄弱が現れやすい事、などを知った。

ただ、どの本を調べても、外見上は男であると書かれているのが気になった。

「穂は女の子にしか見えないぞ……？ 染色体異常の他のパターンだったのか？」

もっとも、たとえばXXX型やXO型の異常であれば、医学上女性として認められるのだから、これほど問題にする必要もないはずである。第一、過去において同じように染色体異常が理由でグラウンドを去った女子選手は数多く存在している。

(結局は、個人差なのだろうな)

と、圭一は結論づける。染色体に異常が無くても、女性的な男性も男性的な女性もいる。穂の場合、女性的な特徴が多く発現していたのだろう。

「それにしても、ひどい……！」

一時間近く本を調べ続けた圭一は、閲覧用の席で大きく伸びをしてから、思わず盛大に溜め息を付いた。静かに本を読んでいた数名が何事かと怪訝な顔をあげたほどだった。圭一は、冷徹に記された染色体異常の症例の数々に、ひどくショックを受けていた。それらに比べると、穂は奇跡的なまでに恵まれているとも感じた。

実際、クラインフェルター氏症候群が運動能力に優れているとの記述は、どこにも見あたらなかった。彼女の素質は、染色体異常とは何の関係もない。それに、今までの言動を見る限り、穂は人並みの知性と感性を持っている。やや情緒不安定なところもあるが、素晴らしい集中力を発揮する時もある。社会生活を送るのに、何の支障もない。

そこまで考えて、圭一は再び、今度は小さく溜め息をつく。穂の能力が優れているだけに、染色体異常という壁がなんとも恨めしく思われたのだった。

(これが神の悪戯などと言うのか？ 畜生め。俺は神なん

か二度と信じないぞ！)

その晩、圭一は讚和大附属高から電車で二駅ほどのところにある穂の家を訪れた。彼女の両親に事情を説明するためだった。

「これは、わざわざどうも……。娘は、気分が優れないと言つて自分の部屋で寝ております。……どうぞあがつて下さい。狭いところですが」

玄関先。圭一を丁寧な物腰で出迎えた両親は、共に五十代半ばに見えた。十八歳の娘を持つ親にしては少し歳を取っている。

応接間に迎え入れられた圭一は、話を切り出すのに相当の勇気が必要とした。が、意外にも両親は穂の染色体異常について、前々から知っていたという。

「私達は結婚して十年近くも、子供に恵まれませんでした。これはもう、どちらかに問題があるのだとあきらめ掛けた時、あの子を授かったんです」

洋風の応接間のソファに座る穂の父親が、訛りを感じさせない発音で、そう話した。その姿はひどくやつれ、頼りなく見えた。

母親がコーヒーを二人に運んできた。それを置き、そのまま父親の横に腰を下ろす。

「私は三十代後半になっての初めての妊娠で、正直、とても不安でした。だから、元気にあの子が生まれた時は、本当に嬉しくて……」

母親の口調には、まるで穂がこの世の者ではなくなったかのような暗い響きがあった。勿論当人は気づいていない。

染色体異常は、母親の出産時における年齢が大きく影響する。高齢になるほどその発生率は上昇する傾向がある。

圭一は図書館で仕入れた知識を思い起こした。

「いつ頃から、その、染色体の問題に……？」

圭一が口にしたのは、ほとんど意味の無い問いではあった。が、何か言葉を発していないと、沈黙に押し潰されてしまいそうだった。

「あの子が生まれてすぐです。お医者様が気づかれまして。検査してみたら、XXY型だと判ったのです」

母親がそう答えると、しばらく二人とも黙り込んでしまった。圭一にしてみれば、事情の説明が不要だと判った以上、話すべき事も特になくなってしまったといえる。気まずい沈黙が続いたが、結局それは圭一によって破られね

ばならなかった。

「女の子として育てようと思われたのは、どつしてです?」

圭一はそう口にして、あまりにも非難めいた言葉であることに自分で驚いた。あたかも今回の問題の責任を、両親に全て押しつけようとする感じさえ伺えた。

「それは、まあ、見分ける一番の特徴があれば、とても、男の子だとは言えませんでした。ただ、大きくなっていく内に、顔つきが男にしか見えなくなったらどうするか、それが心配でした。幸い、親の目にも、充分に女の子らしくなつて、安心していたのに……」

『穂』という名前も、男の子としても女の子としても通用するようにと考えた名前だったんです」穂の両親は、全て過去形で話していた。その言葉の端々に、今まで守り通してきた何かを失った悲しみが溢れていた。

彼らは愛する娘に関する様々な出来事を圭一に語った。

圭一が既に穂から聞いた話もあれば、初耳の話もあった。穂が小学校三年生の時、神奈川から大阪に引っ越してきたことを聞き、圭一は初めて彼女の発音が綺麗な理由を知った。

(だが、まだ穂の染色体異常の事実はごくわずかな人間しか知らない。何も、敢えて大々的に公にするような話ではない)

この両親が十八年に渡つて抱いてきた喜びと不安を思うと、圭一は胸を打たれる思いだった。瀬川が言ったとおり、穂が陸上競技の大会に出られない以上、圭一がこれ以上指導を続ける理由も必要性も無くなった。圭一はこのまま放つて置くつもりはなかったが、しばらくはそつとしておくべきだと考えていた。だが、水谷の将来を心から案じている哀れな両親を前にして、知らぬ振りは出来ないと思ひ知らされた。

「なんとか、今までと変わらぬ生活が出来るよう、努力してみます」

「よろしくお願いします。娘は、先生のことをよく話してくれました。今まで、とても良くして下さったそうです。勝手な頼みとは思いますが、娘の苦しみを和らげてやって下さい」

深々と頭を下げる両親。圭一は決意を一層新たにした。

翌日から、圭一は陸連・体連の関係者を精力的に訪問した。全ては、自然な形で穂を陸上界から身を引かせるシナ

リオを作り上げるためだった。瀬川も「最後まで面倒を見てやるのが、トレーナーとしての勤めだろう」と、好きにさせてくれた。

こうなつては、あれほど大々的に騒がれたことが恨めしかったが、不満を漏らしている暇など無かった。

為す術もなく、数日が経った頃、当の穂から電話が掛かってきた。会って話かしたいとの事だった。気持ちの整理がついているか確かめるためにも、圭一は快く申し出を受けた。

「近くまで、散歩しませんか？」

待ち合わせ場所は讃和大附属高の校門前。私服姿の穂は、圭一と挨拶を交わすのもそこそこに歩き出す。学校近くの緑地公園に入ったところで立ち止まる。夏休みであり、様々な世代の人達が行き交っている。

その表情を一樣に、平和そうな、と評して良いが、圭一は断言できない。しかし少なくとも、穂のように思い悩む事柄を抱え込んでいる人はこの場にはいないだろう、彼は何となくそんなことを考える。

「先生、高校球児だったんですね。ピッチャーやってたっ
て」

しばし無言だった穂が、ふいに訊ねてくる。

「ああ。もう十年近く前の話だ」

穂の心中ではいったいどんな思考が渦巻いているのか。

圭一はふと、記録会での一件を思い出した。結局、羽島が率いる星ヶ丘学園高校野球部は、四回戦まで勝ち進んだものの、惜しくも予選敗退していた。彼らを倒したチームは結局府の代表になった。

「前、肘を痛めて野球を諦めたって言っていましたけど。その時、どんな気持ちでしたか？」

「そうだなあ……。俺の場合は三年で、夏の予選が終わった段階で、これ以上無理だと医者に言われたからなあ。一通りやり終えたあとだから……。大学のセレクションを受けられないのは参ったけど。大学ではずっと野球部のマネージャーだったし」

圭一は、穂の心境をかいま見た気がした。圭一に自分と同じ、挫折した人間の過去を捜そうとしているのだ。圭一が言葉に出来ないような苦労を経て、指導者として再起した、そんな物語を期待して。

もし本当に、彼女が期待するような物語の主人公ならば、と圭一は忸怩たる思いを抱く。自分が肘を故障して野球を

断念した事など、穂の染色体異常などに比べれば何事でもない。

「……やっぱり、肘を痛めなかったら、プロになりたかったですか？」

「そりゃ、ガキの頃からの夢だったからな。夢を立たれたのは穂と一緒に……。すまない。埒もない慰めの言葉なんかいくら言ったって……。状況が違いすぎるよな。何か本当に気の利いた事を教えてあげられればいいんだが」

「いえ」穂が黙ってしまったと、嫌な沈黙が訪れた。圭一は、自分の方から何か話をしなければと思うのだが、言葉が出てこない。

「野球って、面白いですか？」

恐らくは目論見が外れたにもかかわらず、穂はまだ野球についてこだわっていた。

「穂は野球のルールが判るか？」

「大体は」

「野球の面白いところはな」圭一は、言葉を選びながら話し始める。「ごく単純なように見えて、実は底知れない奥深さを持っている点だ。ルールを知らない者にとっては、投げられたボールをバットで打つ、野球はそれだけのスポーツだ。しかし、ルールブックの分厚さ一つ取ってみても、本質がそれだけでは言い足りない事が判る。走・攻・投・守、それぞれが複雑に絡み合っていて、とても一言では言い表せられない」

「それが魅力……？」

「いや、ただ複雑なだけが魅力とは言えない。どんなに複雑なルールがあっても、本質的にパワーとスピードのある選手が活躍出来る。それでいて、より緻密で頭腦的なプレーで、時にはパワーとスピードを凌駕出来る時もある。そのバランスがいいんだ」

「へえ……。私、団体種目って、本格的にやったこと無いんです。チームプレーとか、団結力とかが苦手だし」

「野球はただのチームプレーを要求しはしない。限りなく個人競技に近いスポーツだ」

「え、そうなんですか？」

「野球は基本的に九人で行う。だけど、打順があり、攻撃側は一人で相対しなければならぬ。それは守備側でも同じ事。マウンドに登るのはたった一人。他の八人も、それぞれに守備位置が決まっています、みんな違う役割を与えら

れる」

「でも、個人技だけじゃ勝てないんでしょう？ 管理野

球って、よく言うじゃないですか」

「あれはな」

圭一は言葉を切った。必要以上に熱のこもった話し方をしている自分に気づいたのだ。

「どうかしましたか？」 穂が首を傾げている。

「こんな話、面白いかな？」

「はい。続けて下さい」

表情を見る限り、穂の言葉に嘘は無いようだった。圭一が一呼吸置いて続ける。

「管理野球が選手にとって面白くないというのは、自分が何をやっているか理解出来ていないからだ。選手にはそれぞれ特性がある。監督はその特性を見抜き、見合った仕事を与える。送りバントとかだな。選手である以上、自分が何が出来て、何が出来ないかを把握しなければならぬ。何でもホームラン狙いというのは、本当の野球とは言えない」

「面白そうですね。……何だか、野球がやりたくなっちゃったなあ」

穂が発したその言葉に、圭一はどこかわざとらしさを感じていた。あるいは熱心に野球の話をした自分に対する追従のようなものかもしれない、と圭一は思った。

「じゃあ、バッティング・センターにでも行ってみるか？ 野球の一部が判る」

圭一にしてみれば、半ば冗談のつもりだった。が、穂は嬉しそうにうなずいた。

公園からほど近くにあるバッティングセンターは、親子連れが一組いるだけだった。

「穂は、利き腕はどっちだ？」

「右です」

「よし、じゃあ俺と一緒にだな」

圭一は見本を見せるために先にゲージに入った。備え付けの金属バットを手に取り、右打席で構える。

「利き腕と逆の手がグリップの下に来る」

圭一はコインを投入口に入れた。マシンが作動する。

アーム式のマシンが等間隔で三十球を投じた。さすがに勘はいささか鈍っていたが、元高校球児の打球はしばしばホームランコースを描いた。

「凄おい！」穂が大げさにはしゃぐ。圭一はバットを持つたままゲージを出た。

「ほら」バットを手渡された穂は、ゲージの中で、見よう見まねで構えてみせた。一度ブルンとバットを振り回す。ややバットの軌道が波打っていた。

「左の脇を開けないようにして振るんだ。上から振って、ボールを叩き付けるように打つ」

圭一は、いきなり本格的な指導を行っているような錯覚を覚えた。馬鹿馬鹿しいと思う。しかし反面、穂の気が晴れるならそれで構わないと思う。バットでボールを綺麗に弾き返すのは快感だ。数度の素振りで、見違えるほどヘッドスピードが速くなった。

「そろそろ、ボールが打てるかな？」

穂が入ったゲージは、マシンは時速百キロの球を投げるようセットされている。素人なら男でも、最初の十球はまるで打てないのが普通である。

たぶん、穂も同じだろう。かえってストレスが溜まる結果も、十分予測出来た。だが。

（冷静に考えればそれはすなわち、何故俺は、こんなにも期待して穂を見ている？）

圭一が自問する。もう彼女に対して陸上の指導を行うことは無い。それだけに、何かを教える事が、これで最後になるかも知れない。その思いが穂に対する熱心なアドバイザーの根元にあるのだ、と気づく。

「行きまーす」穂はコインを入れ、急いで構えた。

機械のランプが赤く灯り、ボールを先端部に乗せたアームがゆっくりと回転する。

初球。耳に付く駆動音と共に発射されたボールめがけて、穂がバットを旋回させる。

カキン、と気持ちの良い打球音。ボールはライナーですっ飛んでいった。

圭一は思わず目を見開いた。だが、二球目、三球目は空振り。四球目は真上にあがった。五球目も空振り。

「全然当たらないよぉー！」助けを求めようと穂が後ろを見る。

「タイミングが遅れてる。もっとマシン側でボールを叩くようにしたほうがいい。バットの持ち方は、小指の握りを意識して。握る位置は今より指二本分上」

六球目。これも空振り。

「ボールの下を振っている。ボール一個分、イメージより

上を振る」

次第に、初歩的なアドバースにも熱が入り始める。それにつれて、穂の打球は確実に芯に捉えられた鋭いものになっていく。

最後となる三十球目。穂は打球をマシンを防護するネットに叩き付けた。

「どうだ？ 感想は」ゲージを出た穂に圭一が問いかける。「手が痛いですが。でも、面白かった！」

この時だけは、己の身体に刻み込まれた消しようのない刻印を忘れたかのような、華やいだ表情を穂は見せた。

「手が痛いのは、握力が足りなくて球威に押されているからだな。でも、最初にしたら上出来だよ」

「先生が色々教えてくれたから……です」

肩をすくめ、上目遣いで穂が言う。先生のお陰。いつもの台詞だったが、今までは意味あいが違うことを、圭一は嫌と言うほど実感していた。コンディショニングならともかく、実際の競技で何か教えるほどの知識があるとすれば、野球しかない。圭一は、正直にそう打ち明けた。もう、過去形で話すしか無いのが辛かった。

「だから俺が今まで穂を指導してきたのは、ずいぶんと力不足だったと思う」

「そんなことは……」穂は語尾を濁した。自分でもどうすべきなのか、なにがしたいのか判らないという迷いが、圭一にも感じ取れた。

(だが、もはや俺が彼女を指導することは出来ない)

圭一もまた、迷っていた。進むべき方向を模索し続けた。いた。

一週間ほどして、また穂から電話があった。バッティングセンターに行きたいという。

声の調子は大分落ち着いていた。一方の圭一は、それだけでは単純に喜べない。

(頼りにしてくれるのは嬉しいが、早く彼女の新しい道を見つけてやらないと……)

指導は出来なくとも、最後の仕事として、穂の今後の事を考える。それが圭一が自らに課した使命だった。

新しい道は、必ずしもスポーツとは限らないだろう。だが、難問が残ったままだった。

それは、今まで素晴らしい記録を残しておきながら、ど

うしてインターハイに出ないのか、理由を関係者に説明することだった。

染色体異常の事実は、ごく一部の人間しか知らない。公表しても、何も得にならない。他の、判りやすい理由が必要だった。怪我・故障では一時凌ぎにしかならない。並の選手なら、辞めようがどうしようが、誰かに説明する必要はない。だが、穂はオリンピック代表候補とまで言われたトップアスリートである。引退会見の一つも行って、納得の行く理由を説明しなければ、あれこれと詮索されかねない。

勿論、他の理由をでっち上げる事は可能だ。しかし、穂の今後を考えると、どうすべきなのか、良く判らなくなる。圭一の今の仕事は、彼女を円満に陸上から足を洗わせ、新しい何かを始めさせる事である。そろそろ陸上関係の記者が、練習を全く行っていない穂の動きを気にし始めている頃だろう。急がねばならない。

圭一の焦りとは裏腹に、穂のほうはかなりいつものマイペースぶりを取り戻しているように見えた。一週間バツティングセンターに通い詰めていたのか、穂のスイングは見違えるほど良くなっていた。こんな才能もあったのかと、圭一は驚きを隠せない。つくづく、その才能が惜しい。その思いが彼の胸を満たす。

「どうですか？」

「前よりずっと良くなってるよ」

「へへ。じゃあ、今度はキャッチボールを教えてください」

穂は、用意していたゴム製のおもちゃのボールを持って、緑地公園の芝生に圭一を連れていった。

「どうしてキャッチボールなんて？」

「これも、野球の一部でしょ？ 野球なら教えられるって、先生言ったじゃないですか」

そう言いながら、十メートルほど離れた穂が圭一にゴムボールを投げる。

槍投げで六十メートル近くを投じたという強肩だけあって、「女の子投げ」ではない。しかし、やはりフォームはぎこちない。

「しょうがないな……」

圭一は、穂の考えていることを察した。「野球なら教えられる」の一言にすがっているのだ。自分の指導が終わりを告げないように。たとえ、野球など教わっても何の役にも

立たないことを知っていても、彼女には他に方法が無いのだ。

これじゃ、気晴らしどころか、より一層、穂の気持ちにふんぎりを付けさせることが出来なくなる。圭一は内心で葛藤する。が、それでも請われるままにボールの握り方から丁寧に教え始める。

「ボールは、中指・人差し指と、親指で挟む形で握るんだ。投げるときは大きく腕を振る」

圭一は、穂の背中から彼女の両手首を持ち、腕を動かした。圭一の手が触れた瞬間、穂の身体が一瞬緊張するのを圭一は感じた。それに構わず、圭一は続ける。

「ボールを指先から話す瞬間に、手首をすばやくスナップさせる。指先で弾く感覚を意識して投げるといい。全身を使わないと、飛距離も制球力もつかない」

「こうですか？」穂は言われるままにフォームを作っている。三球ほど投げると、たちまち綺麗なフォームに生まれ変わっていた。

三十分ばかりの指導が終わる頃にはコントロールも付き、二十メートル以上の間隔があいても、難なくキャッチボールが出来るようになった。いつもながら、呆れるほどに飲み込みが早かった。

「私、野球をやりたいな……」額の汗を吹きながら、穂が呟く。慣れない運動に緊張したせいか、やや息があげり、頬が上気している。

「大学野球か？ 確か、どこかの大学にアメリカの女子選手が留学してたなんて事があったが、結局途中で退部して

「大学じゃありません。それだと、今になって陸上を辞める理由にならない」

穂が野球をやるのは自由だが、それは大学に入ってからでも出来ることだ。今年のインターハイをあきらめる理由にはならない。彼女なりに、今後をどうするか悩んでいたのだろう。しかし、圭一にとって「野球がやりたいからインターハイ出場を取りやめる」という選択は、全く思考外の突拍子もない話だった。

「野球を今からやって、なにをしよう？」

「プロ野球です！ 確か、プロは男女差別なく入団できるって聞きました」

あまりにも唐突な話に、圭一は面食らった。思わずせき込む。なんの冗談なのか、と穂をみつめるが、彼女は真剣

な顔つきで圭一の言葉を待っている。

仕方なく、なるべく穂を傷つけないように言葉を選んで話し出す。

「確かに、かつて、ブルーウイングスで女子選手が入団テストを受験したって話は聞いたことがあるが」

神戸ブルーウイングス。名前通り神戸に本拠地を置くパブリックリーグ所属の球団で、強豪チームに位置づけられる。長年指揮を執る大森監督は名将として知られている。

「それです。私、神戸のテストに挑戦します！ 一応地元だし、ちようどいい……」

「本気か？」圭一は穂の眼を見つめた。夢見るような、それでいて真剣な眼差しがまっすぐに返ってくる。

「もちろんです。それで……、指導をお願い出来ますか。野球なら、教えてもらえるって」

「うーん。だけど、ビジネスとしての依頼なら、お金がいるぞ。こんな事は言いたくないけど、商売だからね」

しばらく黙っていた穂が、いつもの上目遣いで聞く。「出世払い……ってのは、駄目ですか？」

その子供じみた仕草に、思わず圭一は口元を緩ませた。

その晩。結論を保留した圭一は自室に戻り、穂と交わした会話を反芻していた。プロ野球選手になりたい、との穂の言葉に対して圭一は、何故とは訊ねなかった。穂もまた、陸上選手としては閉ざされてしまった将来図を、なんとかもう一度と描く為に、思い悩んでいる。その事がよく判っていたからだ。

「もしかしたら、俺の為なのかもしれないな」

圭一は、押入の奥に突っ込んであった段ボール箱から、かつて愛用していたピッチャー用のグラブを取り出してきた。高校時代、肘を痛めて野球生命が断たれた際、一度は捨ててしまおうと思ったグラブだった。しかし、結局捨てることが出来ないまま、こうして持っていた代物だ。

あるいは穂は、野球が出来なくなっただけの替わりに、野球をしたいと言いだしたのかも知れない。圭一が歩んだかも知れない道を、自分が替わって歩く為に。突き放した表現をするならば、自分自身の夢が持てなくなっただけ、他人の夢を自分のものとすり替えて、それを代わりに果たそうとしている、という事かも知れない。

無理、無茶、無謀。ありとあらゆる否定的な思いが圭一の脳裏を駆け抜ける。しかし、だ。圭一は呟き、手にした

クラブに視線を落とす。

穂はただの女子陸上選手の範疇に収まる存在ではない。そのバッティングセンスや投球の飲み込みの早さを思い返す。このまま埋もれさせるにはあまりにも惜しい逸材、天才的な運動神経の塊であることは、今も全く変わらないのだ。

「彼女がやりたいって言うなら、つき合ってやるしかないじゃないか」

圭一が自らに言い聞かせる。結果として、成功しようと失敗しようと、最後までやり通させる。……腹は座った。

明日にも連絡を入れて、野球選手としての特訓を始めよう。やるからには、一日も無駄には出来ない。プロ野球の入団テストがある秋まで、時間はあまりにも限られている。

圭一が決意を確かめるように左手にクラブをはめ、ぽんと右拳を叩き込んだ。

第四章

翌朝。圭一は瀬川接骨院に顔を出すなり、挨拶もそこそこに瀬川に対して、穂がプロ野球選手に挑戦したがっているという話を伝えた。半ば予想していたことだが、瀬川は良い顔をしなかった。

「無茶を言うな。制度上可能かどうか以前の問題だ」

彼にしてみれば、かつて自分が属していた世界を汚されたように感じたとしても不思議はない。プロ野球はそんなに甘い場所ではないのだ。だが、こればかりは圭一も引き下がるわけにはいかなかった。

「無茶は承知しています。ですがこれは、彼女自身の意志です。たとえ成功の確率が万に一つも無かったとしても、私には最後まで見届ける義務があります」

「お前、野球のコーチにでもなったつもりか？ 本分を忘れるなよ」

「身分不相応だって事は判っています」

「……そうか。ただし、これは接骨院としての仕事ではない。圭一、お前が勝手にやることだ。俺は一切口は挟まないし、助力もしない。こちらの仕事はきちんとやっってもらうぞ」

「判りました、ありがとうございます！」

渋い顔の瀬川とは対照的に、圭一は弾むような大声を出して深々と頭を下げた。

「球の速さに目を慣らすんだ。球を打つだけが練習じゃないぞ」

コイン四枚分、百球以上をぶつ通しで打ち返し続け、さすがに息も荒くゲージ後方のベンチに座り込んだ穂に、圭一が声をかけ、タオルとスポーツ飲料を手渡す。

「はい、判りました」

息を弾ませながら立ち上がった穂は、百四十キロの速球を放つマシンのゲージの真後ろまで行き、金網の間に近寄って立つ。マシンの球相手にまるで歯が立たないでいる客のスイングが目当てではない。百四十キロの球が描く軌道を脳に覚え込ませる為だ。

百四十キロの球、それは日常生活の中で目にする物理法則上の「常識」を覆す。鋭い回転を与えられ、十分な初速で放たれたボールは単純な放物線ではなく、浮き上がる軌跡を描いて飛ぶ。その事を知識としてではなく、常識として身につけておかねば瞬時の判断は不可能である。穂は圭一の指示通り、百四十キロのボールに目を凝らし続けている。

プロ野球入団テスト挑戦を明確な目標として、まず手始めにバッティングセンターに通い詰めて既に二週間が経っていた。穂のスイングはかなり板に付いたものとなり、基本的なアドバイスは全く不要になっていた。

バットの先端をほぼ垂直に立てて、グリップエンドが右類に触れるような独特なフォームは、圭一直伝だ。圭一自身の高校時代のフォームをベースとして、小柄な穂が可能な限り速球に打ち負けずに打球を鋭く弾き返せるよう、試行錯誤の末に今の形に固まった。

だが、いくら素振りで形が決まっても、打席に入つてボールを実際に打つ段になって崩れてしまうのでは意味がない。実戦でも自然と形通りにバットを振れるようになる為には、とにかくみっちりボールを打ち込むより方法が無かった。

穂の掌、特に左手の小指と薬指の付け根にはさつそく水膨れが何度か出来て、水を抜いた跡が角質化しては皮が剥けていた。

いわゆるマメの出来る位置としては問題は無いが、柔らかかった穂の掌で次第にマメが固くなっていく様をみるのは、圭一としてはやはり、心のどこかで抵抗を感じていた。

「これで良かったのか……」

圭一が小さな声を漏らして自問する。本当に穂を野球選手として鍛え上げる事が、ベストな選択なのか。その思いは拭いきれない。

穂自身がそれを望んだのは確かに事実である。しかし、あまりにも無謀で不合理な選択だ。トップアスリートの道を放棄して普通の女子高生に戻ったとしても、あらぬ詮索を受けるとは限らなかったのではないか。

「何か言いましたか？」

ボールの発射音や打球音、機械自体が放つ駆動音などで、バッティングセンターはなかなか騒々しい。穂は指示を聞き損ねたと思ってか、困り顔で圭一の方を振り返っていた。

「なんでもない。気にせず、球筋に集中しろ」

「はい、先生」再び穂が視線を戻す。

（余計なことをここで考えても仕方がない。ともかく、俺に出来る限りの事はしてやらなければなるまい）

圭一は迷いを吹っ切るように頭を振った。自分は一度、穂に真実を告げる勇氣を持てずに逃げ出した。今度は困難から逃げずに、まっすぐ歩き続ける意思を持った彼女の支えにならねば、一生自責の念に囚われるだろう。悔いは残したくない。

とはいえ、野球人生最後となったあのマウンドで、圭一は真つ向勝負をして、敗れていた。その点に関して、本当に後悔していないか、彼自身にもよく判らない面があった。

サヨナラ負けにうなだれる仲間の姿を思い返す度、果たして逃げずに立ち向かうだけが人生なのか、圭一は今も納得できる答えを持てずにいる。しかし少なくとも、今回だけは逃げたくなかった。

となれば、今の自分に何が出来るだろうか。そろそろ、バッティングセンターでの練習には限界が来ているようにも思われる。いくらマシンの球離れの瞬間を覚えたところで、人間の投手相手に呼吸やタイミングを身体に染みこませなければ無意味なのだ。

圭一は軽く自分の右肩を左手で押さえた。時折痛みが走る他は、日常生活を過ごす限りは支障無く動かせる。「元甲子園地区予選決勝進出チームの右腕」という肩書きを引っぱり出して来るには、いささか使い古しの腕だが、バッティング投手としてなら多少は投げられるだろう。

それほど速い球はまだ必要ないのだ。それに、あまり多

くの人間を巻き込みたくはない。

穂は己の身を傷つける事もいとわず練習に励んでいる。

自分だけが口先だけの指導を続けることなど出来ない。

(となれば、あいつにも手伝って貰わざるを得ないな)

遠くを見る目つきになった圭一が、わずかに頬を緩ませた。彼にとって、自分の球を安心して捕らせる事が出来るキャッチャーは一人しかいなかった。

盆休みをまもなく迎えようかとしているある日曜日。綺麗な夕焼けに赤く色づけられた野球グラウンドに、成田が顔を出した。そこは、星ヶ丘学園高校野球部の専用グラウンドだった。野球部の練習は行われていないので、部員の姿はない。

「こんな所に呼び出して、どういうつもりや?」

成田が一塁側ダグアウトのベンチに腰を据えていた圭一に問う。圭一は、スポーツウエアを着込んでいた。

「準備はして来ているだろうな?」

「ああ。言われたとおり、ミットを持ってきてある」

成田は、紙袋に放り込んであったキャッチャーミットを取り出した。高校時代、彼が愛用していたものだ。今では草野球程度でしか活躍の機会がないが、手入れは怠っていない様子だった。

「よし。プロテクターや面は、ここにあるのを使わせて貰う。羽島にも許可は取ってある」

「今更、かつてのバッテリーの再現したかてしゃあない。何を始める気なんや?」

「あれえ、成田さんじゃないですか。どうしたんです?」

後ろから声が掛けられた。成田が振り返ると、穂が立っていた。野球の練習用ユニフォームに身を包み、ヘルメットをかぶり、手には木製バットが握られている。

「なんでここに穂ちゃんが?」

「あ、もしかして先生の言ってた助っ人って、成田さんの事ですか?」

ひどく残念そうに穂が聞く。

「言ってなかったか?」悪戯を見つけた子供のような口調で圭一が言った。「成田は、高校時代の俺の相棒だ。バッティングはともかく、強肩には定評があった」

「俺の事はどうでもええ。なんや、いったい」訳が判らない成田が無然としていた。

「そろそろ穂に生きた球を見せてやりたいと思ってな。こ

のさび付いた腕を振るうことにした。さあ、ウォーミングアップを始めるぞ」

「ちよおっと待ったね。お前、穂ちゃんにいったい何を教えてとるんや？」

「新体操でも教えているように見えるか？ 野球以外の何だっけ言うんだ」

「そんなことは聞いとらんわい」成田が鼻を鳴らす。「なんでそんな事をするんや、つちゅうとんねん。気晴らしのつもりかいな？」

成田は圭一の首にぐいと腕を回し、圭一の耳に吹き込むように小声で聞く。

「ゴタクはあとだ。とにかく肩を暖めないと始まらない」

圭一は成田の腕をふりほどいた。文句をたれながらも、成田は圭一とキャッチボールを始めた。その間、穂は素振りをしてフォームを確かめている。

「よし、こんなもんか。穂、打席に入れ」

「はあい」ヘルメットのサイズが大きすぎ、ずれを気にしながら穂が右打席で構える。

「思い切り打っていいぞ」

「はい！」

圭一が大きく振りかぶり、硬球を成田のグラブ目がけて投げ込んだ。穂がバットを振る。が、かすりもない。球速は百二十キロ出ているかどうか怪しいくらいだが、マウンド上から投げおろしてくる感覚は穂にとって初めてのものだ。穂はバットの勢いにつられるように一回転しながら打席の外に出てしまう。

「薄暗くて見にくいかも知れないが、しっかりボールの軌道を見ろ」

「判りました」

穂と圭一のやりとりを、成田は啞然として眺めていた。

「なあ、もういっぺん聞けど。こんなことして、なんになるねん？」

「穂をプロ野球選手にする」当然といった顔つきで圭一が言い切る。

「寝言は寝てから言ってくれよ？ 本気で言っとなるんかいな？」

成田が大声で聞き返した。ほとんど怒鳴り声に近い。

「冗談でこんな話が出るか！」圭一も声を荒げた。「いいか？ 素人の穂を、神戸の入団テストまでに、野球選手として使いものになるように指導してやらなきゃならん。徹

底的に鍛え込むつもりだ。だが、その為には成田の協力が
必要だ。頼む、手を貸してくれ」

しばしの沈黙。どこかで鴉のものらしき鳴き声が聞こえ
てくる。

グラウンド上に伸びた長い影。その一つ、穂の影が動い
た。

「成田さん……」ヘルメットを脱いで穂が頭を下げる。「お
願います。協力して下さい」

「せやけどな……」真剣な穂の態度に、成田はあきらかに
戸惑っている。ふざけている訳では無いことは、目を見れ
ばすぐに判るはずだと圭一は信じている。が、それだけに
どう対応して良いのか、見当がつかないのだろう。

「プロ野球の入団は、男女の差無く、実力次第なんです。
私が女子スポーツの枠の中にいられない以上、こうするの
が一番なんです」

言葉を繋いだ穂の眼を見据えたまま、成田はしばらく黙
り込んだ。

「どうも、ピンと来えへんな。穂ちゃんが野球をやる事の、
どこに必然性がある？」

「それは、私が野球をやりたいと思っっているからです。そ
他の理由なんて、……理由なんて、ありません」

最後は声が小さくなってしまったが、穂の意志は明快
だった。

「もう一つ聞かせてくれ。俺には、なんかメリットがある
んか？」

ぼつりと成田が漏らしたのを、圭一は聞き逃さなかった。
「出世払いだそうだ。まあ、合格したら、体験記でも書け
ばいい」

圭一は笑顔だった。照れ笑いではない。

成田はなおも考え込む顔つきになった。ややあって、ぼ
つりと漏らす。

「ベストセラー間違い無しやるな。あれこれ口裏をあわせ
にやららんやろうけど」

「そういうことだ」

「……よっしゃ、判った！ほんなら、みつちりしごいた
やる。覚悟しときや、穂ちゃん」

成田は右拳をミットに打ち込んでから、高校時代と変わ
らぬ構えで腰を据えた。

その日を機会に、一挙にハードな練習スケジュールが組
まれた。陸上をやるために生まれてきたような穂の身体を、

数ヶ月で野球選手のそれに作り替えなければならぬ。
一週間ほど、圭一相手のバッティング練習は続いた。

日曜日の早朝。星ヶ丘学園高校野球部専用グラウンド。太陽は地平線から昇って間もなく、日中の日差しを感じさせる強い光を地上に降り注がせている。良い天気になりそうな気配だった。早くも夜明け前まで保たれていた清涼な空気は温み始めている。その熱を孕んだ空気を切り裂き、強烈な打球が三塁線上を飛ぶ。

「完璧やな！」

成田が圭一に聞かせるような大声を出す。打席上の穂が成田のほうを振り向いて、少し困ったような笑い顔を見せた。きちんと頭のサイズにあわせたヘルメットを使っているのだが、そのずれを直すような仕草をみせるのは、照れ隠しらしかった。

「全くだ。俺の球ではもはや通用しない」

圭一が、悔しげな言葉とは裏腹にさばさばした表情で成田の言葉に応じる。それを聞いて、穂がようやく安心したように笑顔を弾けさせる。

「せやけど、そうなると、これからどないするねん？」

「ああ。どのみち、打撃練習だけじゃどうにもならない。それは判っているんだが……」

成田の問いに、圭一も即答しかねて言葉尻を濁す。
「なにを水くさい事言ってる」

ふいに、一塁側ダグアウトのほうから聞き覚えのある声が掛けられた。圭一が顔を向けると、羽島が、ダグアウトの脇に立って厳しい顔をみせているのが視界に入った。

「羽島、お前……。聞いていたのか？」

「聞くも何も、大声で言い合っていたじゃないか」

羽島がそう言いながら、マウンドに向かって歩いてくる。表情は相変わらず固い。

「空いている時にグラウンドを使わせてくれなんて、妙な話だと思ったが。この娘に野球教えてどうするつもりだ？」
冷めた目つきで、三人を等分に眺め回しながら羽島が尋ねる。

「プロ野球の入団テストに挑戦させる」

圭一が、気負いもてらいもなく、はっきりとした口調で答えた。

羽島を巻き込むのは本意ではなかったが、知られてしまった以上、下手な隠し事もするつもりは無くなっていた。

圭一はマウンドを降り、バッターボックスのほうに向かって歩く。羽島もそれを見て成田と穂のほうへと無言で歩み寄ってきた。

「私が頼んだんです」圭一が非難されていると感じたのか、穂が羽島に向かって思い詰めた声をあげた。「私は、どうしてもプロ野球選手になりたいんです」

「いいね、実にいい」穂の言葉に足を止めた羽島が目をわずかに細め、何度も頷く。

「いいって、何がや？」

腰を浮かせた成田が怪訝そうに尋ねる。羽島は、もう一度大きく頷き、言葉を発した。

「ウチの部にもそれなりにうまい奴はいるが、プロ選手になりたい、なってやるって願望を剥き出しにするの一人も居ない。若いうちは、無謀でもなんでも、目のくらむような高い目標を持つのは決して悪い事じゃない」

それは、高校時代と変わらぬ羽島らしい台詞だった。一見するとクールな面立ちと、感情を表に見せない言動。しかしその内面には、誰よりも烈しい闘志が満ちている。

そのことを悟った圭一は、彼の協力を仰ぐ腹を固めた。「手伝ってくれないか、羽島。観ての通り、打撃はそれなのところまで来た。促成栽培には上出来だ。しかし、これ以上の練習は俺と成田だけじゃどうにもならん」

「女子が男子に混じってプレーすることは大変困難な事だ。しかもプロを挑戦するとなると、成功の確率は奇蹟に近いだろう」羽島が、遠くを見るような目つきで淡々と分析する。

「そいつは判つとる。せやけど、穂ちゃんはどうしても挑戦してみたいて言うてるねや。お前もそれがええ事やて言うたやないけ！」

成田が声を荒げる。が、羽島は静かに首を振ってから、眼光鋭く成田を見据える。

「慌てるな、成田」その声音は、野球部主将として部員に注意を与えていた当時そのままだった。「道は果てしなく険しいだろうが、可能性は皆無じゃない。彼女の練習を見た。素質もセンスもある。熱意もあるだろう。となれば必要とされるのは経験だけだ。時間はないが、工夫は出来る。その為の手助けが必要なら、協力しよう」

「ありがたい。助かる」圭一がほっとした表情を見せて肩の力を抜く。だが、その反面、羽島の表情は必ずしも明るくない。

「だが、さすがにこの場所でウチの部と一緒に練習させるわけにはいかない。もし仮に問題になったら、事は野球部に関わってくる」

羽島の言葉に、圭一と成田が揃って浮かぬ表情をみせて顔を見合わせる。野球部監督の立場としてはごく当然の判断だけに、文句を言うわけにも行かない。

「勘違いするな。だから手を貸さないと云ってる訳じゃない」

羽島が二人の様子を見て苦笑いする。冷笑にも見える顔だった。

「個人的に協力すると言われてもな。お前一人やつたらたいては役にも立たんで」

成田が口をとがらせる。このあたりは猪突派の成田と慎重派の羽島、その性格の違いが如実に現れている。

「判っている。来週の日曜日から八日間、我が部は恒例の夏合宿に行くことになっている。そこでなら一緒に練習したところで、いくらでも言い抜けられる」

「なるほど。良い考えだ」

圭一が今度こそ相好を崩した。羽島の鍛え上げた部員たちの力量は、圭一も推し量ることが出来る。練習相手として全く不足はない。

「で、どこで合宿を？」

成田の問いに、羽島は圭一のほうを見ながら、珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべ、ある地名を口にした。途端に、つつ、と圭一が声を詰まらせた。成田が鼻を鳴らす。

「どうか、したんですか？」穂が三人を見比べて首を傾げる。

「こいつら二人の出身地や」

成田の説明に、穂が目丸くして圭一の顔を伺う。

「確かに夏の暑さは多少は凌げるが、あんなところで合宿するか、普通？」

圭一の言葉の後半が、羽島に向けられる。

「あんなところとは随分な言葉だな。俺たちの母校でやる合宿だぞ」

今度は成田も圭一同様、押し潰した声をあげて絶句する。「中学校のグラウンドでやるんかいな？」

圭一が運転するRVが高速道路を降り、山がちの地形を縫って北上していく。

一体どんな山奥に連れて行かれるのか、と助手席の穂は

不安げな表情を見せていた。が、合宿の場所となる中学校のある付近は、川の本流と支流に挟まれた平野で、区画整理された水田が大きく広がっていた。四方を囲む山々が遠くにかすんで見える。

「見晴らしのいいところですね。……平地がずつつと広がっていて、なんだか、凄い」

やや高台にある中学校のグラウンドから、眼下に広がる景色を見ながら、穂が眩く。稲が青々とした葉を光らせる水田は、望見すると草原のようにも見える。

「ま、見慣れるとどうという事はないが」圭一は苦笑し、改めて周囲を見回す。

彼が在学していたときは、周囲の風景はかなり異なっていた。校舎はかつてグラウンドがあった場所に新築され、逆に旧校舎跡地が新たなグラウンドになっていたのだ。

感傷的になってもおかしく無かったが、圭一は却って郷愁にひたることなく練習に専念できそうな気がした。

圭一達より先に到着していた星ヶ丘学園高校野球部の部員たちはすでに、グラウンドで練習前のウォーミングアップを進めていた。その中には当然羽島の姿もある。

「やっと来たか。みっちり鍛えてやるから安心しろ」

羽島の言葉にも、圭一はいまひとつ笑顔になれない。

「ところで、野球部とか他の部活とかはどうしたんだ？練習の邪魔になるだろうに」

「野球部は無くなった。野球部だけじゃない。部員の不祥事と教師のスキャンダルが立て続けに出て、体育会系は軒並み壊滅状態だ」羽島は悔しそうに言葉を吐く。「少なくとも、合宿に支障のあるクラブはこの中学校には存在しない」

「そうか。寂しい話だな。せつかく校舎もグラウンドも新しくなったってのに……。それにしても、本気でここでやるんだな。合宿ってのは普通涼しいところでもんだ。ここじゃ大阪にいる時とたいして変わらない」

「それでもないですよ。この風、結構気持ちいい……」

横で聞いていた穂が言葉を挟む。羽島が小さく頷く。

「暑いかな涼しいかは、あまり重要な問題ではない。要は、日頃の生活から切り離された上で、集中して野球に取り組めるかどうかだ。……まあ、お前も技術指導じゃなく、チーム指導に携わるようになれば判ることだ」

そう言われてしまえば、チームを率いて勝利のために方策を練らねばならない羽島を前にして、ただ穂に野球を教え込む為だけに同行している圭一には返す言葉が無かった。

初日の練習は、身体を鈍らせない程度の軽いもので、まだ陽も高いうちに切り上げられていた。泊まる為の準備もせねばならないからである。合宿場所である中学校の校舎が、そのまま野球部の宿泊所になる。ただし穂は三人いる野球部の女子マネージャーたちと同じく、羽島の手配した旅館に泊まることになっていた。

「先生はどうするんですか？」

校門前。羽島が自分の家まで行って運転してきたというシヨートワゴンにマネージャー達と乗り込む間際、見送る圭一に穂が問う。

「ま、ここで泊まるってのはさすがにな……。家に帰るつもりだ」

「ご実家のほう、近いんですよね？」さぐるような目つきの穂。

「まあな。羽島も俺の家も專業農家で、補助金だのなんだので結構のんきにやってるよ」

「俺のほうは部員と一緒に学校で寝泊まりするんだがな」
運転席の羽島が、穂をせかすように口を挟んでくる。

「そりゃ監督として当然の義務だろ」圭一は取り合わない。

「……いいですね、農業って。自然と一緒に」

都会っ子の穂はそう言い残して、羽島の車に乗った。

「なにが良いいものか」農家の実状を知っている圭一は、億劫そうに独り言を呟いた。

圭一は中学校から歩いて十五分の距離にある、彼の実家に久々に足を踏み入れていた。下宿して体育大学に通うようになった頃からなんとなく足が遠のき、社会人として生活する今では正月に帰郷することもまれだった。

周囲が田畑に囲まれている風景は十年前とあまり変わっていないかった。

前もって、帰る旨は伝えてあった。時期的にも盆休みに近い。なにも臆する必要は無かったのだが、妙に緊張していた。

こういうときは呼び鈴を押すものなんだろうか、それとも勝手に開けて上がり込んで構わないのだろうか。そんな事を考えながら玄関に通じる庭先の飛び石を踏んでいくと、母親が洗濯物を縁側の前の物干し竿から取り込んでいくところだった。

「……圭一」驚いた様子で手を止める。ずいぶんと歳をとっ

て、という思いはおそらくお互い様だった。

その後、農作業から戻ってきた父親と、さっそくビールを酌み交わす事となった。

圭一の稼ぎではなかなか口にする事の叶わない牛肉を大量に用意し、夕食の準備を進める母親の姿に、圭一は心中で親不孝を恥じた。その反面、しつこく自分の跡を継いで農家になれと進めてくる父親の相変わらずの強引さには閉口するのだった。

「こんばんわ、菱谷先生いらっしゃいますか？」

聞き慣れた穂の声が玄関口から聞こえて、特別な事が無い限り日頃は飲まないビールのジョッキを傾けていた圭一はむせた。応対に出ようとすると母親を制し、玄関の扉を開ける。

「どうした、穂？」

「羽島監督にご実家の場所を聞いて来ちゃいました。すぐくおっきな門だから、ホントに先生の家なのかなって、ちよつとドキドキしました」

穂が屈託無く笑う。その笑顔を見た圭一は、何故来たのか、との問いが全く意味を成さない事を悟った。来たかったから来た、それ以外の答えが返ってくるとは思えなかった。

「なんじゃ。久しぶりに帰ってきたと思ったら、嫁さん連れてきたんか」

日灼けと酒灼けの入り交じった一次産業従事者特有の赤ら顔を後ろから覗かせて、圭一の父親が大口を開けて笑う。

「馬鹿親父が！なんて事抜かしやがるんや。この子はなあ、俺の大事な教え子なんやぞ」

圭一が穂の手前、きまりが悪くなって意識的に品のない関西弁で怒鳴り返す。

「先生のお父様ですか？ 水沢穂と申します。菱谷先生にはいつもお世話になってます」

一方の穂は、殊更に丁寧な物腰でぺこりと頭を下げた。

結局、穂も圭一家と共に夕食を一緒に食べる事となった。どうやら穂は今が夕食どきだという事を全く失念していた様子で、しきりに恐縮していた。が、上質の牛肉が惜しげもなく鍋に放り込まれていくのを見ると、目を見張った。

「凄いですね」

「これが農家の実力やで、穂ちゃん」
上機嫌な父親が、ガハガハと笑う。あまり見せたくないものを見られてしまったと、圭一は頭を抱えるばかりだった。

勝手に押し掛けてきた以上は、と甲斐甲斐しく圭一の母親の手伝いをして、ビールなどを取りに台所に向かう穂の後ろ姿をみながら、俺は彼女になにをしてやれるのだろうか、と圭一は考える。幾度と無く繰り返した問い。答えは見つからない。

と、やおら父親が立ち上がり、圭一の真横に腰を据えて顔を近づけてくる。

「羽島の息子、結婚してたってな。俺も知らなかった」

さっき、穂が漏らした話である。羽島に送られて旅館に向かう途中に聞いたらしい。

だが、父親の言葉には単なる驚きだけではなく、羨望めいたものが混じっていることに、圭一は露骨に嫌そうな顔をする。話の筋がみえてしまったからだ。

「なあ、圭一よ。そんなに農家が嫌なら、もう、農業を継げとは言わん。だが、せめて俺等は孫の顔が見たい」

そら来た、と圭一が反駁しようと口を開きかけた時、派手な音が廊下から聞こえた。圭一が腰を浮かせ様子を伺うと、穂がビールごと盆をひっくり返しておろおろしていた。

「ぐ、ぐめんなぞい……。ビールの瓶が、割れちゃって。びっしょり……」

狼狽して、破片を拾おうとする穂を圭一が慌てて制する。

こんなことで万一怪我でもしたら目もあてられない。

「いいから！ 下手にさわるんじゃない！」

母親が雑巾やら箒やらをまとめて持って駆けつけてくるのを視界に収め、圭一は穂を居間に入るよう促す。

さっきの親父の話、聞こえてたのかも知れないな。圭一は苦い顔つきになってそう考える。穂は、自分の両親に孫の顔をみせることは絶対に出来ないのだ。

翌日から本格的な練習が始まった。連携守備や試合感覚は、いくらマンツーマンで指導しても、さらに時折成田を加えたとしても、とても身に付くものではない。練習相手が必要だった。連日、野球部員に混じって穂はハードな特訓をこなしつつづけていた。その甲斐あって、合宿が終わりを迎える頃には、二年のレギュラー級部員レベルの動きを見せるようになっていた。

「驚きだな。ここまで伸びるとは」

一塁側ダグアウト。ノックの嵐に立ち向かう穂の守備を見ながら、羽島が溜め息に近い声で感想を述べる。グラウンド中で、野球部ならではの意味不明の蛮声があがり、活気のほどが伺える。

「こうやって、練習に混ぜてもらっているお陰だ。感謝してもしきれない」

羽島の隣りで、練習の様子を見ている圭一が応じる。確かな手応えというべきものを、ここに来て初めて感じ始めている。

「いや。彼女のお陰で、他の部員も張り切っている。女の子には簡単に負けていられないし、いい格好も見せたいだろうからな。秋季大会が楽しみだ。それに、東の一件以来、お前の信頼感は抜群だ。万一怪我したとしても、圭一が居れば安心だと、全力を出せる」

「ありがたい評価だ。恩は売っておくものだ」

圭一の軽口に、羽島も薄く笑った。二人して、穂の動きに再び目をやる。今、穂が野球部員と混じって練習しているのは、遊撃手のポジションだった。

それは圭一が、穂のポジションを内野、出来れば遊撃手に、と考えていたからだ。槍投げの一件で見せた通り、穂は地肩も強かった。遠投は風向き次第で百メートル台に乗せる。

無論、俊足を活かした守備範囲の広さを買って外野手に、というプランも無くもないが、入団テストを受ける予定である神戸ブルーウィングスの外野陣は、プロ十二球団でも屈指の層の厚さを誇っている。よほどの事がなければアピール出来ない。

また同時に、遊撃手は羽島の学生時代のポジションでもある。圭一の教えきれない細かなテクニクを伝授してもらえるのでは、という打算が圭一の中にはある。

その反面、残念ながら、バッティングセンスは守備・走塁の華麗さに比べると、いまいち物足りない。上半身を大きく捻り、反動で破壊力を最大限に引き出しながらも確実にミートする打法にはセンスを感じたが、さすがに長打力の天分までは与えられていなかったものとみえた。

が、ここで百メートル十一秒台の俊足が大きな武器となる。ただの内野ゴロをヒットに出来る。俊足を活かす為、セーフティバントや盗塁の練習も積極的に取り入れている。「今の段階でも、ウチの一番・ショートでスタメン出場出

来る。はじめに話を聞いた時は、率直に言って無謀な真似をすると思っただが、こうなってみると、さすがに圭一は卓見だ。ちゃんと才能を見抜いている」

「俺は彼女のわがままにつき合っただけだよ。ここまでやれるとは、俺も正直なところ思っただけだった」

羽島には、穂が陸上を辞めた本当の理由を今も教えていない。言葉を選んで話す事になる。信用していない訳ではない。だが、羽島は多くの部員を抱える野球部の監督だ。話をする機会は、カメラマンの成田よりはずっと多い。それだけ、口を滑らせる可能性も高くなるのだ。

（知ってしまったえば、それだけ立場が難しくなる。許せよ、羽島）

「なあ、二学期が始まったらどうする？」羽島が問うた。

「出来るなら今のうちに練習に混ぜてもらいたいけど、無理そうなんだよな？」

「ああ。俺もそうしたいが、前にも言ったように難しい。

彼女は、今ではチームのマスコットだから、連中もそのほうが喜ぶんだが」

羽島と圭一は、すでに何度か今後の件で話し合っていた。だが、なかなか結論は出そうにもなかった。

その間にも、穂目がけて残像が目に焼き付くような強烈な打球が浴びせられる。ノックカーをつとめるのは、合宿の様子を伺いに来た東だった。彼も最初穂の姿を見たときには驚いていたが、事情はすぐに飲み込んでいた。

OBとはいえ、先日までチーム一の豪打を誇っていたスラッガーである。グラウンド内での顔ぶれの中で、最も速い打球を打てる。一メートル五十センチほどの高さを保ったままの、地面と水平のライナーが、三遊間を真つ二つに割るような位置に飛ぶ。

穂がグラウンドを蹴って、伸び上がるように真横に跳ねた。伸ばしたクラブから、乾いた音が響いた。

夏合宿は充実した内容に終わった。だが、その後はこれ以上星ヶ丘学園の野球部と共に練習することが難しくなるのも事実だった。かといって、あまり多くの人間に穂の事を知られたくない、それが圭一の本音だった。痛くもない腹を探られるのは本意ではない。

帰阪後、困っているところに手をさしのべてきたのは、夏合宿を観に来て事情を察していた東だった。

「引退した同期の連中や先輩たちと、草野球チーム作って

遊んでるだけなんですけどね。そこで一緒に野球やるだけでも、ずいぶんと勘を養えるんじゃないかと思えますけど」「驚く圭一に対して、東はそう説明して照れくさそうに笑う。

確かに、実戦経験を積み、試合感を身につけることに主眼をおくならば、全体としてのレベルは草野球並であつても構わない。圭一は東の申し出を快く受けることにした。だが、一つ疑問が頭をよぎつていた。

「聞いても良いか？ どうして協力してくれる気になつた？ はっきり言つて君たちには、あんまり得にならない話だぞ」

「それでもないですよ。チームに可愛い女の子が一人いるだけで、ずいぶん雰囲気違いますし」冗談めかして東が言った。だが、圭一は納得しない。

それに気づいた東も、表情を引き締めた。

「理由はいくつかあります。俺たちはみんな、一度はプロに憧れた奴ばっかりです。で、誰一人としてその夢を叶えられなかったから、群れてるんですわ。応援してあげたいんですよ、彼女のこと。……それに」

東はしばし言いよんだ。口にするのが気恥ずかしくなるような内容らしかつたが、意を決したかのように口を開く。

「俺は、圭一コーチに恩があります。練習試合で捻挫したとき、コーチに治療して貰えんかったら、完治しないまま地区大会に臨むことになつとつたはずです。結局、甲子園には行けませんでしたが、少なくともベストの状態で戦えた事には満足していますんで」

少なくとも夏休みの間は協力できる。そう言つ東に、圭一は心から感謝した。また、自分のやってきたことが間違いで無かつたと、心が弾んだ。それと同時に、恩は売つておくものだ、などと羽島に軽口を叩いたことが恥ずかしくなつたのも事実だが。

夏休みが終わり、二学期が始まつて間もなくの事。インターハイを欠場したこともあつて、関係者が騒ぎ出している事を圭一は知つた。

長尾監督はそれまで、故障と体調不良を理由に追求をこまかしていた様子だったが、二学期に入つても陸上部に顔を出さないことで、あるスポーツ雑誌の記者が不審を抱き、徹底した調査を開始しはじめた節があつた。これ以上隠し

通せない、と長尾が泣きついてきたのを機会に、圭一は合同の記者会見を行うことにした。説明は一度きりにしたいとの考えからだった。

当日は、芸能人相手のそれとはまるで比べものにはならないが、高校生の陸上短距離選手の記者会見だと考えれば、信じられないほどの数が集まった。それだけ、穂の記録が注目されていたという事だろう。

圭一はそれなりに段取りを胸に秘めていたのだが、穂が開口一番、「陸上を辞めて、プロ野球に挑戦します」と宣言してからというもの、たちまち大騒ぎになってしまった。

圭一は穂の身体能力の数値を示し、彼女の挑戦が全くの実現不可能ではないと力説しなければならなかった。だが、その説明の用意周到ぶりが却って反感をかつたらしかった。女性をプロ野球選手にするという圭一自身の酔狂な野心の為に、穂をそそのかしたのだと、長年陸上に携わっていた記者に罵倒される羽目になった。

彼らにしてみれば、圭一の姿は、怪しげな理屈をかざす、胡散臭いコーチにしか見えなかったに違いない。理論や理屈など、何もあつたものではなかった。怒号が飛び交う様は、とてもそれが現実の光景で、自分がその当事者なのだと信じられなかった。

が、彼らがいくら騒ぎ立てようとも実質的な影響力はない。穂が、全て自分のわがままから出た話だ、と言い切る以上、それを認めざるを得ないのである。

その日の晩、出浦から圭一の携帯に電話がかかって来た。彼女は記者会見に顔を出していなかった。他に取材があつたかららしい。

『どうして、こんな大事な話を教えてくれなかったの？』

出浦の高い声が、携帯電話の受話器を通して圭一の耳を突いた。平静さを装ってはいるが、内心の動揺　むしろ怒りに近いものを押さえかねた、上擦った口調だった。

「吹聴したい話じゃなかった。なにしろ、うまくいくか断言出来る訳じゃないから」

『そう。残念だわ。私に前もって教えてくれたら、こんな大騒ぎにならずに、うまくマスコミを味方に付ける形で盛り上げることが出来たのに』

出浦にそう言い切られると、圭一もいきなりの記者会見というやり口は早まったかな、という気がしてくる。

「それもそうか……」

『……ま、済んでしまったことは仕方ないわ。でも、本当

のところはまだ話してないんでしょう？ どうして野球なのか。私に教えて貰えないかな？』

相変わらずの出浦の断定口調。圭一はつかの間迷った。ここで出浦に真実を語ってしまえば、これから先、ずいぶんと楽になるだろうなと思ったのだ。

出浦の言うとおり、出浦は鋭い論調で世論を動かせるだけの力がある。彼女の一つの記事が、他雑誌・新聞のフォー、あるいは反論を呼んで、話題を盛り上げていくのである。

その初動で、穂の挑戦に好意的な記事を書いてもらえれば。

「……いや、しかし」圭一は口ごもった。野球への挑戦。それを語るだけではすまない。そして、穂の染色体異常に關してだけ、隠し通す事など、出浦の前では出来そうもない。

『どうしたの？ 時間の都合がとれないのかしら？ それとも』

「ごめん。出浦さん」圭一は出浦の言葉を遮った。「どの程度やれるか全く未知数な状態じゃ、たいした事は話せそうもないんだ。だから今回は遠慮させてもらいたいんだ」

『そう。仕方ないわね。また今度、挑戦に目鼻がついたら、インタビュースせてもらおうわ』

わずかに不機嫌そうな声音だったが、出浦の口調は平静さを保っていた。

「すまない。なんとか頑張つてそうなると思う」
出浦さんを穂は嫌ってるみたいだからな。電話を切った圭一はそんな事を考えていた。

圭一の仕事自体は何一つ変わりはしなかった。読み通り、大多数のスポーツ記者からは見放された格好になっていた。取材の件数は記者会見から数日で皆無となった。

騒々しかった周囲が平穏を取り戻したことで、瀬川は安堵している様子だった。また、圭一も決して気落ちしていなかった。むしろ、そのお陰でというべきか、穂に対する指導に十分な時間が取ることが出来る。練習は熱の入った内容になった。

入団テストの行われる十一月まで野球勘を失わないように留意しつつ、一次テストの五十メートル走と遠投に主眼をおいての地道なトレーニングが続けられた。

「絶対にプロ野球選手にしてやる」圭一はくりかえし、そう自らに言いかせ続けていた。

第五章

特訓の成果が試される日がやってきた。

入団テストの前に必要とされる申し込みに関しては、圭一が段取りした上で穂自身に行わせていた。女子の参加が初めてではないという事もあってか、圭一の予想に反して、申し込みは実にあっさりと言え、参加が認められた。

神戸ブルーウイングスの入団テストは、ブルースタジアム神戸と地下鉄線路と県道を挟んで隣接するサブ球場で行われる。

百人以上いる参加者のうち、女性は穂ただ一人である。陸上関係者でもなければ彼女の過去など知らないだろうが、球場入りした途端に注目を浴びる存在になってしまった。

穂自身は特に緊張したり恥ずかしがったりする事もなく、マイペースで身体を暖めている。度外れて神経が図太いのか、それとも集中力があるのか。恐らくはその両方なのだろうと圭一は思う。むしろ自分の方が緊張している事に気づき、苦笑する。

「ここ、意外と広くないですね」

白地に青のラインが入ったトレーニングウェアに身を包んだ穂が、一塁側スタンドの一番前の通路に立つ圭一の元に小走りに駆け寄って来て言う。

「まあ、四百メートルトラックの陸上競技場を見慣れているから、そう思うかも知れないな」

フェンス越しの会話に、穂が表情を緩めて頷く。その仕事はまったく普段と変わるところがない。その落ち着きぶりに、圭一は合格の可能性を賭けたい気がした。

「よお、調子はどうだい？」

初めから別行動を取っていた成田が、スタンドの段をどたどたと降りてきて、圭一の横にやって来る。何故か、出浦と一緒にいる。

「五十メートルと遠投は、どうという事はない。問題は午後の打撃テストだよ」

振り返った圭一はそう言いつつ、ちらりと出浦の表情を伺った。探るような目つきの出浦の表情には、どこか余裕がない。

彼女もまた、センサーシヨナルな記事をものにしようにと

必死なのだ、圭一はちらりとそんなことを思う。だからと言って、ここで穂の秘密を漏らすような真似は絶対にしない。

「さて。どういふ魂胆なのか、いい加減に白状して頂戴」

「仕事がかかっている、か？ とはいえ、見ての通りとしか言いようがない」

とぼける圭一。その言葉に出浦が納得するはずもない。

「どうだか」

「いい写真が撮れるよう、期待しているよ」

圭一と出浦のやりとりに、成田が慌てた様子でその場を取り繕った。圭一もわざとらしく咳払いを一つして、グラウンドのほうに視線を戻す。穂が怖い顔をして見上げていた。

注目の五十メートル走。合格ラインとなるタイムは六秒五十。百メートルを十秒後半で走る脚力の持ち主である穂にはどうという事の無いタイムにも思われるが、異様な注目を浴びる中で走らなければならない。実力を出し切れるか、圭一の胸に不安がよぎった。

五十メートル走は一度に二人ずつ走り、それぞれに二人の記録員が付き、タイムを計測する。穂の隣は、年齢制限ぎりぎりかと思われる冴えない風貌の男。自分の巡り合わせの悪さを嘆いているに違いない。一方の穂は、スタートラインに立つと顔つきが引き締まり、きりりとした、どこか男性的な表情に変わっていた。

クラウチングスタートは認められない。中腰に近い構えの穂は、スタートの合図の旗が振り下ろされると同時に飛び出した。圭一も手持ちのストップウォッチを作動させる。

「……いいぞー」

圭一の不安をよそに、穂は素晴らしいダッシュをみせた。

圭一の手動計測では五秒八。

「いよいよもって凄い」

安堵というより呆れの感情を吐き出すかのような溜め息を、圭一は思わず漏らしていた。

「完璧だぜ。六秒をきる奴なんて、みたところまだ何人もいない」

成田が傍らで笑顔を見せる。圭一も首肯する。だが、内心では全く別のことを考えている。これは本領を發揮しただけ。とりたてて喜ぶほどの事はない。問題はこのあとだ、と。

五十メートル走で合格ラインをクリアしたと思われる穂は、続く遠投の試験に移っていた。遠投の合格ラインは九十メートルとされている。

圭一の脳裏に、なんの練習もしていない槍投げを遊びで投げて六十メートル近くに届かせたという話が思い起こされている。その光景を圭一は直接見た訳ではないが、あの時の穂は、その六十メートル近くという記録の価値すら気づいていない様子だった。サバを読んでいたとも思えない。(専門種目ではなくても、今まで練習してきた通りの力を発揮できれば、心配いらぬ)

圭一が自らに言い聞かせながら見守る中、番号を呼ばれた穂が位置に付く。

大きく息を吸って、穂が腕を引いた。全身をバネのようにしなませ、ボールを投じる。球離れの瞬間の呼気が聞こえるようだった。穂の指先から放たれたボールが描く角度は、やや低い。だが、軌道はまるでバットで放った打球のように伸びる。百メートル地点に引かれたライン上で構えていた二軍選手がそれを捕球すると、あちこちで声が漏れた。

基礎体力測定が終わった時点で昼休みになる。圭一は球場の通用口で穂を出迎えた。

昼食は、市営地下鉄の駅からすぐ近くの噴水前のベンチで摂る。今回も、穂は弁当を二人分作っていた。今度は何事も起こらず、圭一は穂の料理の腕を知ることとなった。

「おいしいですか？」

弁当の蓋を開けたものの食事を始める気配のない穂が、不安と期待の入り交じった視線を、まっすぐ圭一の口元に向けて問いかける。

「うん、たいしたもんだよ。ただ、もう少し栄養のバランスを考えた内容にしたほうが良かったかな？」

食事の様子を、他人にじっと見られるのは恥ずかしいものだ。照れ隠しか、圭一はつい言わずものがなの言葉を口走る。

「はあい。でも、良かった。『まずい』って言われたら、どうしようかと思った」

どこかしら固い表情を見せていた穂も、ようやく自分の弁当に箸を付けた。

「バッティングの実技が難関だな。柵越え連発でもなければ

そして、愛おしげに抱くように持ったバットの芯を、自分の頬に軽く押しあてて目を細めるのだった。

午後からは、野手希望者は打撃の実技試験である。圭一は午前中同様、スタンドの最前列に陣取って穂の姿を目で追い続ける。

午前中の試験をくぐり抜けて生き残ったのは、投手志望の参加者のほうが多い。彼らはブルペンで投球をテストされる。どちらの志望者にせよ、かなりの人数が午前中ですでに姿を消していた。その為、ベンチ前でバッティングピッチャーの球離れのタイムリングを計りながら待っていた穂の番は、すぐに回ってきた。

圭一が先ほど手渡した真新しい特注バットは、平均より軽く作られている。あくまでもコンパクトなバッティングに徹する為だ。長打力のない穂には、無理に長打をアピールさせるより、確実に鋭い打球を放ち続けるしか道はない。グリッPEndを頬の脇に添える独特のフォームで構える穂に対し、三桁の背番号を背負うバッティングピッチャーが初球を投じた。穂が小さくクローズ気味に踏み込んでバットを振り抜くと快音と共に打球が飛んだ。ワンバウンドで中堅のフェンスに届いた。

「頑張れ……」

コーチなんてむなししい存在だ。いざという時には、実際にプレーしているのは誰なのかを痛烈に思い知らされる。圭一もまた、ただの観客と何も変わるところがないのだ。

再びバッティングピッチャーが振りかぶり、投げる。変化球。外に逃げるスライダー。穂は内側に大きく踏み込み、腕を目一杯伸ばして逆らわずに流し打つ。意外に伸びた打球は一塁線のぎりぎり内側に入り、これまたワンバウンドでフェンスに達していた。

「いい感じやな」午後の試験が始まってからずっと、圭一の横に座っている成田が呟く。

「仕事さぼっていいのか？」

「構うかいな。そんな気分になられへん」

穂が、内角高めの難しい球を綺麗に弾き返す。打球はレフト前へ落ちる。

「プロ野球は、俺にとっても夢やった」成田がぼつりと漏らす。

「野球やってた奴で、プロに憧れない奴はいないさ」

「ああ。だが、結局の所、どこかで自分の実力の無さに気

づいて、夢を断念していくんや。俺はなあ、今日ここに来て、まだ夢をあきらめてない連中が頑張ってる姿をみて考えさせられたがな。あいつらと比べて、俺はなんなんや、つてな。穂ちゃんに夢を託さなあかん俺は、いったいなんなんやろう?」

成田の吐き出すような言葉に、圭一は答えることが出来なかった。

一ヶ月後。再びサブ球場に、穂の姿があった。穂は無事、二次試験に駒を進めていた。

守備コーチが転がすボールに穂が前後左右にすばやく飛びつく度、グラウンドに断続的にどよめきが起きる。本来、同時進行であるはずの他の試験は、全て停止してしまっていた。居合わせた全員が穂の挙動を注視している。

「今更言うのもアレやけど、信じがたいレベルやな」

成田が、シャッターを押すのも忘れて呻く。本当ならば好位置を捜して動き回っているはずなのに、毎度俺の横にいて仕事になるんだろつか、と圭一は内心で不審に思う。

「才能が服着て歩いているような子だからな」

「それにしても、よくもここまで漕ぎ着けられたで。正味の話、途中までやばくさい思うとったさかいにな。せやけど、こうやって観とるとうまく行きそうな気がしてきたで。少なくとも、野球を始めて半年足らずの人間には見えん」

「そうだな」

穂のグラブが小気味よい音を立てて、白球を受け止める。あのグラブもお前がプレゼントしたんか、と成田が尋ね、

圭一は複雑な顔で頷いた。

実際問題として、いざ穂がグラウンドに出るとなると、せめて一流品を揃えてやる事くらいしか、圭一に出来ることはない。懐の痛み具合など、問題ではなかった。

「グラブだけやないな? スパイクも手袋も」

「ほんのわずかでも、彼女の技量の上乗せになればと思えば、な」

真顔になって答える圭一に、成田が茶化すような事を言う。

「偶には可愛い服でも買ってやれよ?」

「馬鹿いえ。彼女は……」

「……悪い。そんなつもりやなかった」

笑えない冗談を機に、二人して黙り込んでしまう。穂の

これから考えると、どうしても溜め息以外の何も出てこなくなる。

穂の抱える問題は体育連盟の他に、成田や圭一、穂の家族の他には、実際に性別検査を行った医師ですら知る者はいない。匿名の検査だったからだ。だが、穂が仮にプロに入団し、注目的であり続けるような事になれば、いずれどこからか真実が公にならないとも限らない。その時どうするか、二人は答えを持っていない。

敢えて危険の露見する可能性の高い道を歩むことになった穂の心中を、圭一はいまだ察しきる事が出来ずにいる。元々、プロ野球への挑戦は穂自身が言い出した事だったが、圭一達がそれを積極的の後押ししたのも事実なのである。入団テストに合格するかどうかは別としても、それが正しい道だったのか、圭一は疑問を拭いきれない。

「女がプロになることだって認められているんや。いわんや『男』の彼女……、けったいな言い方やな……、とにかく、穂ちゃんが恥じるような事は何もあらへんのや」

成田の言葉には、圭一を納得させるためというより、自らに言い聞かせている響きがあった。彼もまた、迷い、悩んでいるのである。

「マスコミの前でそう言えるか？」

そして圭一は、さらに難しげに眉をひそめ、深刻な顔つきになる。彼らの危惧する未来が現実になった時のことを想像している。実際に矢面に立つのは自分だ、という意識が、成田より一層彼の気を重くする。

「そっいえば、ジュンちゃん、あれから何か言ってきたか？」

気分を変えるつもりだったのか、成田がそんな事を尋ねてくる。

「ああ、色々とな」圭一は面倒くさそうに答えた。「今のところは、何も教える気は無い」

圭一の返事に対して、成田はぼつが悪そうに、ぼつりぼつりと話し出した。

「なあ、彼女は言ってみりゃあ身内やで。本当のことを教えてあげてもええんやないか？ 彼女も真実を知れば、悪いようにはせえへんと思うで。このまま、永久に隠し通せるもんか、俺には自信があらへん」

「成田の気持ちは判る。俺だって心苦しい。だけどな、彼女の職業は何だ？ 気を許せる相手なもんか。教えた次の日には週刊誌か何かにドカンと載ってるに決まってる」

「そうかなあ……。なんや可哀想になつてくるで、出浦さんみとつたら。ここんところ、穂ちゃんの周りで、ずっと取材に走り回ってるさかいになあ」

「それをいうなら、嗅ぎまわられている穂の身にもなつてやれ」

この件に関しては、成田と圭一の意見は真つ向から対立する。それは、出浦に対する信頼の差に拠るといえた。三人共スポーツ絡みの仕事に携わってはいるものの、圭一は実際の試合よりも、その裏方としての役割を果たしていた。

そう考えれば、表舞台で活躍する選手たちにスポットをあてている成田と出浦のほうに、仕事を共にする機会は多く、それだけ気安い間柄と言える。

信用できるとか、出来ないとか、そういう問題ではないのだ。圭一は自答する。敢えてマスコミの注目を浴びるような方向に足を進めてしまった以上、穂の秘密は最後まで隠し続けなければならぬ。その為には、もう誰にも、例え出浦であっても真実の一端すら掴ませるつもりは無かつた。

ドラフト会議当日。テストに合格していても、現行の制度ではドラフトで指名されない限り支配下選手として認められない。この日は運命の一日となるはずだった。

とはいうものの、圭一は午前中、圭一は継続的に行っている大学アメフトチームでのスポーツ障害に関する指導を行っていた。

瀬川に対して「仕事はきちんとやる」と約束した以上は、一緒にいて欲しいと穂に言われてもキャンセル出来なかつた。

確かに、穂が合格するにしろ、しないにしろ、マスコミ相手の会見は必要になる。神戸ブルーウィングスの大森監督が穂の存在を知って以来、マスコミ受けを狙った発言を繰り返した結果、不思議なほど関心が高まっているからだ。

元々、業師として知られ、派手なファンサービスを時折ぶちあげること有名な監督である。チームを日本一に導いた実績の持ち主で名将との誉れも高い。が、本当に穂の力量を買っているのか、それとも他に魂胆があるのか、その言動だけでは判断がつかないところがあった。だからこそ圭一にしても、穂の不安は痛いほど感じている。

しかし、結局圭一は予定通りの仕事をしてきた。筋骨隆々たるアメフト部部員たちを前に、筋肉を固くしない為のト

レーニングを伝授する。それは怪我を少なくし、身体能力の向上にもつながる重要な要素だった。

とはいえ熱心に指導を行いつつも、穂の件が気に掛かっているのも事実ではある。

本当に神戸は指名してくるだろうか。思考は同じところを旋回している。彼がいくら考えたところでなんら影響を及ぼせないとは理解していても、考えを巡らせるのをやめられないでいた。

指名され、入団してプロ選手になることが穂にとつてベストの選択とは、圭一はとても断言出来ない。だが反面、黒い考えも内心で渦巻いている。

かつての高校球児である圭一にとつても、プロ野球は憧れの場所であった。そこに教え子を送り出す。指導者としての本懐と言える。素直に喜ぶべき事なのかも知れなかった。

圭一は午前中の指導を終え、食生活のチェックなどとうそぶきつつアメフト部の部員たちと共に、学食での昼食を摂っていた。このあたり、まだ学生気分が抜けきっていない。

食堂の角にあるテレビが、NHKのニュースを流していた。お定まりの政界に関する話題に続き、ドラフト速報になった。

大学、あるいは社会人野球の有力選手が、逆指名によって意中の球団に指名される一方、逆指名権のない高校生は、クジに命運を託すことになる。上位の指名はすでに終了しているが、穂が指名されるにしてもまだ下位指名は現在も進行中のはずである。

本当に指名されたとしたら大騒ぎになるだろうが、そうでもない限り、彼女の名前をテレビで聞くことはないだろう。今頃彼女はこうしているだろうか、と穂のことをしばし考え込んでいると、いつの間にかアメフト部の部員たちが彼のことを怪訝そうに見ていた。

「ん？ どうかしたか？」

「なんか心配ごとっすか？ 今日はずっと考え事してるみたいっすけど？」

「いやためらいがちに、部員の一人が訊ねてくる。」

「いや特にそういう訳じゃないが。今日はドラフトだからな。元高校球児としては、やっぱり気になる。」

「意地悪く誤解させるつもりは無かったが、圭一は本音を

口にはしなかった。

「そうですか。……いや実は、自分もそうでした。アメフトは大学に入ってからです」
「ほう」

圭一は改めて、話しかけてきた部員のほうを見た。穂とは比較するのが馬鹿らしいほどの巨軀である。女性の腰回りに匹敵するほどの太股や二の腕がたくましい。

（だが、これほど恵まれた体格の持ち主ではあっても、プロ野球選手にはなれずに、こうしてアメフトを）

圭一はそこまで考えて、己の不埒な思い込みを恥じてこめかみを軽く小突いた。部員たちが一層怪訝な表情をした。

食事を終え、ニュースも終わったところで圭一は食堂を出た。ちょうど食堂のドアを開けて外に出た途端、携帯電話の呼び出し音が鳴った。穂からだった。

「先生……！」はしゃいだ声の穂。

「どうした！ どうなった！」圭一もまた、噛みつくような勢いで電話口に問う。

「やりましたよ、先生！ 指名です。指名がありました！……ブルーウイングスに、七位で指名されたんです！」

感極まったのか、言葉の後半は涙混じりの湿ったものになっていった。

夕刻。西の空には綺麗な夕焼けが映えている。RVが長い影を引きずり、穂邸の門前で静かに停車した。

車外に降りた圭一に呼び鈴を押す間も与えず、玄関のドアを開いて穂が飛び出してくる。

「先生、こんばんは」

穂の出で立ちに、圭一は一瞬言葉を失っていた。飾り気のない白いスニーカーに、くるぶしにかかるほどに長い茶色のスカート。クリーム色をしたタートルネックのセーターの上に、色調に合わせダッフルコートを羽織っている。手には可愛らしいデザインのポーチ。

考えてみれば、今まで圭一がみた穂の服装と云えば、ユニフォームかトレーニングウェア、私服でも大抵がTシャツにジーンズがせいぜい。スカート姿など、高校の制服以外でみるのは、今回が初めてだった。

「あの、この格好、変ですか……？」

穂自身も着慣れていない事を意識してか、恥ずかしそうに訊ねてくる。

「いや。穂の新しい一面を発見した気がする」

「……もう、からかわないで下さい」

わざと冗談めかした圭一の言葉に、穂は頬を赤く染め、すねるように顔を逸らした。

「さ、行くぞ」

「はい」

圭一に促され、穂がRVの助手席に乗り込む。今日はドラフト指名のお祝いという名目で、二人で食事に出かける事になっていた。

ドラフト会議終了直後から、二人の周辺は当然の事ながら大騒ぎになっていた。圭一にしても、本当ならばその日のうちにでも何か祝ってやるつもりでいたのだが、想像以上の取材攻勢の前に、ずるずると十日ほどが経過してしまっていた。

圭一がアイドリングさせていたRVのシフトレバーをドライブに入れ、サイドブレーキを外すと、車はゆっくりと動き出した。家の玄関の方にちらりと視線を送ると、穂が開けっ放しにして飛び出してきた玄関のドアを閉める、穂の母親と目があつた。簡単に会釈だけをかわず。

「ご両親には良く言っておいてくれよな。色々と迷惑を掛けたから」

RVを幹線道路へと走らせながら、圭一が助手席の穂に言う。

「迷惑なんて、思ってませんよ。私も、お母さん達も」

「そういう問題じゃないさ」

圭一が向かったのは、なんの変哲もない、普通の日本料理屋だった。本当ならば奮発して高級フランス料理のフルコースだろうと奢るつもりでいたのだが、穂の希望で庶民的なところを選んでいた。

「こういうところ、一度来てみたかったです。お父さんはいつもファミリーストランにしか連れて行ってくれなかったから」

のれんをくぐり、一段高くなつた畳の席に着いた穂は上機嫌だった。酒が呑めるわけでもないのに、と圭一は思うが、本人が喜んでいるのであればケチをつける気は無かつた。

予約は取ってあつたので、すでに注文通り寄せ鍋の具が用意してあつた。圭一は手伝いたがる穂を制して、ウエイターを交えて準備を進めていく。

「先生って鍋奉行なんですね」

「どうもこういうのは自分でやらないと気がすまない性分だな」

冗談めかす圭一に、穂は屈託無い笑顔を見せた。

鍋が暖まる前に、運ばれてきたウーロン茶で乾杯する。ドラフト指名を祝し、穂の前途が明るいものであることを祈って。たいして広くもない店内だが、客の数は多く、いささか気の早すぎる忘年会に盛り上がって騒々しい。そんな中ではあるが、一躍時の人となった感のある穂が、周囲の客に気づかれた様子はない。

それも当然かも知れない、と圭一は思う。服装も雰囲気も、テレビや新聞・雑誌に掲載される写真などとは全く違っている。圭一ですら、今の穂の姿を見てみると、彼女が史上初の女子プロ野球選手だという事実を忘れてしまいそうになる。

「先生、お酒飲まないんですか？」

難しそうな顔つきで周囲を伺っていた圭一に、穂が問いかけてくる。圭一は軽く頷いた。

「確かに一杯飲みたいのが本音だけだな。帰りの運転に差し支えると困る。万一のことがあったら、ご両親にも申し訳が立たない」

圭一は、穂の家の前で見た母親の顔を思い返していた。場合が場合だとはいえ、年頃の一人娘を夕食に誘ったのだと考えると、やはりきちんと挨拶しておいたほうが良かったな、と少し後悔もしていた。

「別にタクシーでもいいじゃないですか」

と穂は屈託が無い。タクシー料金を想像しただけで、圭一は渋い顔になる。

「あいにくこっちは、懐が寂しくてな」

「……あっ」圭一の言葉を聞いて、穂が小さく声をあげた。暖まってきた鍋の中に、具を放り込み始めていた圭一の手が止まる。

「どうした？ なにかこぼれてるか？」

「いえ。先生に渡しておくものがあつたんです。お金の話を聞いて、思い出しました」

穂がポーチの中から、封筒に収まった一枚の紙を引っ張り出して、圭一に見せた。

それは、二月のキャンプ開始までの期間の指導にあたり、圭一に支払う金額を記した念書だった。まだ見積もりもあげさせてもらっていないのに、と驚きながらそれを受け

取った圭一だが、そこに書かれた額に、再度驚かされた。新聞などで伝えられている、穂が神戸ブルーウィングスから貰う契約金、その半分ほどにも相当するほどの数字だったからだ。

「おいおい、いくらなんでも、こんな額を請求するつもりはないよ。貰えない」

「今回の分だけじゃなくて、ドラフト前までの指導料も込みになってます。でも、出世払いなんて、いい加減な約束しちゃったから、どれくらい払って良いか判らなくて……」

それからしばらく、押し問答が続いた。辞退する圭一に対し、穂は受け取ってもらわないと気がすまない、と最後は押し切った。その言葉には、感謝してもしきれぬという思いが溢れていた。

「だけどな。これからが、ある意味で本当の勝負なんだぞ。プロ野球にせっかく入団できても、活躍できずに数年くすぶっただけでユニフォームを脱ぐ選手だって一杯いるからな」

「判ってます、先生。だから、そうならない為にも、思い切り私を鍛えて下さい」

そう言い切る穂の瞳の澄み具合に、いい年をした圭一のほうが気圧されていた。

（穂は、俺のことを信じ切っている。俺の言うことを聞いてトレーニングに励んでいれば、絶対に悪い結果にはならない、そう思いこんでいる。そのひたむきさがあったからこそ、ここまで来られたのだろうか……）

圭一が抱いたのは、むしろ羨望に近い感情だった。だが、それを頭から吹っ切る。先に生まれた者として、穂の期待に応えてやらねばならない。選手に対する羨望など、あとからいくらでも出来る。

「よし、キャンプまでの数ヶ月、基礎体力作りだ。地味かも知れないが、プロになる以上は欠かせないからな。その為にも、しっかり食べて、栄養を付けておかないとな」

「はい、先生」穂は笑顔で、熱の通った鍋の具に箸を伸ばした。

年が明け、二月の声を聞いてキャンプが解禁になると同時に、神戸ブルーウィングスはキャンプを開始した。穂がいかに関心されようと、彼女が高卒ルーキーであり、ドラ

フト七位である事実は動かない。しかも、公式戦の経験は皆無である。

まず一軍帯同が許されるはずはないのだが、そこはやはり何事に付けても話題性を意識せずにはおれない大森監督である。当然のように穂は一軍主力選手等と共に、神戸ブルーウィングスのキャンプ地である宮古島に乗り込んだ。

宮古島での神戸ブルーウィングスのキャンプはここ数年来、チームが優勝戦線に絡む事が多くなって以来、多くの観光客を集めるようになっていた。空港ロビーに姿をみせた選手たちに、ファンだけでなく、島民からも暖かい声援が送られていた。

その反面、表面上は穏やかでも、腹の内では何を考えているか判らぬ輩も多数群がってくる。スポーツ記者等マスコミ陣と、解説者の肩書きをつけたプロ野球OB達である。

しかし、ファンや島民にしても、あるいはマスコミや解説者にしても、穂に対してはどう対応してよいか判らぬ、といった戸惑いを隠せない様子だった。

そして、穂の方が彼らの困惑を楽しむ余裕すらみせていた。

「練習についていくのが精一杯なんじゃないですか？」

あたりさわりのない質問を発する記者の一人に対して、穂は屈託のない笑顔を浮かべて、そんな答えを返したほどだった。

だが、彼女の言葉が真実を表したものでないことは日が経つにつれてあきらかになっていった。綺羅星のごとく居並ぶ強打者、好投手の中にあつてすら、穂の練習風景が人目を引くようになっていたのだ。

特に観客を湧かせるのは羽島仕込みの守備だ。守備コーチのノックに対して機敏に反応し、小さな身体を目一杯に躍らせて捕球する様はとにかく絵になった。飛びつけるぎりぎりの位置、つまり球際に強い。穂が背負う背番号五九が躍動する度、大きな歓声があがる。

しかしながら、宮古島に乗り込んでいる成田と違って、圭一は穂の雄姿を自らの目で見てはいない。自主トレでは指導を行ってきた圭一も、実際に穂がプロ選手としてキャンプに参加するようになると、直接関われなくなった。神戸のサブグラウンドで実施されている二軍キャンプならばともかく、宮古島では簡単に会いに行く訳にもいかない。

夜になると、穂は毎日のように電話してきた。プロ野球チームが組んだ練習メニューに関する内容の話なら、圭一の仕事の参考にもなった。が、どちらかといえば、とりとめのない話に終始することも多かった。

「そろそろ、仲のいいチームメイトが出来たか？」

「うん。みんないい人。神戸にして正解だったと思います。」

圭一は穂の問いに即答出来た。剣六朗。六年連続パ・リーグの首位打者を記録した、俊足好打、さらに強肩でも観客をうならせるスター選手である。メジャーリーグ進出が可能と言われる数少ない野手の一人である。

「当たり前だよ。神戸といえば剣が一番有名なんだから」
剣は中堅手と右翼手をこなす。穂とはポジション的には重ならないが、バッティングのスタイルから来るチーム内の位置づけはライバルと呼ぶべき存在であり、圭一はかなり細かい球歴や特徴を調べていた。

「あはは。詳しくすぎますよ、先生。あ、手元に選手名鑑持っているでしょ？ 私、剣さんとペア組んで練習してるんです。聞いて下さい、剣さんったら」

受話器の向こうから聞こえる穂の声はいつも弾んでいる。テレビに映る穂も元氣一杯で、なんの心配もいらぬように見える。だが、どうしても圭一は心の底から安心できずにいる。むしろ、事が順調に進めば進むほど、意識の片隅に押し込んだ不安が濃縮され、増殖していくような錯覚に囚われる。

日本初の女子プロ野球選手。当然の事ながら、誰もがそういう目で穂を見ている。

圭一が不安を募らせているのはその点だった。彼女の秘密が嗅ぎ付かれた時に何が起こるか、想像がつかない。はしゃいだ穂の声に耳を傾けながらも、圭一の意識の一部は「その時」の事を考えずにはいらなかった。

キャンプで注目を集めた穂は、キャンプ終了から間をおかずに予定が組まれているオープン戦の期間も、一軍帯同を続けていた。が、肝心の出番は簡単には来なかった。

「大森監督も人が悪いで。話題作りの為に穂を連れ回すだけで出場させへんのやったら、二軍で経験を積ませる方がなんぼかましや」

ある日、瀬川接骨院にぶらりと顔を出した成田などは、そう憤慨していた。瀬川は往診に出ている、圭一が留守を

守っている。圭一も一応治療を手がけるのだが、やはり瀬川ほどには信頼されていないのか、客足はまばらである。

「心配はいらぬ。大森監督だからこそ、使いどころを見計らって出場させてくれる」

「使いどころね……。そんなもん、どこにあるんや?」

成田が、納得できない様子で口をとがらせる。

「俺たちみたいなアマチュアには見えないところさ。どっちにしろ、穂はもう、プロ野球チームの支配下選手なんだ。俺がどうこう言える筋合いじゃあない」

「全くのノータツチなんか? どうせなら、お前も一緒に雇って貰えば良かったんや」

「そんな事が可能なら、とっくにそうしている。残念ながら、俺の評価はそんなに高くない。ただのトレーナー見習いだ」圭一は静かな口調で応じた。「それにだ。逆に聞くが、成田はどこかのスポーツ新聞が雇ってくれるとしたら?」

「一も二もなくOKするか?」

「痛いところを衝くなあ。魅力的やが、おそらく悩んだ末に断る。そんなところやるな。ええのか悪いのんかよう判らんが、俺もお前も、小なりとも一国一城の主、つてな暮らしに慣れすぎたかもしれへんな」

「ま、とはいうものの後悔してる訳でもない」

「そこが難しいところだな。自分の生き方はこれでええのか。悩みはするが、結局の所、自分のやり方に妙な誇りを持ってしまうとるさかいに」成田がわざとらしく顔をしかめる。

圭一も苦笑して頷いた。成田の言うとおりだと思っっている。が、ふと穂の場合はどうなのだろうか、という思いが頭をよぎった。

それから数日後、前年度におけるセンチュリーリーグの首位チーム・横浜ベイストームズとのオープン戦で、ついに代打で穂が打席に入った。注目の初打席。マウンドに登るのは球界屈指のストッパー・榊。百四十キロ後半を記録する速球と、落差の大きいフォークを武器に、セ・リーグの並み居る強打者をねじ伏せ続けている。

穂にとっては荷が勝ちすぎる相手ではあったが彼女は一切臆さずに立ち向かった。そして榊も本気の投球で彼女の真剣さに応じた。

勝負は、結果から言えばサードゴロに終わっていた。ただし、打球が高くバウンドしたので、あわや内野安打かと

思われた際どいプレーだった。記録はアウトでも、その能力の高さは十分アピールされた。そして、その後はたびたび出場機会が与えられた。穂は懸命にチャンスをものにして、ついに一軍登録のままペナントレース開幕を迎えたのである。

神戸ブルーウィングスは穂の獲得によって、野球のルーすら知らない多くの人々からも、かつてない注目を浴びていた。だが、埼玉レオパルズからのペナント奪回を願うファンの期待を裏切り、開幕ダツシュに失敗した。他の五球団から容赦なく白星をあげられ、一チームで借金を一手に背負い込む苦しい立ち上がりとなった。

それに伴い、独裁色の濃くなっていた大森監督の長期政権に対し、不満の声があちこちから聞かれるようになっていた。穂の入団に限らず、とかく大森監督は人目を引くパフォーマンスを好んだ。

勝っているうちは好意的に見られるパフォーマンスも、負けが込むとすぐさまそれは汚点となって跳ね返ってくる。穂が真価を発揮するより前に、大森監督批判のやり玉にあげられる日が来るのではないか、圭一はそれを恐れながら、ニユースに耳を傾け続ける毎日を過ごした。当然の事ながら、いかな穂にしてもいきなりスタメンなどという事はあり得ない。ベンチ入りはしても出場機会は無い、という期間が長く続いた。

第六節、ゴールデンウィークあけの対埼玉レオパルズ戦のナイターでようやくシーズン初出場の場面がやってきたが、大方の期待を裏切り、代打でも代走でもなく、守備のみの出場だった。

残念ながらテレビ中継はない。幸運にも所沢ドームのスタンドに詰めかけていた一万八千名の観衆だけが、プロ野球史上に残る出来事を目撃者となった。

九回裏。アナウンスに送られ、稲富に替わってショートの守備位置についた穂に、大きな歓声が起こる。試合の展開は剣が猛打賞を記録する活躍もあり、スコア七対一で神戸ブルーウィングスの大量リード。ほぼ勝敗は決しているが、前年度パ・リーグ覇者である埼玉レオパルズは簡単に試合を投げ出さない。

そして彼らにとっては幸いにも、一番打者からの好打順。先頭打者・杉岡の打球は狙いすましたかのように三遊間に飛んだ。回り込んだ穂が慌てることなく、ワンバウンドで

打球をグラブに収める。すばやい動作で一塁に送球。当たりが強かった分、余裕があった。無事アウトにする。大歓声に、穂は手を振って応じる余裕を見せた。

続く二番・阿蘇も穂の正面へ打球を放った。強烈なライナー。一瞬後、反り返るように飛び上がった穂が捕球すると、いよいよ歓声は狂気に近くなった。

三番・仲本もまた、強烈な打球をセンター方向に打ち上げた。あわやホームランという大飛球。が、センターを守る剣がフェンスをよじ登り、さらにそこからジャンプしてキャッチした。

「最後は、いいところを剣さんに持って行かれちゃいました。結構頑張ったんですけどね」

試合後の穂は群がる取材陣に対し、こんな屈託のないコメントを残していた。

その日の晩、自室でテレビを見ていた圭一の携帯電話が鳴った。通話ボタンを押した途端、穂のはしゃいだ声が飛び込んできた。

「初出場おめでとう。ちょうどスポーツニュースで埼玉対神戸戦やってるぞ」

圭一にしても、我が事のように嬉しい出来事だった。つい、声が裏返りそうになり、慌ててそれを取り繕うように咳払いをする。

「ありがとうございます！ 先生のお陰です！」

耳が痛くなるほどに、受話器の向こうで穂が甲高い声をあげる。

「いや、結局は穂の努力の結果だよ。本当に凄い……」

「あの、先生、明日からの浪速ドームでの大阪との三連戦、見に来てくれませんか？ また試合に出して貰えるかも、って剣さんが言ってたから、それで、その」

穂と剣は、ポジションこそ異なるものの、俊足で守備に長け、シャープなバツティングの距離ヒッターという面では同じ様なタイプでもある。その為か、今までに聞いた穂の話では、二人は結構気が合うらしく、会話にもしばしばその名前が登場する。

（新聞やテレビだけを情報源にしてたんじゃ、そのあたりの事は伝わってこないな……）

一瞬、今自分がおかれている状況より、剣のほうに穂の事を詳しく知っているのだ、という嫉妬じみたものを感じる。が、二人が揃って練習している光景をみて要らぬ邪心

を持った三流スポーツ誌が、一人の交際を手前勝手に「すっぱ抜いた」事があったのを思い出し、すぐに圭一はその思いを小馬鹿にするように鼻を鳴らしてうち消した。そもそも、かつてと今とでは立場が違つて当然なのだ。

圭一はスケジュールを書き込んだシステム手帳を開いた。なんとか時間の余裕はあった。

「また試合に出られると良いな。よし、応援に行こう。穂の守備が楽しみだ」

「わあ！ 絶対、来て下さいね！」

受話器の向こうで躍り上がって喜んでいる穂の姿が、思わず圭一の目に浮かんだ。

圭一は約束通り、浪速ドームを訪れていた。とかく、足を痛めやすい人工芝などを専門家が批判したがるドーム球場だが、その利点は大きい。内野席から無骨な鉄骨が組み上げられた天井をしばし見上げ、圭一はそんなことを考える。

それは単に、雨天中止が無くなるだけの問題ではない。妙な風が巻いてボールを持って遊ぶ事もなければ、夏の強烈な暑さとも無縁だ。

思考力そのものが溶けて無くなりそうな炎天下の元、マウンド上で苦闘した日々を思い出す。やはり一度くらいは屋根付き球場でプレーしてみたかった。スタンドからではなく、グラウンド上で打球を追う際、屋根はどんな風に見えるのか、自分の目で確かめたかった。

成田や東は、穂に己が果たせなかった夢を託している、と言った。自分はどうかだろうか、圭一は自問する。答えは否だった。ただ自分の力量と穂の実力を信じて、手助けしてきた、それ以上の意味はないし、それ以上の意味を持たせてはいけない、と言ひ聞かせている。

神戸ブルーウィングスは移籍組ながら先発ローテーションに食い込んでいる左腕・森畑、近畿ボルテックスは新加入の外国人投手・ライト＝シャーマンを、それぞれ先発のマウンドに送った。

試合は二回、一度は解雇されながら長距離砲不足から復帰したばかりの外国人選手・グリシア＝ランサーのソクホームランで動き始めると、続く三回、一番打者・剣の満塁ホームランで早々と勝敗が決定づいてしまった。

穂の出番はないかと思われた八回表。トップバッターに

代わって代打・穂が主審に告げられ、場内にアナウンスされる。

打席に入った穂の手には、入団テストの際に圭一が渡したバットがしっかりと握られていた。三塁側の内野席の通路から見ていた圭一が頬を緩める。穂が「宝物にする」と言ったバットを、決してタンスの奥になどしまい込んでいなかった事が嬉しかった。

史上初の女子選手の初打席である。

空気が自然と張りつめ、熱気を帯びて盛り上がっていくのが判る。近畿ボルテックスの本拠地・大阪だけに、ドーム球場でありながら旧球場時代から受け継がれた品のないヤジが飛ぶ。こればかりは圭一はあまり好きになれなかった。どうしても自分がグラウンドでプレーしている感覚が抜けない事実を、否応なく思い起こしてしまう。

マウンド上で強ばった表情を抑えきれない近畿ボルテックスの二番手投手・東海が初球を投じる。内角高めに切れ込むストレート。踏み込んだ穂はのけぞり気味に見送る。

これを見て、ベテラン捕手・新岡は徹底的に強気のリードで攻める腹を固めたらしかった。一球外角に外させると、再び内角低めをつくストレート。が、先ほどよりボール一個分ベース寄り。穂のバットが小さくテイクバックしてから鋭く振り抜かれる。

鈍い打球音がドーム球場に反響する。スピンのかかった打球は三塁側の内野スタンドに飛ぶ。ちょうど圭一の間近に飛んできた。通路に落ちて大きく跳ねてしばらく経ってから、ファールボールに注意する旨のアナウンスが空しく響く。

（相手のペースにあわせるな。全ての流れを自分のリズムに引き込むんだ）

咄嗟に身構え、半ば捕球に備えていた自分に気づいていた圭一だが、自らを笑っている余裕は無かった。ひたすら、穂の挙動をみつめ、好打が出ることを願いつける。

東海が投じた四球目は、シュート回転がかかり、穂の胸元を襲う。その瞬間、穂がバットを寝かせた。近畿ボルテックスのファーストとサードが突っ込んでくる。穂はバントし、球威を殺したボールを転がす。同時に一塁ベースに向かってスタートを切る。

持ち前の瞬発力が、爆発的なダッシュを生み出していた。速い。ビデオの早送りのように速い。しかしながら、肝心

のボールは惜しくもラインを割っていた。

穂が垣間見せた俊足ぶりに場内がざわめくが、カウントは二・二。穂は追い込まれた。

一方、いまだ普段とは異なる緊張感に慣れないでいる様子の子の東海が、気を抜かずに五球目を投げ込む。再び内角高めにストリートが来る。内角攻めにも臆さず、クローズ気味に踏み込んだ穂が強振する。が、伸びのあるストリートに、芯を外された。

嫌な音がして、穂のバットがぼつきりと折れた。ヘッド部分が三塁線に飛ぶ。同時に打球は三遊間の一番深いところへ力無く転がる。ためらうことなく手元に残ったグリップ部を投げ捨て、穂が一塁ベースへと走る。

歓声。近畿ボルテックスのショート・文野からの送球もすばらしい速度とコントロールだったが、陸上式に胸を反らせて一塁ベースを駆け抜けた穂のほうが一瞬速かった。一塁線審の両腕が水平に広がった。大きく、暖かな拍手が穂に送られる。

だが、一塁ベース上に立つ穂の顔に笑顔は全くなかった。初打席でバットを折られたことが心底悔しいらしく、憚然とした表情を隠そうともしない。また近畿ボルテックスのファン という名目の、無意味なヤジをとばしたいだけの酔漢 が下劣な言葉を飛ばす。近代的なドーム球場にはなんともそぐわない光景だった。

しかしこの時ばかりは圭一も苦笑を禁じ得ない。呟きが漏れる。

「球史に残る内野安打だけ。……にっこり笑って見せるよ。テレビが映してるんだからさ」

穂は、ヒットを打てたことより、バットを折ったことのほうが重大時なのか、まだプロ選手としての心構えが足りないか……？

その夜、泣き出しかねない口調で謝り続ける穂の電話に閉口させられ、追加のバットを約束する羽目になるとも知らず、圭一はそんな思いを抱いていた。

第六章

思い出深いバットを初打席で失ったことはともかく、一度きっかけを掴めば、あとは拍子抜けするほど順調に進んだ。

穂は、五月が終わる頃にはもはやレギュラーになりつつ

あった。依然としてペースのあげられないチーム事情も、彼女にとってはチャンスといえた。それでもスターティングメンバーの組み替えが多い事で知られる大森監督の元でなければ、とてもこう簡単にチャンスは得られなかっただろうが。

始めは八番だった打順は七番、さらに二番へと跳ね上がる事もあった。打率は二割八分前後をキープ、特に得点圏打率は三割を越える勝負強さをみせていた。また、数字に表れないところでも、俊足で果敢に盗塁を決め、小さな身体を目一杯使って捕球する様は、チーム全体に活気を与えていた。神戸ブルーウィングスは次第に勝ち運に恵まれるようになっていた。六月の下旬になる頃には、早くも新人王当確、オールスター出場間違い無しとの噂があちこちで聞かれるようになっていた。

チーム自体も、ようやくのことで四位に浮上。このままの調子で行けばAクラスに食い込むのも間近。穂がその立役者である事は、いまや疑うまでもなかった。

穂は、相変わらず毎日のように電話をしってくる。それでも圭一は、彼女が遠い存在になってしまったような気がしてならない。直接顔をあわせていないからではない。相手は、今や全国的に名前を知られたスーパースターである。圭一は、たとえ球場に観戦しに行ったとしても、とても声を掛けられないような気がしていた。

(それでも、今が一番いい時期なのかも知れないな)

穂は完全に追い風に乘っている。

そう思った圭一は、唐突な不安に囚われた。もし今が最高なら、あとは落ちるだけか？

嫌な気分を振り払うように、六月末のある日、圭一はブルースタジアム神戸に観戦に訪れていた。相手は東日本フアランクス。

穂はこの日は九番に入っていた。大森監督の采配の特徴の一つが、対戦相手の状態を類推して、毎日変更が加えられる打順だった。その為、レギュラーメンバーと呼べるのはごく限られており、大森監督の戦術的判断から外れる場合は、たとえ相応の実力があっても試合に出られないこともあり得る。九番に下げられているからと言って不満を感じる必要はなかった。チームが上昇気流に乗っているという雰囲気もあり、ブルースタジアム神戸は盛り上がりつつある。

「我らが水沢穂の人氣ってのはどんなもんやろっな」

圭一と同じく、仕事そつちのけで試合を観に来た成田が何気なしに呟く。

「あれを見てみる」

圭一は笑って、右翼側スタンドの一点を指さした。「神速で突っ走れ！ 五九・水沢」と大書きされた横断幕が見えた。

一回表、神戸ブルーウィングスの先発・シュレーダーは三者凡退に押さえ、穂の守備機会はないままチェンジ。一回裏、神戸ブルーウィングスの攻撃は、先頭打者が幸先よく一・二塁間を破る。が、後続が続かず得点につながらない。

三回裏になって、ようやく圭一達が待ちこがれた穂が打席に入る。

打席で足を固めた穂は左手に持ったバットをグリッップを顔の前で一瞬構えて、ヘッドは相手投手に突きつけるような角度で傾いている。それから一度左腕を伸ばしてからぐいと手元に引き寄せる。中世の騎士がサーベルを構える際の儀礼を思わせる、打席前にいつもみせる習慣的な拳動だ。

「もしお前がプロのピッチャーだったとして、女の子相手に本気で投げる気がするか？」

「……今の打率は二割七分八厘。嘗めてかかる奴は一人もいないよ」

スコアボードに表示されている彼女の打率に視線を移して、圭一が重い声で応じる。その眼差しはすぐに穂に向けられる。一投手一投足たりとも、見逃したくはなかった。

「せやなあ。やつぱり手は抜けないやろなあ」

だが、東日本ファランクス先発投手の石倉を相手に、簡単にツーストライクを奪われる。

追い込まれた穂は動揺した風も見せず、丹念に足を均してから、頬の脇にグリッップエンドを添える独特のフォームで構え直す。

「あのバッティングフォーム、何度見てもお前の打ち方にそっくりやな」

成田がにやつきながら感想を漏らす。

「まあ、俺が教えたんだから、構えが似るのも仕方ないかも知れないが……」

二人の会話など想像もつかないであろう穂は、四球目の内角に突き刺さるストレートを強振した。強烈な打球が三塁線を襲つ。

サード・高久保が長身を伸ばして横つ飛びに飛び込むが、グラブの先を抜ける。レフト・東崎がクッションボールを処理して返球したときには、穂は悠々と二塁に達していた。「心配はいらへんで」よほど圭一が浮かない顔をしていたのだろう、成田が慰めるように言った。「聞けよ、この大歓声。みんな、穂ちゃんの味方や」

「そうだな。楽観していいのかも……」

言葉とは裏腹に、圭一の顔は試合終了まで晴れなかった。

試合は四対二、神戸ブルーウィングスが接戦をものにして勝利を収めていた。

ヒーローインタビューは穂ではなかった。圭一はそれを聞き流して席を立った。成田もあとに続く。

帰路につく観客でこった返す地下鉄の駅前を後目に、二人は陸橋を渡り、プロ野球の試合が行われるときのみ開かれる臨時駐車場に足を向ける。ブルースタジアム神戸は交通の便が悪いことで知られていた。

まともな照明すら据えられておらず、舗装すらされていない臨時駐車場の中。走り去る他の車のヘッドライトと、星明かりを頼りにおおよその見当をつけて圭一の黒いRVの車体を捜しながら歩く。こういう時は車高の高いRVは目につきやすい。

が、自分の車にたどり着いた時、圭一はぎょつとしてポケットから鍵を取り出す手を止めた。ボンネットの向こう側に人影が見えたのだ。成田もそれに気づいて身構える。

「どうしたの、そんな怖い顔して？」

聞き慣れた、いささか堅く、そして張りのある声。出浦が微笑んでいた。

「誰かと思えば、出浦さんか」圭一はふうと息を吐いた。

「なんでこんなところに？」

「俺たちを待ったんかいな？ なんぞあつたんか？」

言いながらも成田は嬉しそうだった。

「……良い試合だったわね」

出浦は成田の問いには答えず、圭一を見ながらそう言った。彼女の背後を一台の乗用車が走り抜ける。タイヤが砂利を噛む耳障りな音が響いた。

「そうだな。穂は二安打だった。どっちも得点に結びついた」

「私は、彼女はもっと多くのファンに知って貰っても良いと思ってるの」

「なんや、そんなことは心配あらへん」ややアルコールの入った成田の大声。「充分、穂ちゃんはファンに愛されとる。大人気やでえ」

それを聞いた出浦が、一瞬ではあるが嘲笑じみた表情をみせたように、圭一には見えた。

「そうね。だからこそ私は、彼女の真実をみんなに伝えたいの」

穂の真実。圭一の心臓が跳ねた。意識するより先に右肩を回していた。出浦さんは気づいたのだろうか？ 俺たちが一年に渡って隠し通してきた事実だ。

「なんのこっちゃいな？」

言葉を失って返事できずにいる圭一とは対照的に、成田は図太く聞き返していた。

「明日になれば判るわ。今日はそれを伝えておきたかっただけ」

艶然と微笑むと、出浦はくるりと背を向けていた。せつかくやからこれから茶でもしばきにいかへんか、という成田の声は、彼女の耳には入らなかった様子だった。

「なんやろなあ」

首をひねる成田をよそ目に、圭一は試合を見ながら感じていた、漠然とした不安がさらに一層膨らんでくるのを押さえることが出来ずにいた。

早朝。圭一の部屋で携帯電話が鳴っていた。圭一は欠伸をしながら布団を抜け出して携帯電話を手に取ると『通話』ボタンを押した。電話の相手は成田だった。

「何だ、こんな朝早くに」

『まだ寝とつたんかいな。早く起きて新聞を見てみい』

圭一の間違った声のせいかな、成田はひどくせかすような口調だった。

成田に言われるまま、圭一は携帯電話を持ったまま、新聞受けから束になって押し込まれていた新聞を引っぱり出した。商売柄、情報収集の為、日経からスポーツ新聞まで、多種多様だ。

「どれだ？」

『スポーツ新聞ならどれでもかまへん』

圭一はざっと視線を走らせる。だが、スポーツ新聞の一面には、取り立てて驚くにあたらない記事しか見つからない。

『記事やない。週刊誌の広告や』

記事の下に、週刊誌の広告が二つ並んで載っていた。その内の一つに大きく書かれた見出しに、圭一の目は釘付けになった。そこには最も恐れていた、穂の『性別』についての記事の掲載が明示されていた。

「……これは！」

『大騒ぎになるで、こりゃ』

「どこから漏れたんだ……」圭一は自分の呟きに閃くものがあつた。

「おい！ お前、もしかして、出浦さんに何か話したんじゃないのかっ！」

『いや、それは……』

その歯切れの悪さに、圭一は確信を持った。今、電話で話をしている相手 成田こそが張本人だ、と。

「どういふことだ！」

『俺が教えた訳やない』

「何を今更！ お前以外のどこから、情報が漏れるって言うんだ」

『……確かに、穂ちゃんの事について聞かれた。せやけどな、彼女は俺の所に来たときは、大体の事情を把握しとつたんだ。俺が聞かれたのは、いつから知つとつたか、それだけだ。な、信じてくれ』

「なんて事だ……」

成田を責める余裕はなかった。ついに恐れていた事態が発生してしまったのだ。

その日の昼過ぎには、成田の言った「大騒ぎ」が現実のものとなっていた。穂本人は言うに及ばず、大森監督を初めとする神戸ブルーウィングス球団関係者が手当たり次第に取材攻勢に見舞われていた。

当然の事のように、圭一の事務所にも取材陣が襲来した。

圭一は、「性別による規制がないプロ野球において、穂の性別に関して、何らかの問題があるとは思えない」との主張を貫いていた。しかしながら、相手は、「性別の問題を隠して入団した」との点にこだわり、話は平行線をたどるばかりだった。

「私にとつても、こういう形の騒ぎは本意じゃないわね」

取材陣が一通り引き上げたあと、出浦が気むずかしそうな表情を見せた。彼女は他の記者の前では一切質問を発しなかった。うなだれた圭一が、上目遣いに出浦を見る。怒りはむしろ、自らに対して向けられていた。穂を守りきれ

なかったという自責の念だ。

「こんなことを暴き立てて、楽しいか？」

「楽しい、楽しくないの問題じゃないわね。どこまでも真実を追究し、それを世間の人々に提供する、それがジャーナリズムよ。善悪を云々したつもりはないわ」

私が提供した情報を世間がどう判断するかは、私の考える事じゃない。出浦の口調はどこまでも冷徹だった。圭一には返す言葉がなかった。反論する気力も失せていた。

その日は接骨院でも仕事にならず、やむなく瀬川は全ての予定をキャンセルして、圭一を安アパートの自室へと帰していた。明日になれば、今日と変わらぬ取材を受けるかも知れない。圭一が何を答えても、穂の心の傷は痛みこそすれ、癒されることは決してない。

「どうすればいいんだ……」この一日、何度と無く繰り返した独り言が口から漏れる。

そのタイミングを見計らうかのように、ドアがノックされた。時計を見ると、すでに十一時を過ぎていた。

「こんな夜中まで取材かよ……!!」

最初は応対せずにおこうかと思っただが、悪いと思っていなければ堂々と相手になるべきだ、そう思い直してドアを開けた。そこには、疲れ切った顔の穂が立っていた。

「穂……!! どうしたんだ」

「逃げて、来ちゃった」

無理に笑う彼女の姿が痛々しい。古傷をえぐられたシヨックがありありと見て取れた。

「記者連中に嗅ぎ付かれなかったか？」

「たぶん……」

「とにかく、入れ」圭一は急いで穂を招き入れ、ドアを閉めた。

「こんなつもりじゃなかったのに……!!」

緊張の糸が切れたのか、穂は下駄箱に寄り掛かって泣き出してしまった。

圭一はどうか彼女をなだめながら、居間に連れていった。

「ごめんなさい。こんなことしちゃって」

「気にしなくて良い。責任はオレにもある。大丈夫だ。今は確かに辛い時期だ。でも、近いうちに風向きは変わる。」

きつと試合に出られる日が来るよ」

「先生……。嬉しい、ありがとう……」

しばし息をのんで立ちつくした穂が両目に涙を溜め、圭一の胸に飛び込んだ。圭一はためらいながらも、押しつけるような真似はしなかった。

長い夜になりそうだった。自分たちが何をやってきたのか、何を為そうとしていたのか。否応なく考える事になる。

「先生、初めて私と会ったときのこと、覚えてますか？」

ゆっくりと流れる時間の中、穂がそんな問いかけを圭一に向けてきた。

「ああ。あの時から、多くの部員の中でも輝いて見えた。これは本物だと直感したよ。その見立ては間違いないじゃなかった」

「ありがとうございます」掛け値無しの褒め言葉に、穂が照れる。「先生はあのとき、『疲れるのは嫌かい？』って仰ったでしょう？ 目から鱗が落ちたって言うか、あの一言を聞いた時のショックが忘れられないんです」

自分とは全く違ったものの考え方をする人がいるんだ、と気づかされた、と穂は言う。

「初めの頃は、ずいぶんと素っ気なかったような気がするけどな」

「それは、先生にどうやって話をしたらいいか判らなかつたんです。……でも、考えてみれば私、あの当時から今まですっと、自分のことしか考えてなかったですね。先生にも、成田さんや羽島さんにも、いっぱい迷惑を掛けて……」「じゃあ、どうする？ 野球を辞めるか？」

「意地悪いこと、言わないで下さいよ」穂が肩をすくめる。

「本当のことを言えば、最初、野球をやりたいって言って、入団テストを受けた頃なら、こんなことになったら辞めていたかも知れません」

穂は、自分の気持ちを整理するように、言葉を選びながら話し出す。自分が医学的に女性ではないと知らされた時、自分の知っている全ての人々から見捨てられるのではないかと怯えたこと。何より、圭一が自分のそばから去っていくのではないかと恐怖したこと。

「だって、先生が私に、生きていく上の指針みたいなものを教えてくれたじゃないですか。その先生がいなくなったら、私はどうして生きていったらいいか、判らなくなりません」

当時は、圭一の気持ちを引きたい一心で野球を始めた、穂は正直にそう打ち明けた。その上で、今は違つと断言す

る。

「いっぱい練習して、プロにもなれて、試合をしていくうちに、どんどん野球が好きになっていったんです。今回のことで、それがはつきりと判りました。悪く言う人もいるけど、私を応援してくれる人もいる、そう信じてます。でも、急に大騒ぎになって驚いて、また先生にご迷惑かけちゃいましたけど」

圭一と穂は約一年半の時間を共有してきた。彼女には、そして自分にとっても、一度立ち止まった上で、これまでの事、そしてこれからの事を考える時間が必要だったのだ。「そうか。嬉しいよ。穂がそこまで考えてくれるようになったんだな。もうすっかり、大人になっていたんだ……」

初めて出会った時に感じた輝きは決して消えてはいない。だが、穂はもう、自らの価値に気づいていないアマチュアではない。

「今までは子供扱いだったんですか？」穂がむくれた。

「そう怒るなつて。で、大人の穂は、今どうしたい？」

「……やっぱり、試合に出ます。先生にあって、話をして、決心がつかしました」

穂の言葉に圭一は頷く。

「無理はしなくても良いんだ。野球なんかやめたら、普通の生活に戻るんだからな」

「大丈夫です」

動機は不純だったかもしれないけど、今は野球が凄く楽しいんです。それに、野球で認めてもらえることもありましたし。そう言った穂は恥ずかしそうにうつむいた。自分の言葉に照れていたが、決して口先だけの思いではなかった筈だ。

「強いな。オレは二人してどこか遠くに逃げることも考えていたんだけどな」

「それだったらちよつと、劇的すぎてリアリティがないですよ」

穂は肩を軽くすくめ、笑った。満足と羨望を抱きつつ、圭一もつなずく。

この状況にあって、なおもグラウンドに立てる強靱な精神。逃げることを『リアリティがない』と言つてのけられる神経。なにより、その成長が嬉しかった。

「よし、そうと決まれば、帰るか」

「それでも良いですけど、ちよつと休ませてもらえませんか。やるべきことが決まってほつとしたら、眠くなつてき

ました」言って、穂は畳の上で横になった。

「そんなところで寝なくても。布団ぐらい貸してやる」

押入を開けながら圭一がそう声をかけた時には、穂は既に軽い寝息をたてていた。すっかり安心しきった寝顔に、圭一は苦笑する。

「まったたく。いつまで経っても、無邪気というか……」

エピローグ

早朝。ブルースタジアム神戸のすぐ近くにある『緑濤館』の近くにRVが停まった。

「時間が解決してくれることもあるさ」

圭一自身、確信がある訳ではなかったが、今はそれ以外の言葉が思いつかなかった。

「判っています。私自身にも、どうしようもない事実ですから。結果を残していけば、認めてもらえると信じています。本当にありがとうございます。ご迷惑ばかりかけてしまつて……」助手席の穂が頭を下げる。

「本当に大丈夫か？」

ここまで来て、我ながら無意味な問いだと圭一は内心で自嘲する。だが、それでも問わずにはいられない。本当に大丈夫なのか。これから立ち足はだかるであろう世間の好奇の視線に耐えてプレーすることが出来るのか。

「はい。もう、吹っ切っちゃってますから。ちょっと眠いですけど」

そう言つて顔をほころばせる穂の笑顔には、昨晚の痛々しさは感じられない。心からの笑みであることが、圭一には嬉しかった。

「そうか。なら良いが」

「……あの、先生？」

「なんだ？」

「私……。いえ、なんでもないです」

しばしの沈黙が流れる。穂が何を言いよんだのか、圭一は敢えて問いたささない。恐らくは感謝の言葉だったのだろう。だが、それはもはや、いちいち口にする必要もなかった。穂もその事が判つたからこそ、言葉にしなかつただ。

「頑張つて来いよ」

「はい。思いつ切り、楽しんできます」

誰かが果たせなかった夢を託され、それを叶えてこそプロ。水沢穂は、プロ野球選手なのだ。穂は、再び丁寧に頭を下げ、ドアを開けて車外に出る。肩には野球用具の詰まった大きなバッグが担がれている。

ユニフォーム姿ではあっても、選手というよりは熱心な応援団といった風情のある小柄な後ろ姿。だが、彼女が背負う『MIZUSAWA』の文字も、背番号五九も、圭一には大きくたくましく見えた。

「きつと今回の件でも、何かの糧にして成長してしまうんだろうな。俺なんか指導するには、やっぱりもったいなさ過ぎる娘だったな……」

圭一は思った。人生はしばしばマラソンに例えられるが、彼女の場合は短距離走なのだ、と。決して走り続けているわけではない。ゴールしてしまい、目標を失ってさまざまの時もある。しかし、彼女の目が前を向いている限り、いつか必ずスタートラインが見えてくる。そして、一度スタートを切った彼女を止められるものは存在しないのだ。

圭一は自分自身と、穂の後ろ姿に向けて大きく頷いた。

「一気に駆け抜ける、穂！」彼女は今まさに、新たなスタートラインに立とうとしていた。

『スプリント&ドリフト』 新高太郎 著

sakka.org